



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                     |                                                                                                 |
|---------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title               | 過疎地域における地域づくりの集団的主体の形成に関する研究                                                                    |
| Author(s)           | 吉田, 弥生                                                                                          |
| Degree Grantor      | 北海道大学                                                                                           |
| Degree Name         | 博士(教育学)                                                                                         |
| Dissertation Number | 甲第14609号                                                                                        |
| Issue Date          | 2021-06-30                                                                                      |
| DOI                 | <a href="https://doi.org/10.14943/doctoral.k14609">https://doi.org/10.14943/doctoral.k14609</a> |
| Doc URL             | <a href="https://hdl.handle.net/2115/96816">https://hdl.handle.net/2115/96816</a>               |
| Type                | doctoral thesis                                                                                 |
| File Information    | Yayoi_Yoshida.pdf                                                                               |



過疎地域における  
地域づくりの集団的主体の形成に関する研究

吉田 弥生

## 目次

|                                              |     |
|----------------------------------------------|-----|
| 序章                                           | 1   |
| 1. 問題の所在                                     | 1   |
| 2. 過疎地域の地域づくり主体形成に関する先行研究                    | 6   |
| 3. 本論文の課題と方法                                 | 16  |
| 補論 過疎地域の地域づくりにおける集団的主体形成への視角                 | 28  |
| 1. 課題と方法                                     | 28  |
| 2. 地域の価値の意識化論理                               | 29  |
| 3. 明らかになった実践的課題                              | 34  |
| 4. 理論的課題の検討                                  | 36  |
| 第1章 地域認識の視座の転換論理                             | 38  |
| 1. 課題と方法                                     | 38  |
| 2. 生活の矛盾の対象化と課題解決にむけた学習実践の創出                 | 39  |
| 3. 社会変動による困難とそれを乗り越える新たな価値の模索                | 49  |
| 4. 小括                                        | 52  |
| 第2章 文化的再生産の構造の再構築過程                          | 55  |
| 1. 課題と方法                                     | 55  |
| 2. 生活の対象化と新たな価値の意識化（第一期：1962年～1989年）         | 57  |
| 3. 新たな文化の公共圏の形成と拡張（第二期：1975年～1992年）          | 63  |
| 4. 新たな文化の公共圏と従来の公共圏の衝突から統合への過程（第三期：1992年～現在） | 72  |
| 5. 新たな文化の公共圏創出と拡張論理の検討                       | 84  |
| 6. 小括                                        | 88  |
| 第3章 地域づくりの協同形成を支える学習支援機能                     | 89  |
| 1. 課題と方法                                     | 89  |
| 2. 周辺層の組織化と主体形成から周辺層の視点の公共化へ                 | 90  |
| 3. 文化的再生産の次元における協同の形成                        | 94  |
| 4. 地域社会構造の再編にむけた協同の形成                        | 96  |
| 5. 新たな文化の公共圏の形成・拡張を支える学習支援機能の検討              | 99  |
| 6. 小括                                        | 100 |
| 終章                                           | 102 |
| 1. 本論で明らかにされたこと                              | 102 |
| 2. 本論文の課題に対する結論                              | 104 |
| 3. 本研究の限界と今後の展望                              | 108 |
| 引用・参考文献                                      | 111 |

|         |     |
|---------|-----|
| 資料..... | 120 |
|---------|-----|

## 序章

### 1. 問題の所在

#### (1) 過疎問題と対策の推移

本研究は、内発的發展を支える民主的な地域自治の実現にむけて、過疎地域における地域づくりの集団的主体の形成過程を検討するものである。

日本では、高度経済成長期に産業構造の変化によって急激な人口移動が起こり、過密する大都市に対して、地方農村には過疎問題がもたらされた。国は全国総合開発計画（全総 1962 年～五全総 1998 年）の策定を重ねるにつれ農山漁村の「地域の活性化」を図る視点を組み込んだものの、東京への一極集中を追認してきた点で抜本的な対策とはならなかった<sup>1</sup>。地域開発政策にあおられた多くの地域は、企業誘致やリゾート開発などの外来型開発に打ち込んだため、バブル経済の崩壊（1991 年）とグローバル化の進展に伴う開発企業の撤退・参入中止により産業空洞化現象が生じた。さらに、過疎化が進行するにつれ、その影響は地域経済だけではなく社会生活の再生産が困難になるというコミュニティ機能の低下と、それによる「心の過疎」というような住民意識の後退にまで及んだ<sup>2</sup>。すると、「このマチにはなにもない」「地域づくりなどできるわけがない」といった地域社会に対する否定的認識や無気力感を住民が抱くことで、地域社会の衰退に拍車がかかるという状況に危機感を抱く人々が現れるようになり、「過疎を逆手に取る会」など住民の地域認識を問い直す取り組みが広がり始めた。こうして、いくつかの地域では、地域経済の立て直しにとどまらない地域の誇りや愛着の醸成を重視した住民主体の地域づくり実践が模索されるようになった<sup>3</sup>。

このような流れの中で、1990 年代に入り「地元学」という実践手法が開発されると、この実践は、地域住民が地域への誇りを取り戻す契機や地域資源を掘り起こし活用する実践を創造する契機を含むすぐれた手法として大きな注目を浴び、全国的に広がった。同じく 1990 年代前半、農村の多面的機能を表出させる農村活性化手法として「グリーン・ツーリズム」関連の事業も広がるが、やはりその意義のひとつに、訪問者との交流を通して担い手農家の自信を取り戻すことが指摘され、都市農村交流は地域住民の誇りをはぐくむものと評価された<sup>4</sup>。これらの実践は、現在に至るまで数多くの自治体や地域社会で採用されて

---

<sup>1</sup> 三全総（1977 年）では、「定住構想」という地域、環境重視の政策が提起されたが、工業中心の大規模開発方式を引き継いでいた。四全総（1987 年）では、「多極分散型国土の形成」が目標とされ「交流ネットワーク構想」が柱となり、その下で農村型リゾート開発が提起されたが、バブル崩壊で多くが頓挫した。守友裕一『内発的發展の道』農山漁村文化協会、1991 年。岡田知弘『地域づくりの経済学入門：地域内再投資力論』自治体研究社、2005 年。

<sup>2</sup> 安達行恒『過疎地再生の道』日本経済評論社、1981 年。小田切徳美編『農山村再生に挑む』岩波書店、2013 年。など。

<sup>3</sup> 「特集：地域にこだわり、地域に生きる」『月刊社会教育』国土社、1992 年 5 月号。

<sup>4</sup> 日本村落研究学会編『村落社会研究第 43 集：グリーン・ツーリズムの新展開：農村再生戦略としての都市・農村交流の課題』農山漁村文化協会、2007 年。

いる。

小田切徳美によると、1990年代初頭までの経済開発偏重の「地域活性化」への反省から論じられるようになったのが、「地域づくり」という用語だという。いま「地域づくり」を標榜する取り組みの内実は多岐にわたっているが、小田切が「地域づくり」の含意として指摘する以下の四点、外来型開発に対する「内発性」、経済開発に対して福祉・環境などを含めた「総合性」と画一性に対する「多様性」、新しいシステムを創造しようとする「革新性」という特質を持った実践が求められるようになり、広がりを見せてきたといえよう<sup>5</sup>。

## (2) 内発的发展論において抽出されたキーワード：自治・住民主体

地域外部に依存する外来型開発では地域の持続的で安定した発展を見込めないことが明らかとなるにつれ、1970年代中頃以降、画一的な近代化による開発論に対する理論として、日本社会でも内発的发展論が提唱されるようになった<sup>6</sup>。それは、概括すると、地域の自然や文化に根ざしながら、地域住民が主体性を発揮して、地域固有の発展のあり方を創造するための議論といえる。中心的論者である宮本憲一によれば、内発的发展の目的とはGDPや人口の増大ではなく、「地域の環境・福祉・教育・文化などの総合的な向上をもとめて、地域の資源や技術を最大限に生かそうとするもの」だとされる。そして、そのような発展の背後には「地域自治」が存在することを指摘している<sup>7</sup>。

現在に至るまで、内発的发展論は社会学や地域経済学、農政学など様々な立場から理論的検討が進められているが、どの領域からも、内発的发展の主体となる人材をいかに育成・確保するか、もしくは、当事者意識の形成が重要な課題だとされてきた<sup>8</sup>。その際、鶴見和子が重要視した「キー・パーソン」<sup>9</sup>、すなわち、「地域の小伝統の中に、現在人類が直面している困難な問題を解くかぎを発見し、古いものを新しい環境に照らし合わせてつくりかえ、そうすることによって、多様な発展の経路をきり拓く」ため、「みずから創造的苦痛をえらびとり、その苦痛をわが身に引き受ける人間」への着目は、内発的发展論研究における焦点のひとつとされてきた。社会教育研究においても、例えば、鈴木敏正は内発的な地域発展を目指す実践において「地域づくり基礎集団」の形成を重視している。「地域づくり基礎集団」とは、「個人的な課題はもとより地区や個別課題を越えて、いつも地域全体の課題とその解決・発展のことを考えることができるような集団」を意味しており、「キー・

<sup>5</sup> 小田切徳美編、同上、pp.225~228。

<sup>6</sup> 宮本憲一『現代の都市と農村』日本放送出版協会、1982年。鶴見和子『内発的发展論』東京大学出版会、1989年。保母武彦『内発的发展論と日本の農山村』岩波書店、1996年。など。

<sup>7</sup> 宮本、同上。

<sup>8</sup> 安藤光義は、「内発的发展を真摯に追究した研究者は、そうであるがゆえに経済学から社会教育等の分野に関心を移行させていく傾向があるように思う。」と述べている。小田切徳美・橋口卓也編『内発的農村发展論』2018年、農林統計出版、p.84。

<sup>9</sup> 鶴見和子、前掲、p.59。

パースン」集団の形成を重視しているといえる<sup>10</sup>。このような「キー・パースン」に関する多くの研究では、地域社会のリーダーや中心的人物である人びとが地域づくりの主体性を獲得する学びのプロセスに焦点が当てられてきた<sup>11</sup>。

さらに、内発的発展の担い手形成をめぐる課題として、詳しくは後述するが、担い手には地域の自然や文化の固有の価値の意識化が求められることが明らかにされると、いかにしてそれが可能となるかが論点となってきた<sup>12</sup>。その手がかりとして、地域社会の基底にありながらも潜在化していた価値を体現するアクターの視点を取り入れる方法への注目が高まった。1980年代以降、地域づくり実践を牽引する住民の属性として「よそ者・若者・馬鹿者」というスローガンが広がったように、旧来の地域社会の政治的・経済的体制のアウトサイダーないし周辺に位置する地域住民（以下、「周辺層」とする）こそ、旧来の地域社会構造を再生産する上で基軸となる文化を相対化する点で新たな視点を有しているとされ、地域づくり実践を生み出す上で大きな役割を担いえると経験的に指摘されるようになった<sup>13</sup>。現在に至るまで、新たな視点や価値を持ち込む者として、移住者や都市住民への期待は高まり続けている。例えば、2009年に制度化された「地域おこし協力隊」は、「地域力の維持・強化を図るため」に都市部の人材を積極的に条件不利地域が受け入れる制度で、2019年の受け入れ自治体数は1071、隊員数は5,349人と年々増加傾向にある<sup>14</sup>。これらの議論では、かれらのもつ技能や技術、知識の移入、しがらみから自由な問題解決力への期待がなされてきた<sup>15</sup>。

また、周辺層の住民は地域社会の内部者であるにもかかわらず、同様の期待がみられる。例えば、農村女性はジェンダーの視点から見ると地域社会の中で劣位におかれがちだが、彼女らの問題意識に即した起業や文化活動は地域づくりの成果をあげていると多数報告されてきた<sup>16</sup>。このような事例が示すのは、従来の地域社会体制の周辺層の地域住民は、周辺のだからこそ従来の地域社会の再生産構造を支える価値観から比較的自由に、新たな価値に基づく実践を創出することが可能となっているということである。つまり、地域社会の外部者と同様に、周辺層の住民も、従来の地域社会の再生産に関わる中心的な文化を相対化する視点を有しているのである。

---

<sup>10</sup> 鈴木敏正『新版：生涯学習の教育学』北樹出版、2008年、p.193~194。

<sup>11</sup> 近年だと、蜂屋大八「中山間地域共同体の継承と変革に関わる社会教育的研究」博士論文、2018年。など。

<sup>12</sup> 小田切（2013）、前掲、など。

<sup>13</sup> 敷田麻実「よそ者と地域づくりにおけるその役割に関する研究」北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院『国際広報メディア・観光学ジャーナル』9巻、2009年。など。

<sup>14</sup> 総務省ホームページ「地域おこし協力隊」  
[https://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/c-gyousei/02gyousei08\\_03000066.html](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html)（閲覧日 2020年6月26日）

<sup>15</sup> 敷田、前掲。

<sup>16</sup> 藤井和佐『農村女性の社会学：地域づくりの男女共同参画』昭和堂、2011年。

しかし、周辺層の住民が地域社会の中で新たな地域づくり実践を進めようとする際、必ずしも周囲から期待され支援されてきたわけではない。例えば、「女に何ができる」というような抑圧的なまなざしや圧力を、地域社会を動かす中心的立場にある男性たちからかけられた、というような例<sup>17</sup>は若者世代や移住者に対するケースも含め数多ある。すなわち、周辺層の住民の地域づくりへの参画を阻んだり排除しようとする場合がしばしば見られるのである。

外部者に関しても、地域おこし協力隊など外部からの支援人材の安易な受け入れが増加したことで、地元住民と「よそ者」の間で生活や地域づくりの方向性をめぐるトラブルも増えており、受け入れ側である地域社会のオープンさや主体性という点から地域社会のあり様が問われるようになってきている<sup>18</sup>。

これらの問題が生じているのは、人口減少下の地域社会において、新たな地域社会の構想が問われているにも関わらず、多様な属性の地域住民で民主的かつ主体的に地域づくりを進めていくことを阻む対立が起きやすい状況が存在しているからだと考えられる。その背景として、過疎問題を抱える農山村における固有の問題を2点指摘したい。

第一に、日常意識がいかんして形成されているかという認識枠組みの視点から述べる。日常意識の前提である認識枠組みや価値意識が慣習・文化に基づいて形成され、また、形成された認識枠組みや価値意識が慣習・文化ひいては社会構造（本研究では「社会構造」を政治的経済的構造の意味で用いる）を強化するという日常意識の前提をめぐる構造を「文化的再生産の構造」として把握したうえで、過疎地域ではいつからどのような認識枠組みが形成されてきたのか見ていこう。

起点は過疎化が始まった高度経済成長期であり、市場の論理が農山村の地域社会構造に浸透したことによる。過疎地域対策として実施された政策は、地域住民の認識の前提として外部依存的体質を形成するものであった。例えば、条件不利地域の格差解消を目指すとした補助金政策は、道路を含む公共施設建設への財政措置中心であり、都市基準の近代化を目標とするものだった。同様に、産業対策として実施された政策も、企業誘致やリゾート開発といった外部への依存かつ都市のための産業づくりとなっていた<sup>19</sup>。これらの諸政策に誘導されてきたことで、過疎地域は補助金や企業誘致を前提とする外部依存体質が形成されたと考えられる。その結果、個別的にも地域的にも都市標準の経営目標を自明視するようになるなど、日常意識の前提が上記の方向性に強化され、それによって外部依存の地域社会構造を一層固定化するという悪循環が生じてきたといえよう。そのために、地

---

<sup>17</sup> 岩崎正弥・高野考子『場の教育：「土地に根ざす学び」の水脈』農文協、2010年、p.182の例。

<sup>18</sup> 小田切徳美・筒井一伸編著『田園回帰の過去・現在・未来』農文協、2016年、p.218。

<sup>19</sup> 山下祐介「日本の過疎問題の生成と展開―選択と集中から多様なものの共生へ―」『日本都市社会学会年報』33号、2015年。

域社会構造に深く組み込まれた地域住民ほど、内発的發展を進めるために求められる新たな価値への気づきが困難になったと考えられる。

第二に、公共的意思を形成する形式に影響を与えてきた、農山村における社会秩序に着目して、自治の構造の固定化問題について指摘したい。

農村の地域社会では、特に集落などのコミュニティとしての意思形成の際、年長男性以外の人々が排除されがちであるという問題が指摘されているが<sup>20</sup>、それは、家父長制に代表される旧来の社会秩序に基づく公共的意思形成の形式、すなわち、「男性である「家長」あるいは「家族農業経営主」を中心に意思決定が行われるイエ」の連合としてのムラという「イエを単位としたムラの構造」にのっとりた自治の構造が、過疎化によって生業や生活が維持できない危機の下でも残存してきたことによる<sup>21</sup>。すなわち、社会変動の中で、それまで文化的に正当かつ合理的な手続きとされてきた公共的意思形成の形式を再構築することはたやすいことではないため、危機対応にむけて多様な意見を検討すべきにもかかわらず、旧来の年長男性中心の「正当な手続き」の意思形成によって多様性が失われた状態が継続してきたと考えられる。

このように考えると、農村での地域づくりをめぐる排除や対立とは、次のように理解できる。まず、地域社会の主要なアクターとされてきた年長男性の置かれてきた立場とは、1960年代の生活の急変を経験し、上記の政策が展開した1970年代以降、家や地域社会のあり方をめぐる意思決定の中心的担い手であった。彼らは、市場の論理を内面化して、それにのっとりた選択をすることこそ地域の活性化につながるという認識枠組みを形成している傾向が高い人々と捉えられるだろう。さらに、こうした認識枠組みにのっとりた開発の失敗など挫折を経験したならば、「このマチには何もない」といった地域への否定的認識を抱く傾向も高いと推察される（もちろん、必ずしもすべての過疎地域の年長男性がそうとは限らないし、同様に、ほかの地域住民がすべて市場的価値観とは異なる価値意識を持っているわけではない）。かれらは地域社会構造の主要なアクターとして位置付けられ続けてきたからこそ、旧来の構造や形式では危機的状況に対応しきれないことを意識しても、これまで保持してきた認識枠組みから自由になりにくいと考えられる。

そのために年長男性は、従来の価値観に代わる新たなアイデアを、青年や女性など公共的意思形成の中心的担い手とみなされてこなかった地域住民（以下、これを「周辺層」とする）が提起しても、現行の社会構造や社会秩序の否定につながる点から意見や参画を排除してしまうと考えられる。周辺層の住民による地域社会のあり方についての発言や主体的な行動が主要なアクターに排除されることで、地域社会の意思決定に参画できる住民の層は変化せず、再び旧来の社会秩序が固定化されていくといえよう。多様な住民によって多様な視点で地域づくり実践の創出が試みられることは、内発的發展をよりゆたかなも

<sup>20</sup> 小田切徳美編『農山村再生に挑む』前掲、p.235。

<sup>21</sup> 年報「村落社会研究」第48集『農村社会を組みかえる女性たち：ジェンダー関係の変革に向けて』農山漁村文化協会、2012年、p.13。

のとするはずだが、このようにして公共的意思形成における排除が生じていると捉えられる。したがって、内発的發展にむけて自治の構造を再編するには、当該地域社会の日常意識の前提を作り出す文化的再生産の構造、ひいては地域社会構造の再生産のあり方を変容することが求められるといえよう。

以上のような問題意識から、本研究では、地域社会構造との相互変容に着目して文化的再生産の構造の変容過程を分析することを通して、地域づくりの集団的主体形成過程の解明を試みたい。

## 2. 過疎地域の地域づくり主体形成に関する先行研究

### (1) 過疎化のメカニズムにおける住民の価値意識への着目

続いて、過疎問題研究の文脈における、地域住民の価値意識（価値観）に着目する研究の展開を検討する。ここでは、過疎地域の地域づくりの担い手として地域住民が見いだされる可能性と必要性が主張され、担い手となる人材をいかに育てるかという議論が展開される中で、価値意識の転換が焦点とされてきた。

高度経済成長期の過疎問題が明るみになった際、過疎のメカニズムについて「むら社会」側の視点から検討し、いち早く住民意識に焦点を当てたのは、安達生恒である。安達は、住民意識の後退が過疎化の悪循環を推し進めると指摘した。すなわち、「工業文明を基調とした生活観の急激な浸透」によって住民の「都市なみ」の生活欲求が高まることで、向都志向となって地域を離れていく対応が増加するということ、さらに、地域に残る住民は、地域産業の衰退・生活環境の悪化・自治体財政の窮乏化の結果、なにごとにつけ村に活気がなくなっていくことでやる気が失せるという意識の後退が起き、それが産業の衰退と生活環境の悪化にはねかえり、人口減少や地域の活力の喪失を結果するというのである<sup>22</sup>。

この議論では、地域住民の都市志向型価値観を転換させること、特に現金ではかられた「交換価値」ではなく生活の質である「使用価値」で価値を測るような生活観の転換が過疎問題の悪循環を断ち切る焦点とされた<sup>23</sup>。ただし、当初対策として提起されたのは「文化的知識人」が地域住民に「農村的生活規範」の価値を啓蒙的に指導するという外在的アプローチであった<sup>24</sup>。つまり、農村社会の厳しい状況に直面している地域住民に対して、農村肯定的な価値意識への転換を唱えるばかりの教化的手法にとどまっていたといえよう。

他方、小田切徳美も、農山村の地域づくり戦略の第一の柱として、地域住民の「誇りの空洞化」による地域の将来への諦めの気持ちを問題視した。小田切は、1990年代以降の地元学や都市農村交流の実践的広がりを受けて、地域づくりにおける「当事者性の醸成」と「誇りの再建」を実現するには、「自らの暮らしをめぐる独自の価値観の再構築」にむけて

<sup>22</sup> 安達生恒『過疎地再生の道』日本経済評論社、1981年。

<sup>23</sup> 安達、前掲 p.346～347。

<sup>24</sup> 安達（1981）のほかに、乗本吉郎『過疎問題の実態と論理』富民協会、1996年。

地域の歴史・文化、自然など身近なものから「暮らしのものさし」を積みあげていく地域内在的活動に意義がある可能性を指摘した。さらに、都市農村交流については、「交流産業」として「カネとその循環づくり」に直接つながるという点からも農山村再生のポイントのひとつであると提起している<sup>25</sup>。

小田切の指摘は、一見すると安達らと同様の接近であるが、教化的手法に対するアプローチだと位置付けられる。さらに、地域内部のみで地域社会の再生産様式の転換を検討するのではなく、地域外部との諸関係の再構築によって転換の見通しを見出せる点を指摘した点が重要である。それは、地域社会の再生産の単位について、その拡張のあり方への示唆も与えたといえる。

しかし実際には、これらの取り組みを行いさえすれば当事者意識の醸成や独自の価値観の再構築につながるというわけではなかったことに留意したい。例えば、地元学実践では、地域住民の学びを支援する役割の「外の人」が地元住民の意思や関心を尊重しないため、地元住民の主体性が十分に引き出されず活動が地元根付かないことや、調べても「活用する」ことへつなげられないために活動が停滞しがちであることが報告されている<sup>26</sup>。都市農村交流においても、都市住民や自治体による消費的・政策的まなざしにふりまわされた農村が「交流疲れ」を深刻化させており、交流が地域づくりに資するものとなっていないケースの増加が確認されている<sup>27</sup>。このことが示すのは、地域社会の再生産様式の転換にむけた外部との協働の過程において、様々な対立や矛盾が生じうることだと言える。

以上、過疎問題研究では、過疎地域の再生産様式を転換していくための焦点として、地域住民の持つ都市的・市場的価値観の変革が焦点とされてきたことを確認した。しかし、いかにして価値観が変容するのかは十分明らかにされたとはいえず、小田切によって、地域の歴史・文化、自然をテーマとした地域内在的活動が「独自の価値観の再構築」と産業創出に資するという可能性を提起されたにとどまる。ただし、小田切の指摘からは、地域外部との協働によって地域外との諸関係を再編することが、住民の価値意識だけでなく地域社会の再生産様式の転換につながるという見通しが得られたといえよう。

続く節では、外部との新たな協働の端緒となる条件を備えている点で、新たな価値創造と地域づくりの担い手として地域社会の外部者や周辺層に着目する議論をみていこう。

## (2) 農山村の地域づくりに新たな価値を持ち込む者への着目

<sup>25</sup> 小田切徳美編『農山村再生に挑む』前掲、p.231~232。p.241~242。

<sup>26</sup> 「インタビュー“そこにあるもの”から始める地元学」『月刊公民館』2006年12月号。小栗有子「奄美遺産」の地元学的展開の提案～その理由と目的～『鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報』10巻、2013年。

<sup>27</sup> 徳野貞雄「農山村振興と都市農村交流活動の類型化」『文学部論叢』96、2008年、河本大地「『都市農村交流』を中心としてきた日本のグリーンツーリズムの課題とあり方」『神戸夙川学院大学観光文化学部紀要』(5)、2014年。

まず、地域づくりにおける新たな価値創造の担い手として、地域社会の外部者である「よそ者」（外部人材や移住者など）と呼ばれる人々の可能性を論じる研究の蓄積から検討したい。外部者が農山村の地域づくりに関わる意義は、かれらが農山村の地域社会で前提とされる価値観や認識の仕方とは異なる視点を持つ点だと提起されてきた。この論点については、主に大学生の地域参画を対象とする研究<sup>28</sup>が盛んであるのに加え、近年、都市住民の農山村への移住が急速に増加していることから、「移住者」に着目した議論が活発化している。例えば、筒井・佐久間（2016）は、都市部出身のとりわけ若者とつながりを持ち、地域づくりを展開させている農山村の広がりや、潜在的にあった地域資源を移住者がもつヨソモノ視点で活用する「新たな地域の価値創造」という観点から捉えている<sup>29</sup>。そして、移住者が入りやすい地域が生まれるのは、地域の人々の地域に対する強い思いが後退するからではなく、むしろ誇りが強く維持されているからこそ地域が主体的に開かれるとみている。よって、移住者の視点を活用する地域づくり戦略を実現するためには、なりわい、住まいのことに加え、「農山村における地域社会の閉鎖性の打破」が求められ、「主体的で開かれた地域社会」が重要だと述べている<sup>30</sup>。

筒井・佐久間の議論では、地域づくりに資する新たな価値創造のために移住者と協働するための条件が検討されたが、地域社会側の主体性や開かれた姿勢という、過疎問題を抱える地域社会が陥りがちな主体性や意欲の喪失という実態からかけ離れた、理想的なあるべき地域像が指摘されたにとどまった。移住者は農山村の地域社会でマイノリティの立場になりがちなことは言うまでもなく、マイノリティが地域づくりに参画しうるような開かれた地域社会がいかんにして形成されるのか、という点の解明がなければ、地域住民の移住者への過度な依存、もしくは期待外れだった場合は「村八分」のような排除など、地域社会の意思決定における中心層と周辺層の非対称な関係性に起因する問題は解決できない。

続いて、地域住民であるにも関わらず、地域づくりに新たな視点をもたらす者として着目されるようになった「農村女性」の地域づくりは、どのように理解されてきたのか検討する。

農村女性による地域づくりは、地域の問題を解決する上で既存の男性中心的な組織にはない新しい可能性を持っているということ、例えば、永続性を重視しない仲間関係や集落・町を越えて全国・海外にまで広がる人間関係のネットワークなど人間関係の持ち方の新しさ、また、都市農村交流事業の運営や特産品の開発など新しいビジネスチャンスの開拓という側面からの注目であった。ただし、こうした評価について秋津元輝（2007）は、女性を「救世主」として奉るような行き過ぎた評価につながった場合、既存の男性中心主義的価値観に立った女性評価に加担することになる点を指摘している。そして、女性たちの活

---

<sup>28</sup> 中塚雅也「大学との連携による農山村の再生」JC 総研レポート、2015 年など。

<sup>29</sup> 小田切徳美・筒井一伸編著『田園回帰の過去・現在・未来：移住者と創る新しい農山村』農山漁村文化協会、2016 年、p.191。

<sup>30</sup> 同上、p.201、205~206。

動が示す可能性を捉えることこそ重要で、その一例として、そうした活動のなかに従来のイエやムラという枠組みからの離脱を認め、村落社会の再編の契機を見て取ることが可能であることを挙げている<sup>31</sup>。例えば、秋津による農村女性起業の事例研究では、集落の自然資源や文化資源などの地域資源全般に対して男性がほぼ独占的にアクセスし、女性たちが地域資源管理から疎外されてきたために、女性たちは外へ活動を広げようとし、結果として今までにない経済的社会的効果を生み出したことが示されている<sup>32</sup>。

さらに秋津は、農村女性の活動を支えるものとして同世代・同境遇の仲間意識があることを推察しており、このような点は青年層でも顕著にみられることから、農村女性の活動の可能性を「女性」という本質主義的な属性によって封じ込めるべきではないと指摘している<sup>33</sup>。この指摘から、農村女性の活動にみられる傾向は、既存の地域社会構造の主要なアクターとみなされない他の地域住民においても似た傾向を持つと推察できる。

このように、地域住民として地域社会構造に組み込まれながらも公的領域から疎外されている住民が、その制約を超えようとすることで、結果として旧来の地域社会の再生産論理とは異なる外部との関係性を形成する事例が多く示されてきた<sup>34</sup>。地域社会内部の矛盾が集中しがちな周辺層の住民だからこそ、かれらは外部と協働する傾向がみられるといえよう。ただし、従来の地域社会の再生産構造にどれほど深く組み込まれているかの度合いや、担う役割の違いによって、周辺層の中でも矛盾の質や現れ方は異なると考えられる。

本節の検討では、外部者との協働の成立条件とは「主体的で開かれた地域社会」であるということと、地域社会内部の矛盾が凝集して現れがちな周辺層の住民は外部者と協働しようとする傾向が高いことが確認された。この2つの指摘の関係をどのように考えたらよいだろうか。地域社会内部の矛盾と地域外部との協働の成立条件の関連をみることが求められる。

続いて、周辺層に注目して、日常意識の前提を転換することとの関連で地域社会構造の変容を論じようとした岩崎正弥の議論を、次節で検討していく。

### (3) 場の教育論の検討

岩崎正弥は、「国家や資本の内にもありながらも、その力をときには逆用し、ときには抗いながら、それを超えていく」したたかな地域像を実現する担い手としての地域住民をいかに育てるのかという問題意識から、住民意識と地域社会の構造との関連に着目して「場の

---

<sup>31</sup> 秋津元輝ら『農村ジェンダー：女性と地域への新しいまなざし』昭和堂、2007年、p.22~23。

<sup>32</sup> 同上、p.140。ほかの農村女性起業の事例研究でも、同様の指摘が見られる。西山末真「地域再生のための農村女性起業の役割と課題」『村落社会研究』第48集、2012年。など。

<sup>33</sup> 同上、p.22~23。

<sup>34</sup> 日本村落研究学会『農村社会を組みかえる女性たち：ジェンダー関係の変革に向けて』農村漁村文化協会、2012年。

教育論」を展開した。その際、地域づくりの担い手として「既存の場からはじかれている人＝社会的弱者」に着目し、「既存の場からはじかれているがゆえに、異なる価値観をもって新しい活動を起こしたとき、そのことが場を変容・活性化させるのではないか」<sup>35</sup>と提起しており、そのような人々を担い手としていけるのが、場の教育だとしている。

以下では、場の教育論の基本となる概念を説明したうえで、本研究とのかかわりで2点検討していく。

「場の教育」とは、地域の持続が市場競争に依存する構造自体を変えることを目指して、「地域間連帯をベースとした自律」する地域をつくる担い手の実現にむけた「地域における、土地に根ざした学び」であり、「住民が地域を知り、地域を育てる方法」という<sup>36</sup>。岩崎は、場を＜構造としての場＞と＜認識としての場＞の2つに分けて説明する。構造の場とは、「固有の住環境が持つ固有の雰囲気」であり「時間と関係と空間の総体」のことである。また、認識としての場とは、「認識のある到達点」のことである。2つの場の理想型は、表1の通りであり、場の教育ではその到達・実現が目指される。

**表1 「場の教育論」における2つの場モデル(岩崎 2010 をもとに筆者作成)**

| 「構造としての場」の本来の姿                                                                                                                                                   | 「認識としての場」の理想型                                                                                                                                                                                                                                                             |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>「どんな人びとに対しても開かれ（誰もがここに来て、語り合い、交わり、共に活動出来ること）、その結果さまざまな新しい価値が生み出され（新しい地域社会の新たな仕組みや規範、共有できる目標などが紡ぎ出されること）、そして一致のある多様性という異質のものが共存しつつ調和をもつ（包み込む）地域空間」(p. 158)</p> | <p>「可視的なものに依存した閉鎖的・思い込み的な私たちの認識を開き、地域の諸事象がおりなす関係性を身をもって理解する新しい認識を生み出し、さらに異なる地域の存在を受容するような認識の在り方を提示する。」(p. 158~159)</p> <p>「〈開かれ、生み出し、包み込む空間〉に立った認識は、どの地域も「身体空間」をもつという同質性（同じであること）と地域間の相互関係性（互いにつながりあっていること）という二重性において、異質を排除するのではなく、受け入れて共存の精神をも内包することになるだろう。」(p. 159)</p> |

岩崎は、学び手が「認識としての場に立つ」（＝「認識の一定の到達点に達」する）と、他人事的な事象の自分事化が生じるという認識転換が起こり、その結果、学び手は地域づくりの担い手として構造としての場に働きかけるようになると考えており、その認識変容から行動へのプロセスを「場の教育」の四段階プロセス<sup>37</sup>として整理している。(図1)

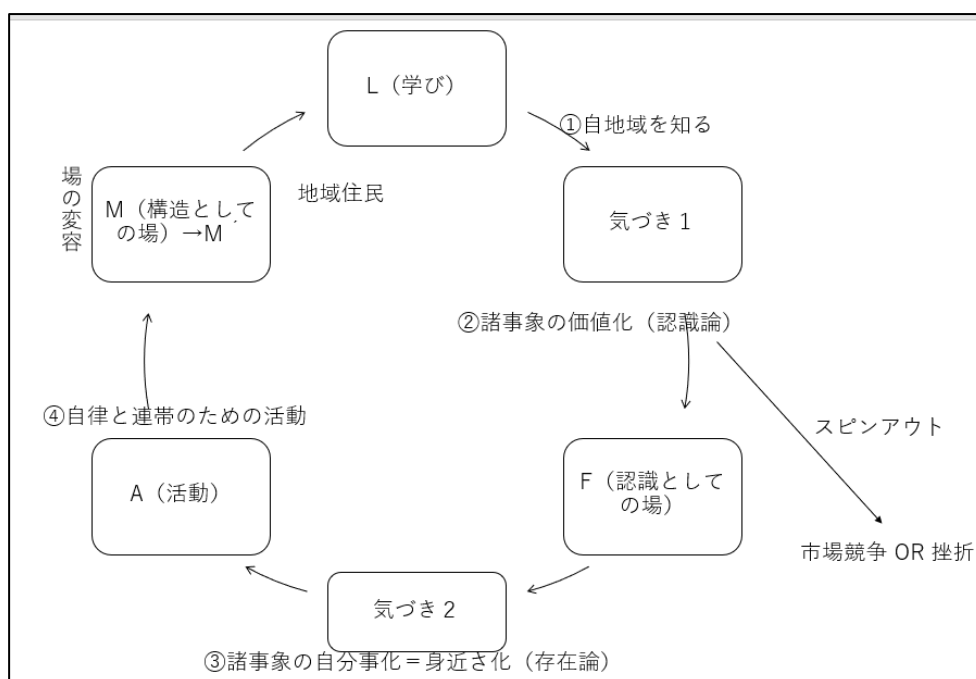
<sup>35</sup> 岩崎正弥・高野孝子、同上。p. 163。

<sup>36</sup> 岩崎、同上、p.122。

<sup>37</sup> 岩崎正弥・高野孝子、同上。pp. 154～163。

それは、【①自地域を知る→②諸事象の価値化（地域の認識論）→＜認識としての場に至る＞→③諸事象の自分事化＝身近さ化（地域の存在論）→④自律と地域間連帯のための活動→場の変容→新たに形成された場が地域住民をこの気づきのプロセスに誘う可能性がある】というもので、①から③での地域認識の転換が④の主体を形成して実践が生み出され、新たに形成された場（M'）がほかの地域住民に影響を与え、かれらの参画につながっていくという論理である。特に、②の段階では、場の教育からの「スピニアウト」として、単に市場競争化したり挫折する場合が多いことを指摘し、地域の存在論に到達すべきことを重視している。すなわち、地域をめぐる価値を二重構造として把握するということで、地域資源を探して商品化を目指すような「地域の認識論」は、「公共圏―連帯」の領域と軌を一にする「地域の存在論」<sup>38</sup>を土台としない場合、商品化を目指すものととどまる場合がある。

図1 場の教育の四段階プロセス（岩崎 2010〈図 1-3-3:p.160〉を基に作成）



このように岩崎は、小田切が地域づくりの当事者意識の形成において地域内在的な価値観の再構築を重視しているのと同様に、地域理解を深めることで「認識としての場」という日常意識の前提の次元の転換を問題にしているといえる。ただし、小田切が価値観の構築と産業の創出につながる実践として「都市農村交流」の可能性に言及するまでだったのに対し、岩崎は日常意識の前提の転換と地域社会構造の変容を関連づけて把握しようと

<sup>38</sup> ＜地域に人が住んでいる＞という事実だけに存在意義を認める立場。岩崎、前掲、p, 144。

した点が評価できる。

しかし、このプロセスがいかに展開していくのかという論理は十分に論じられておらず、特に、地域内在的な価値観の再構築の条件と考えられる「認識としての場」に至り、〈気づき 2〉に到達するプロセスについては検討の余地がある。

〈気づき 2〉に至る条件に関しては二点述べられており、まず、「空間の履歴」（「空間自体に刻み込まれた履歴」<sup>39）が豊かな地域、すなわち、長年にわたる人の定住が生成・維持・発展させてきた、空間に刻み込まれている諸関係（人と人、人と社会、人と自然との関係）の豊かな地域ほど〈気づき 2〉に至る可能性が高いということである。「空間の履歴」の豊かさは、地域と「かかわらなければならない事柄、働きかける対象の豊富さ」<sup>40）、すなわち、地域への働きかけ・かかわりの多さでもある。それが認識としての場に到達する条件と述べている。</sup></sup>

第二に、学習者側からの条件は、地域の諸事象間のつながりを掘り下げること、やがて「認識としての場」に至るということと、その際「農の教育力」<sup>41）を取り戻すこと、すなわち、「地」から「土」、そして「種」へと積み上げる営為のように、地に足をつけて自然とのかかわりを持つことが大切と述べている。</sup>

要するに、岩崎の主張は、農山村の「空間の履歴」が豊かであればあるほど、「空間の履歴」を認識しやすいということ、また、学習者が地域の諸事象間のつながりについての理解を深めることで「認識としての場」に到達することができること、さらに、その学習の推進力として「農の教育力」に着目していると読める。

しかし、諸事象間のつながりを理解することや「農の教育力」で、なぜ「認識としての場」に至り新たな地域認識を獲得した活動主体が形成されるのか、岩崎の論理は不明確だと言わざるを得ない。「地域間連帯をベースとした自律」のための活動で外部との関係性の再構築をするためには、既存の関係性（「空間の履歴」）を意識化することは確かに求められるだろうが、地域づくりの新たな方向性が見出されていないならば、関係性の再構築の実践にはつながらないのではないか。すなわち、地域認識を規定するものである「認識としての場」の説明において、新たな価値意識に基づく地域づくりの展望が形成される論理が欠如していると考えられる。

また、「農」の意義が仮説的に提起されたものの、現実では「農」に関わる学習・実践以外でも地域づくりの主体性が育まれていることから、「認識としての場」に至る契機は「農」に限定されるものではないと考えられる。つまり、認識転換の条件が結果論的で非常に狭いものになってしまっていると考えられる。

したがって、価値観の再構築の論理の解明のためには、岩崎の提示した学習過程の再検

---

<sup>39</sup> 岩崎、前掲、p.147。

<sup>40</sup> 岩崎、前掲、pp.161～162。

<sup>41</sup> 「農の教育力」とは、「人と自然が、また自然を介して人と人とが交わること」と説明されている。同上、p.167～170。

討が求められよう。その焦点となるのは、「空間の履歴」の意識化と新たな地域づくりの展望の形成の関連と考えられる。「空間の履歴」の意識化とは、地域社会に蓄積されてきたものを捉える時間的・空間的な視点の広がり、いかにして起こるのか明らかにすることが重要となるだろう。

では、新たな地域づくりの展望はいかにして形成されるのだろうか。前節の検討からは、新たな価値をもたらす者として地域社会構造や公共的意思形成における周辺層という属性が鍵になることがわかった。岩崎も、この「気づき 2」以降の一連の展開、すなわち、地域づくり活動によって場を変容させ、周囲の地域住民に影響を与えていく過程を担うとされるのが、「社会的弱者」だと述べている。この点について、次節で検討していく。

#### (4) 場の教育論における「社会的弱者」(周辺層)の位置づけ

ここでは、場の教育論における「社会的弱者」の位置づけと機能について検討する。岩崎は、「地域そだて」を「地域の維持、存続、発展に向けた住民主体の活動」と定義して、「地域そだて」は「構造としての場」を変えるという点で「場の教育の応用＝実践」だと位置付けている。その「地域そだて」をリードするのが、「社会的弱者」とされる。

岩崎は、疲弊した多くの地域でみられる、ルーティン化した活動が既存の場の構造を強化して「停滞のサイクル」に陥っている状態を、「地域そだて」のプロセスが場の構造によって制約された状態と捉えた。そして、「停滞のサイクル」から脱出するためには、地域そだてが活発となるように既存の場の構造を変えるしかなく、「インフォーマル・キーパーソン (IKP)」がその起点として重要であるという。

では、IKP はどのような人なのか。岩崎によると、IKP とは役職者に限らない「地域そだて」<sup>42</sup>のプレイヤーおよびプレイヤーとなりえる存在である。とりわけ農村女性など「既存の場からはじかれている人＝社会的弱者」という属性、つまり地域社会の周辺層に IKP としての可能性を見ている。なぜなら、はじかれているがゆえに異なる価値観を持つかれら (IKP) は、新しい活動を起こすことで、ほかの人々にも気づきを与えて認識を転換させる触媒として、構造としての場を変容・活性化させる可能性があるからだという。よって、周辺層を地域そだての担い手として取り込むことが極めて重要とされる<sup>43</sup>。このような、社会的弱者の主体形成による社会参加・共存を重視した地域そだてを、岩崎は「ソーシャル・インクルージョン (SI=Social Inclusion) 型地域そだて」と提唱する。

さらに、岩崎は、IKP が育つ条件として 2 点提示しており、場の教育による「意識啓発 (L1)」と公的承認機能を付与した「専門機関による具体的な活動支援 (L2)」(技法の学び) が不可欠だと述べている。それによって、担い手として可能性のある周辺層がほかの住民から認められて活動しやすくなるとみている<sup>44</sup>。

<sup>42</sup> 岩崎、同上。pp. 175～178。

<sup>43</sup> 岩崎、同上。pp. 172～187。

<sup>44</sup> 岩崎、同上。pp. 172～187。

しかしながら岩崎の議論にある、はじかれている「社会的弱者」を担い手として「取り込む」<sup>45</sup>という述べ方にも表れているが、「社会的弱者」は地域認識の深化や技術の向上への支援、「公的承認」を与えることで主体的に活動できるという理解は、表面的な指摘にとどまっていると思われる。その問題点として、2点述べたい。

第一に、岩崎の「社会的弱者」に対する認識についてである。社会的弱者に関する多くの研究は、社会から疎外された当事者が主体性さらには尊厳まで奪われてきたことを示してきた<sup>46</sup>。例えばフレイレは、被抑圧者が抑圧の現実には埋没していることから、人間が抑圧状況を乗り越えるためには、まず抑圧とその原因を批判的に認識する必要性を述べている<sup>47</sup>。岩崎の把握では、「社会的弱者」は社会的に疎外され不利な立場に置かれることで主体性を喪失させられてきたという認識が欠けていると考えられる。かれらの主体性や能動性がはぐくまれていなければ、周辺層への期待は、利用されるだけの「お飾り参画」<sup>48</sup>になりかねないだろう。社会的弱者の主体形成の捉え方を再検討することが求められる。

第二に、周辺層による異なる価値観の新たな活動が場の構造を変える論理として、「公的承認」によって活動が促され、周囲に影響を及ぼしていくという論理は、成功例の現象的な説明にとどまっていると捉えられる。前節までの検討をふまえると、地域社会の中心的担い手である地域住民は、周辺層による旧来の地域社会の秩序や価値観と異なる活動を、簡単に受容できるわけではない。公的承認を受けた活動でも、地域内で共感を得られなければ、活動を広げていくことは困難であり、地域社会構造の変容にはつながらない。つまり、新たな価値意識が地域社会でいかに共有されるのか明らかではない。

## (5) 社会教育研究における地域づくり・地域再生と主体形成

本節では、これまでみてきた過疎地域研究の限界との関連で、社会教育学における地域づくりの主体形成に関する議論からの示唆を検討する。

社会教育学研究において地域づくりと社会教育の関連をめぐっては、地域社会の矛盾の解決と一体化した教育にこそ、その矛盾を解決する主体の形成の可能性が見いだされてきた。そして、地域の矛盾を解決する実践、すなわち地域づくりの展開過程で形成される住民の協同に内在する学習の内実や形成される主体性が論点とされてきた<sup>49</sup>。

「地域づくり」の主体形成を論じる研究が主に対象としていたのは、「先進的」とされる事例の中心的担い手であった。地域づくり教育論の中心的な論者の一人である鈴木敏正は、

---

<sup>45</sup> 岩崎、同上。p. 184。

<sup>46</sup> 例えば、パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』亜紀書房、1979年。岩田正美『社会的排除：参加の欠如・不確かな従属』有斐閣、2008年。など。

<sup>47</sup> パウロ・フレイレ、前掲、pp.20~24。

<sup>48</sup> ロジャー・ハート『子どもの参画・コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社、2000年。

<sup>49</sup> 日本社会教育学会編『成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版社、2004年、p.65。

新自由主義的な地方分権改革や生涯学習政策に対して展開された地域づくり実践の先進事例の分析をもとにして、「地域をつくる学び」の中心を「自分たちに必要なものを現実的に、協同して創造すること（「現代の理性」形成）」と述べているとおり、「創造」の局面に着目して地域づくりの主体形成の議論を展開してきたといえる。ただし鈴木は、「地域をつくる学び」の前提についても言及していることに注目したい。それは、「意識における自己疎外」を克服する「意識化および自己意識化の実践」<sup>50</sup>の豊かな展開が求められるということ、とくに「社会的に排除」された人々や地域の立場に立ち、彼・彼女らとともに学びあうような学習実践、それをとおしてみずからが抱えている問題を意識化していくような学習実践」が求められているとの指摘である<sup>51</sup>。関連して、近年の社会教育領域では、グローバリゼーションの進行や数々の災害によって深刻に疲弊した地域社会に目が向けられるようになり、地域再生・課題解決の方途を探り「維持可能な地域」を追究する「地域学習」<sup>52</sup>や「地域再生教育」<sup>53</sup>を捉えようとする提起が増加している。そこでは、地域の構造的困難や抑圧に抗い「暮らしの視点」や「人間性の復興」を目指していくという理念<sup>54</sup>が掲げられ、それに向けた学習の重要性が見出されてきた。よって現在は、こうした理念的な提起をいかに実現するかが問われている局面である。

さらに、地域づくりにおいて社会教育が果たすべき役割を提示した高橋満の議論を確認してみよう。高橋は、地域づくりに関わる社会教育実践の目的で大切なのは「学びを通して人々の関係を形成すること」で、特に「貧困・社会的弱者・マイノリティ・排除された人々の参加がとりわけ重要」というように、社会正義、住民自治、民主主義的観点こそ社会教育学の固有性であると論じている<sup>55</sup>。また、プロセスにおける参加、エンパワーメント、平等、民主主義が試金石だという。このように、高橋の議論は、社会的弱者の参画を真に進めうる住民自治のあり方を、学びというアプローチで捉えて解明していくことが一層重要だと提起していると捉えられる。

こうした動向のもと、地域社会構造の変革とともに意識変化を論じるための枠組みとして、宮崎隆志（2017）は、地域学習の起点を「諸個人・暮らし・地域」の内在矛盾の意識

---

<sup>50</sup> 意識化と自己意識化について鈴木は、フレイレの理論と照らし合わせて、商品・貨幣的世界が支配的になるにつれて人間は「虚偽意識」としての非能動的・依存的意識化が強まっているが、省察と行動をとおして「批判的に知覚する能力を発展させる」意識化、「自己を受容し、見直し、信頼し、表現していく」こととしての自己意識化として説明している。鈴木敏正『自己教育の論理：主体形成の時代に』筑摩書房、1992年。鈴木敏正『持続可能で包摂的な社会のために』北樹出版、2012年、p.170。

<sup>51</sup> 鈴木敏正『「地域をつくる学び」への道』北樹出版、2000年、p.23、p.190~194。

<sup>52</sup> 佐藤一子編著『地域学習の創造：地域再生への学びを拓く』東京大学出版会、2015年。

<sup>53</sup> 鈴木敏正『持続可能で包摂的な社会のために』北樹出版、2012年、p.72

<sup>54</sup> 佐藤、前掲、p.3。

<sup>55</sup> 高橋満「序：国家、地域づくりと社会教育」日本社会教育学会編『地域づくりと社会教育的価値の創造』東洋館出版社、2019年。

化と、そこから新しいシステムの方向性を見出し、実際の地域を変革する知を形成することとみている<sup>56</sup>。

このように、社会教育学における地域づくりの主体形成研究においては、すでに地域社会のキーパースンやリーダーであった地域住民への着目から始まったものの、近年は社会構造の矛盾が凝集して現れるマイノリティに着目して、かれらが疎外状況を克服し生活の主体性を回復する学習過程を射程に入れて地域づくりの主体形成を描出することが提起されるようになってきたといえる。周辺層の存在の仕方には地域社会の構造的矛盾が集まっているからこそ、新たな価値を模索する動きが生まれている点をふまえると、いかにして周辺層が存在の矛盾を意識化し、新しい価値意識を形成し、自らの存在のあり方の再構成に向かうのかという点の解明から検討することが求められよう。

続いて、地域社会構造を再構成する集团的主体の形成の論点を整理する。

宮崎（2001）は、「地域づくりとは、実際生活の矛盾を協働（協同労働：筆者注）で解決することにより、新たな共同を形成すること」と捉えた上で、「協働の過程は抽象的な理念や関心を具体化していく過程でもあるから、協働するメンバーどうしの価値意識の対立が生じることは避けられない」というように、地域づくりの展開過程において価値をめぐる対立を位置付けている。また、このような対立を克服するためには、「対立の本質を理解し、統一の可能性を探る話し合いや調査や教養学習」といった学習の組織化による協働の発展を追求できるかどうかと問われると述べる<sup>57</sup>。

本論文では、地域づくりの集团的主体の形成過程において、地域住民が集团的主体として連帯を拡張させていく局面に焦点をあてるべきと考えることから、宮崎の、地域住民の対立場面に着目することで協同を発展させる学びをとらえようとする方法を基本的な視角としておきたい。よって、本論文では、地域づくりの集团的主体形成の過程を、価値意識の異なる者同士が対立を乗り越え価値を共有していく協同形成のプロセスとして、学習に着目して捉えることとする。

### 3. 本論文の課題と方法

#### (1) 場の教育論の限界を乗り越える視点

これまでの検討をふまえると、岩崎の場の教育論の限界とは大きく二点ある。第一に、内発的發展を支える価値を見出す過程を明らかにしようとしているものの、なぜそのような内容の価値の意識化がなされるのか論じていないこと、第二に、一部（周辺層）の地域づくりの活動がなぜ場の構造を変えるのかについて、本質的な要因を指摘できていないこ

---

<sup>56</sup> 宮崎隆志「地域学習論の構図」『社会教育研究』第35号、2017年。

<sup>57</sup> 宮崎隆志「地域づくりと公民館：飯田市竜丘公民館を事例に」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』84巻、2001年。本稿では、宮崎の定義に基づき、「協同」とは共通の目標を共有すること、「協働」とは協同労働とする。宮崎隆志「協同蓄積論の射程：公共性との関わりで」『社会教育研究』20巻、北海道大学教育学部社会教育研究室、2002年。

とである。つまり、個人の次元でも集団的な次元でも、過疎地域の地域づくり主体形成において価値意識や「認識としての場」というような日常意識の前提を転換する必要性が指摘されるも、それがいかに形成されているかということをもふまえた議論となっていなかった。そのために、外部者や周辺層が持つとされる「新たな価値観」を取り入れるという方法しか提起されてこなかったと考えられる。しかし、価値意識や「認識としての場」など日常意識の前提は、それだけを取り換えられるものではなく、地域社会の慣習や文化によって構造的に再生産されているものであり、地域社会構造<sup>58</sup>とも相互規定的なものだと捉えるべきではないだろうか。この、日常意識の前提が構造的に再生産されることを本研究では「文化的再生産の構造」として捉えて、文化的再生産の構造と地域社会構造の両者が相互に規定しあい変容していく過程を検討することが、新たな価値意識を共有する地域づくりの集団的主体の形成の論理を明らかにすることにつながると考える。

社会教育学の視点からは、日常意識の前提を問い直し新たな価値を意識化していく展開を捉えるには、矛盾や葛藤との関連で住民の協同形成を捉える方法が見いだされた。この視点に基づくと、周辺層に着目すべきなのは、単純に「新たな価値」を持ちこんでくれる人々だからではなく、地域社会構造から疎外され、その矛盾が現れやすい立場にあるゆえに、従来の地域社会構造にとらわれずに生活に根ざした価値を見出したり、あるいは外部との関係性を形成し新たな価値意識を獲得したりする傾向が強いからである。また、かれらが地域内外と協働して新たな価値に基づく実践を展開することで、従来の地域社会構造の担い手と価値をめぐる鋭い対立が起こる可能性が高いといえる。その対立が解決され新たな文化が共有されることは、地域社会の文化的再生産の構造の再構築と捉えられるだろう。そのため、周辺層の主体形成を分析の起点にすることは、周辺層による新しい価値意識に基づいた文化活動が行われる場（これを「新たな文化の公共圏<sup>59</sup>」と捉える）が生み出され、拡張することで、文化的再生産の構造が再構成される過程を検討する上で有効と考えられる。

新たな価値意識を共有する協同形成については、どのような対立に着目しうるだろうか。この点に関連して、吉田（2010, 2019）のケーススタディを参照したい<sup>60</sup>。北海道中川町エコミュージアムセンターで、過疎地域の地域づくりとして取り組まれたボランティアによる都市農村交流の実践では、以下の課題が明らかとなった（詳しくは補論を参照されたい）。

---

<sup>58</sup> ここで用いている「地域社会構造」とは、4 ページにて「本研究では「社会構造」を政治的経済的構造の意味で用いる」と示した理解にのっとっている。

<sup>59</sup> 本研究では、ハンナ・アレントの公共空間の解釈、すなわち「活動と言論は、それに参加する人びとの間に空間を作る」という説明に基づき、開かれた対話的な空間として「公共圏」を用いる。ハンナ・アレント『人間の条件』筑摩書房、1994 年。

<sup>60</sup> 吉田弥生「過疎地の地域づくりにおける生活文化活動の意義」（修士論文）2010 年。吉田弥生「過疎地の地域づくりにおける生活文化活動の意義」北海道大学大学院教育学研究社会教育研究室『社会教育研究』第 28 号、2010 年。吉田弥生「地域づくり主体の形成における地元学の到達点と課題」北海道教育学会自由研究発表、2019 年 3 月。

ボランティアらは、都市住民との交流を通して、地域の自然や文化の価値を意識化し、この価値を参加者と共有し互いに楽しめるような交流の質を担保すること、自分達の生活にねざした料理を出来る範囲で提供することが大切なことだと認識していたところに、彼らの活動が行政主導の観光産業づくりのプロジェクトに位置付けられた。ボランティアたちは、自分達の大切にしていた価値や活動の質が尊重されずにビジネスの文脈に位置づけられたことに困惑したり違和感を感じたことで、プロジェクトへのかかわりを控えて、ボランティアと行政との協働が困難となった。

このことから、新たな外部関係を形成することは、地域内での価値の発見につながると同時に、地域内の価値意識の差異を顕在化させることがわかる。一方が主体性を発揮し、外部との関係を構築しようとするれば、その差異が対立に転化し、地域づくりにむけた協働が困難となることが示されている。この事例では、外部との協働を契機に、市場の論理に基づく価値と、地域社会に対する誇りの回復や交流を通じた学び合いという人間的価値が衝突を起こしていることが確認できた。このように、地域づくりをめぐる対立の焦点として、市場的価値と生活に根ざした価値の折り合いをいかにつけて新たな地域社会のあり方を構想していくかという点が考えられるだろう。

価値の問題については、場の教育論で、地域をめぐる価値を二重構造として把握すべきという指摘、すなわち、本来、地域資源を探して商品化を目指すような「地域の認識論」は、「公共圏—連帯」の領域と軌を一にする「地域の存在論」を土台とすべきだという先述の点が参考になる<sup>61</sup>。このように理解すると、新たな文化の公共圏の拡張にともなって生じざるを得ない旧来の地域社会との衝突が起きる局面、すなわち価値をめぐる住民間のコンフリクトに着目し、相互交渉の展開過程を検討する際、地域づくりにおける価値の構造化がいかになされるのかという点に着目することが求められよう。

市場の論理によって過疎地域の生活条件が奪われてきたので、生きていくために地域住民が市場に適応する方法を求めることは当然のことであるが、それのみによらず、市場的価値を相対化して外部との関係性を多元化していく主体性の形成が問われているといえる。

## (2) 本論文の課題と方法

以上の検討をふまえ、本論文の課題を整理し、分析視角を提示する。

本研究の基本課題は、文化的再生産の構造と地域社会構造の両者が相互に規定しあい変容していく過程に即して、新たな価値意識を共有していく地域づくりの協同形成の論理を明らかにすることである。

続いて、事例分析のための視角を述べる。

第一に、文化的再生産の構造が変容する起点として、周辺層における地域づくり主体形

---

<sup>61</sup> <地域に人が住んでいる>という事実だけに存在意義を認める立場。岩崎、前掲、p, 144。

成の論理を見ていくことが分析の出発点となる。周辺層の主体形成の焦点は、生活に根ざした価値の意識化過程の解明だが、その際、周辺層の人々が地域社会の中で客体化されてきた現実から捉えなければならない。周辺層の人々の生活をめぐる困難や矛盾の意識化、さらに、それをもたらす地域社会の構造の意識化がどのようにして起こっているのか、という視点が重要となるだろう。

また、地域の価値の意識化と合わせて、「空間の履歴」の認識の深まり、すなわち、時間・空間・関係に関する認識の変化を問うていくことで、新たな地域認識の視座がいかに形成されるか見ることができると考える。

第二に、地域づくりの協同形成へのアプローチを整理する。文化的再生産の構造変化の過程は、地域内外の諸関係の総体の変容する過程であり、外部との関係の変容が引き起こす内部の対立の解決過程として把握することができる。これまでの検討によると、着目すべきは市場の論理に基づく価値と生活に根ざした価値の対立の局面である。

### (3) 調査対象の設定

本論文の課題を検討するために、いかなる対象を設定すべきか。岩崎の述べたように、丁寧に農に取り組むことも地域認識の学習を深める<sup>62</sup>のに一定程度寄与するかもしれないが、自分たちの生活や地域のあり方を対象化する学びを深めていくことの方が、直接的に生活に根ざした価値を意識化することにつながると考えられる。そのため、生活に根ざした価値を育む可能性を指摘されてきた、地域を見直す学習活動や都市農村交流から地域づくり実践が創出されたケースに着目する必要がある。そして、当初の実践主体は地域社会構造の周辺層の一部でありながらも、実践が発展するにつれ地域社会内外の多様な人々の実質的参画が広がって協同的な地域づくりが行われるに至るプロセスを分析することが求められる。そのために、本研究では、地域社会における学習実践の長期的な蓄積を見る方法を取る。

以上の観点から見て、本研究の研究対象として、新潟県十日町市飛渡地区<sup>とびたり</sup>における様々な地域づくり実践の展開とそれを支えてきた学習活動を取り上げる。その理由は、第一に、飛渡地区は、高度経済成長期に入ると急激に過疎化が進行した中山間地域に位置する地区であり、主な産業である農業の衰退、人口減少といった課題と早くから向き合わざるをえなかったために、地域づくりの試行錯誤が長年にわたって行われてきたことである。第二に、飛渡地区の公民館は、初代の地区館主事によって民主主義と地域振興の拠点としての

---

<sup>62</sup> 岩崎は、地域の存在論に到達するプロセスとは、農（自然と何らかのかかわりを持つ）の教育力を活かし、「土＝地＝自然」に何らかの関わりを持ち、「いま・ここの地に足を着け」て「多くの苦労と手間暇」をかけることが重要だと述べている。なぜならば、岩崎は土地に根ざした教育運動史とその思想を手掛かりに地域再生にかかわる地域論、教育論を構想しているため、前提として、農の教育力によってどのような地域再生の担い手が形成されるのかという方法がとられているから、最初からこの議論は農ありきの射程だと考えられる。

位置づけを与えられて以来、歴代の地区館主事もこの観点からの社会教育実践にこだわってきたことである。とりわけ、戦後から封建性の強い地域性を問題視して、特に抑圧されてきた女性や青年を対象に「婦人教育」や「青年教育」の事業に積極的に取り組んできた歴史があり、そこからの展開として様々な範囲や目的の地域づくり実践が生まれてきた点が注目される（例えば、第2章で取り上げる、都市農村交流を軸とするエコ・ミュージアム実践を創出した枯木又地区など）。第三に、飛渡地区内で長年に渡る様々な地域づくり実践を蓄積してきた成果として、2015年からは地区内の多様な属性の地域住民で組織される地域づくり団体が生まれ、地域社会の未来を幅広いメンバーで議論する場が形成されるに至ったことである。

以上三点が対象選定の理由であり、本論文では、新潟県十日町市飛渡地区において、過疎問題が浮上した1960年代から2010年代にかけて展開された地域づくり実践とそれを支えた学習活動の連関と歴史的展開に着目して、それぞれの実践がどのような問題状況に対して、いかなる課題設定をして取り組み、それを通して地域住民がどのような学習をしたのか、そこからどのような活動が生み出されてきたのか、といった学習の蓄積に着目して検討を行う。それを通して、過疎化によって「停滞のサイクル」<sup>64</sup>に陥った地域社会において、生活に根ざした価値を基盤とする地域づくりの集団的主体が形成される条件を考察する。一部の発言力を持つ住民による意思決定の時期から多様な属性の住民による地域づくりの協同が生まれるに至るまでの、約50年にわたる実践の蓄積を分析することで、緩やかだが確かな地域社会の変化を捉えられると考える（飛渡地区年表を参照）。

本論文で主に使用するデータは、筆者が2012～2019年に実施した関係者へのインタビュー（調査対象者は表2のとおり）、十日町市教育委員会及び飛渡地区公民館が作成した資料、十日町市教育委員会及び各地区公民館が発行した学習記録・生活記録文集、地域づくり団体が作成した会報等資料、十日町市市報、新聞記事である（引用・参考文献リストを参照）。

図2 十日町市の位置<sup>63</sup>



<sup>63</sup> 十日町市ホームページより引用

<http://www.city.tokamachi.lg.jp/yukiguni/1454573065282.html>（2021年3月21日閲覧）

<sup>64</sup> 岩崎、前掲、p.177。

表 2 調査対象者とインタビュー実施日の一覧

| 調査対象者                            | インタビュー実施日                                  |
|----------------------------------|--------------------------------------------|
| 飛渡地区公民館三代目公民館主事・A 氏              | 2013 年 8 月 9 日                             |
| 飛渡地区公民館四代目公民館主事・B 氏              | 2013 年 8 月 27 日                            |
| 飛渡地区公民館六代目公民館主事・C 氏<br>(濃実会初代会長) | 2013 年 8 月 7 日、8 月 28 日<br>2015 年 2 月 17 日 |
| 元 飛渡地区公民館 事務職員・D 氏               | 2013 年 8 月 27 日                            |
| 元 飛渡地区公民館 事務職員・E 氏               | 2015 年 2 月 17 日                            |
| 枯木又婦人学級 学級生・F 氏                  | 2015 年 8 月 12 日                            |
| 枯木又婦人学級 学級生・G 氏                  | 2015 年 8 月 11 日                            |
| 枯木又婦人学級 学級生・H 氏                  | 2015 年 8 月 10 日                            |
| 枯木又エコ・ミュージアムの会役員・I 氏             | 2013 年 8 月 26 日<br>2019 年 8 月 8 日          |
| 枯木又エコ・ミュージアムの会役員・J 氏             | 2015 年 8 月 12 日                            |
| 枯木又エコ・ミュージアムの会役員・K 氏             | 2015 年 8 月 12 日                            |
| 枯木又エコ・ミュージアムの会役員・L 氏             | 2015 年 8 月 12 日                            |
| 枯木又エコ・ミュージアムの会役員・M 氏             | 2015 年 8 月 12 日                            |
| 枯木又エコ・ミュージアムの会役員・N 氏             | 2015 年 8 月 10 日                            |
| 元・地域おこし青年会議・O 氏                  | 2013 年 8 月 27 日                            |
| 元・地域おこし協力隊・P 氏                   | 2017 年 10 月 30 日                           |
| 元 六箇地区公民館公民館主事・Q 氏               | 2012 年 8 月 11 日                            |
| 元・飛渡地区振興会会長・R 氏                  | 2019 年 8 月 9 日                             |

#### (4) 新潟県十日町市飛渡地区の概要

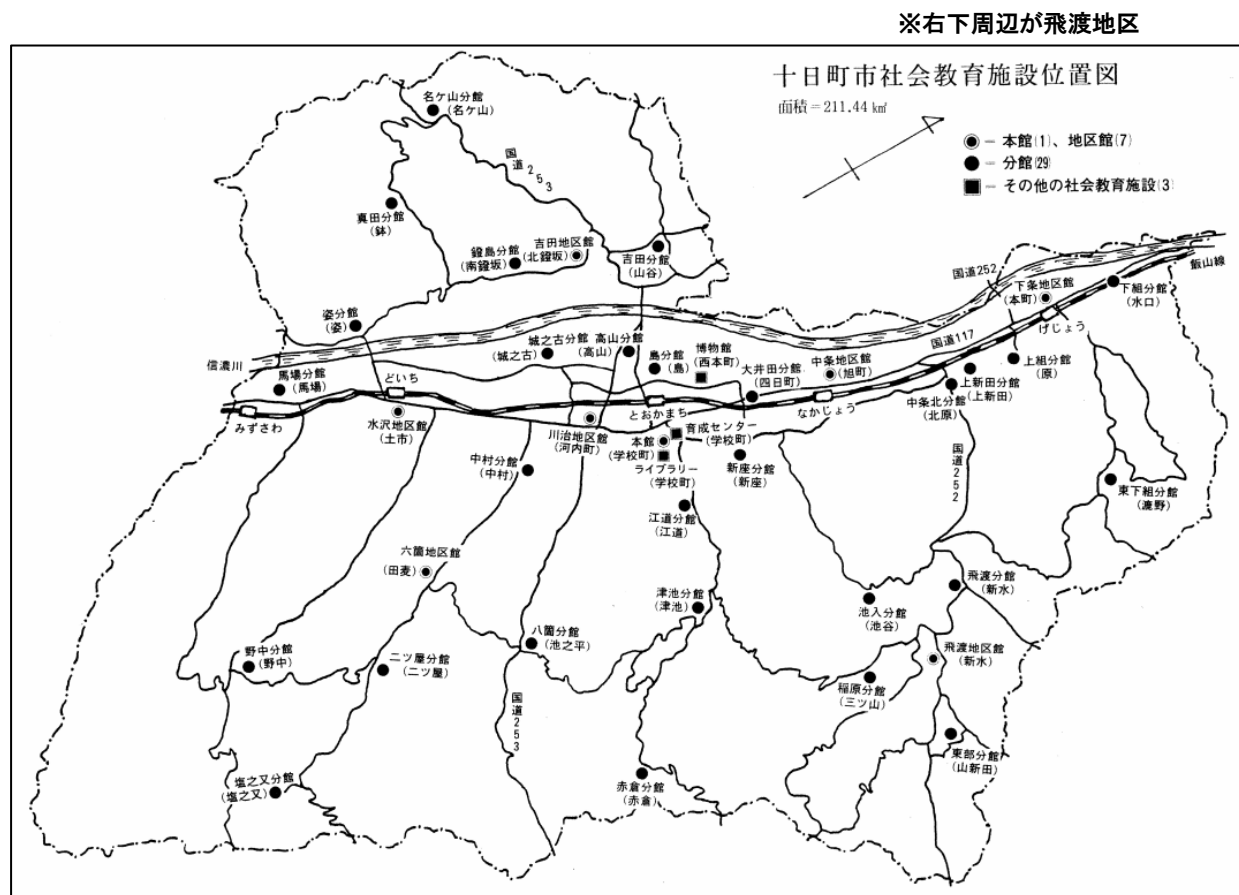
各章で扱う事例の概要については、各章の冒頭でそれぞれ述べるため、ここでは、その背景として新潟県十日町市飛渡地区と飛渡地区公民館の概要について述べておく。

新潟県十日町市は、新潟県南部にあり、周囲は山に囲まれ、冬は 2～3m の積雪がある豪雪地帯である。市内域に流れる信濃川と渋海川水系沿いに水田が広がり稲作が盛んで、明治時代末期以降は高級織物産地としても名高い。特に、高度経済成長期までは市内中心部できものの産業が活発であった。他方、旧村部である周辺の山間部は純農村であり、農業、特に米作が営まれてきた。

新潟県十日町市飛渡地区は、旧中条村（1954 年に旧十日町と合併）の山間部を指す。1962 年の世帯数が 407 戸であったが、高度経済成長期以降は人口減少の一途をたどり、

集落に残った者は、出稼ぎや出機内職（デバタ）に追われるようになっていった<sup>65</sup>。2019年4月末の世帯数・人口は164戸・500人である。集落数は14であり、飛渡川の左右に点在している。9割近い世帯がコメ農家だが、山間地特有の狭小な農地ゆえ、大半が兼業農家である<sup>66</sup>。

図3 十日町市社会教育施設位置図（1986年度「十日町の社会教育事業計画書」より）



続いて、事例分析の起点の時期となる1950～60年代の地域社会に埋め込まれていた価値意識がいかに形成されていたか、地域社会の公式な運営機構に着目して確認する<sup>67</sup>。まず、純農村である飛渡地区の住民が価値を置いていたこととは、自身のイエの土地保有とイエの存続継承であった。そのための規範として、家の構成員は家長に盲従すべきという原則や、長男（男性）が家を継承するという原則に基づく男性への権威の当然視があった。

<sup>65</sup> 「デバタ従事婦人の生活実態の調査と研究」新潟県教育委員会、新潟大学社会教育研究会、十日町市教育委員会、1965年2月。『出稼ぎ農民とその家族の生活—へき地山村の社会調査』十日町市教育委員会、新潟大学社会教育研究室、1966年2月。

<sup>66</sup> 飛渡の未来を創る会「飛渡地区の将来ビジョン」2016年。（飛渡地区公民館収蔵）

<sup>67</sup> この点に関する記述は、「デバタ従事婦人の生活実態の調査と研究」前掲、pp.83-91、に基づく。

また、集落（イエ連合）の基軸が同族結合に基づいており、山間部であるゆえに相互扶助的連帯の重要性が高かったことから、イエの関係性を維持するため和合に価値の高い傾向があった<sup>68</sup>。このような価値意識の下、各イエの意思決定は世帯主（主に年長男性）が担うものとされ、地域での意思形成の場である各集落の常会（自治会）や飛渡地区振興会を構成するメンバーも、各イエの世帯主であった<sup>69</sup>。

ここで、飛渡地区における家の代表に関する慣習を3点確認しておく。第一に、地域の会合（例えばPTAなど）には、基本的に男性が出席するものとされていた。女性は、地域社会の中で意見を述べる機会が基本的になかった。第二に、家業を継ぐこと（「家業渡し」や「代継ぎ」と言われる）については、一般的に父親が60歳前後、息子が30代前後の時に行われることが一般的だった。第三に、集落の常会に出席する世帯主は、家業の代表とは異なり、年長男性が担うものとされた。さらに、常会に出席する人々の中には年齢的序列があり、「60（歳）になってやっと一人前」で「会議に行って発言できる」ようになる<sup>70</sup>。地域に関する内容について決定する力があるのは、70代以上の人々が中心だった。集落の全世帯の代表者が常会に出席しなければならないため、年長男性がいない家の場合は青年男性が出席することになるが、たとえ家業の代表をしても、常会で発言を聞き入れられるのは困難な状況であったという<sup>71</sup>。

このような地域社会の慣習が示すように、当地域の女性や青年男性には地域社会のあり方に関する発言力がほぼなく、公共的意思形成の場から排除されていたという点で、地域社会の意思決定における周辺的存在と理解できる<sup>72</sup>。

常会のほかに、地域運営に関係する集団としては、各集落の青年男女による青年団（青年会）と各戸の既婚女性による婦人会があった。これらの活動は小学校・分校を単位としたまとまりをもって行われた。両団体は、住民の親睦を深めたり、集落の行事運営で与えられた役割、例えば青年団なら地域の祭礼の準備・運営を任されており、婦人会なら敬老会の準備などを担うことで、地域社会の文化的再生産に寄与していた。しかし、与えら

---

<sup>68</sup> 飛渡地区の各集落は、姓を同じくする一団である「マキ」という本家一分家からなる同族集団に基づいて成り立っている。本家筋の家は「おもだち（重立ち）」と呼ばれ、ムラの指導的立場に立つ支配層であったが、零落した場合はその地位を喪失し、経済的実力をもつ家に替わられたという（『出稼ぎ農民とその家族の生活』前掲、pp.50～51）。しかし、戦後に入ると徐々に各集落で「おもだち」による支配的統治は行われなくなった様子である。

（6代目地区館主事インタビュー：2015年2月17日、枯木又エコ・ミュージアムの会役員・I氏へのインタビュー：2019年8月8日より）

<sup>69</sup> 「出稼ぎ農民とその家族の生活」十日町市教育委員会、新潟大学社会教育研究室、1966年、pp.48-55。

<sup>70</sup> 6代目地区館主事インタビューより（2015年2月17日実施）。

<sup>71</sup> 常会の場での発言力は、世帯主ら年長世代を意思決定の筆頭とする年齢的序列に基づいていたため、男子青年が世帯の代表として参加しても一人前扱いされず、発言も一蹴されていたという（同上）。

<sup>72</sup> 6代目地区館主事へのインタビュー（2015年2月17日実施）。

れた役割（ムラ社会の再生産に資する機能）を越えた地域への影響力は求められなかった<sup>73</sup>。

このように、青年団や婦人会は与えられた役割を越えた活動は地域社会に求められなかったが、これらの集団が飛渡地区公民館の事業である青年学級、婦人学級の母体であり、先取りすると、そこでの学習活動が地域社会に新たな文化を生み出す起点となった。次節では、そうした活動を支えた飛渡地区公民館の成り立ちと運営体制を示す。

#### （5）飛渡地区公民館の成り立ちと運営体制

1950～1951年に、旧中条村の公民館分館が飛渡第一小学校・飛渡第二小学校と各分校に設置された。続いて、1954年の中条村と十日町市との合併の際、飛渡地区公民館が飛渡第一小学校に併設された。この時、飛一小・飛二小にあった旧中条村の公民館分館は十日町市の公民館体制に組み込まれたため、飛渡地区に位置する公民館は【十日町市中央公民館—飛渡地区公民館—4分館】という体制となった<sup>74</sup>。

表3 【公民館—小学校区—集落】の対応関係

| 公<br>民<br>館      | 飛渡地区公民館<br>※当初、飛一小併設。1973年に克雪管理センターに移転。 |                    |                                          |                                                        |                    |
|------------------|-----------------------------------------|--------------------|------------------------------------------|--------------------------------------------------------|--------------------|
|                  | 飛渡分館<br>(2019年廃止)                       | 池入分館<br>(2002年廃止)  | 稲原分館<br>(2004年廃止)                        | 東部分館 ※本校に併設。<br>※実質的には、枯木又分校地区の集落は枯木又分校を拠点に公民館活動をしていた。 |                    |
| 小<br>学<br>校<br>区 | 飛渡第一小学校                                 |                    |                                          | 飛渡第二小学校                                                |                    |
|                  | 本校                                      | 池谷分校<br>(1984年休校)  | 三ツ山分校<br>※1972年飛一校編入<br>(1991年休校)        | 本校<br>(2005年廃校)                                        | 枯木又分校<br>(2007年廃校) |
| 集<br>落           | 新水/轟木/焼野/<br>嘉勝/魚之田川/<br>上田原/蕨平         | 池谷/入山(1989<br>年廃村) | 三ツ山/高場<br>(1975年廃村) /<br>笠置(1968年廃<br>村) | 宇田ヶ沢/山新田/菅沼/小<br>貫(2007年廃村)/柴倉<br>(1973年廃村)            | 東枯木又/西枯木又          |

十日町市は、地区館が中心となって地域密着の運営や地域の実態に即した事業の展開を行うために、当初から各地区館に公民館主事として常勤職員を配置した<sup>75</sup>。したがって、地区公民館主事の裁量権が大きかった。

<sup>73</sup> 多田朋孔・NPO 法人地域おこし『奇跡の集落』農文協、2018年、pp.12-14。飛渡地区公民館『とびたり』2号、1967年。東部婦人会『まわしがき』1963年、など。

<sup>74</sup> 閉校や人口減少で活動が停滞して多くが廃止に至り、2019年現在は飛渡地区公民館—1分館の体制である。

<sup>75</sup> 十日町市公民館「公民館設置四十周年記念シンポジウム」1987年。小林文人・佐藤一子編『世界の社会教育施設と公民館』エイデル研究所、2001年、p.356。

飛渡地区公民館主事（以下、地区館主事とする）の主な職務は、社会教育事業の企画・運営と、飛渡地区振興会はじめ様々な地域団体の事務局である。事業の企画にあたっては、地域団体の会合にまめに出席し、公民館運営委員や地域住民と積極的に関わり意見交換することで、地域住民は今一番何がやりたいのかを一緒に考えながら事業を企画する「足で稼ぐ」考え方が受け継がれてきた<sup>76</sup>。そのため、地域住民が「公民館の衆が言うなら協力する」というほど高い信頼を得てきた<sup>77</sup>。事業内容の方針は、初代地区館主事（1954～1962年）が公民館を「住民の自発的な学習の場であり、（略）民主主義の道場でもあり、地域振興の拠点」と位置付けて、続く地区館主事も「地域づくりと地域活性化の拠点」と同様の考えを継承してきたことから<sup>78</sup>、飛渡地区は文化・教養学習のみならず地域づくりを前面に課題化した活動も重視されてきた点が特色である。飛渡地区は中山間地域に位置し各集落の距離が離れていたため、人口減少が進むまで基本的に事業は分館単位で行われた。

飛渡地区公民館は当初から常勤の地区公民館主事（1985年以降は嘱託職員<sup>79</sup>）1名が配置されていたが、1973年から事務職員1名（嘱託職員）が加わり2名配置となっている。事務職員の職務は、事務と事業運営の補助である。歴代の職員は飛渡地区の住民になる場合が多く、地区公民館主事が嘱託職員となった1985年以降は、地区公民館長らによって地域に詳しい人や公民館活動経験者の地域住民が意識的に選出されていた。

分館運営については、地区館主事が強く関与するのではなく、各分館の主体性が重視されていた。特に、設置場所の学校教員が分館館長や分館主事として主導したため、学校行事と連動した事業や文化活動が中心だった。ただし、分校の廃止と人口の減少によって、地区公民館分館の多くが廃止となっている（表3）。

## （6）飛渡地区公民館の主な実践史

続いて、飛渡地区の文化的再生産の構造の再構築において地区公民館がどのような機能を担うかという検討の前提作業として、地区公民館がどのような地域課題に向き合い事業展開してきたのか概観しておく。

まず、飛渡地区公民館における設置当初の事業は、当時、多くの公民館で行われていたように、封建的社会秩序の解決を目指すものであった。地域社会の民主化を推し進めるための事業として、映画会や時局講演会、婦人講座などの催し、特に、青年対象の「夜学」（青年学級）が行われた。しかし、1950年代後半には日本が高度経済成長期に入り、青年の出稼ぎや地域外への流出が進み、青年向け事業が徐々に縮小していった。

1958年に入ると、十日町市内で初めて中条地区（旧中条村の平場地区）が文部省委嘱婦人学級を開設したのを皮切りに、多くの公民館が婦人会に婦人学級の開設を働きかけた。

---

<sup>76</sup> 3代目地区館主事へのインタビュー（2013年8月9日実施）。

<sup>77</sup> 元・飛渡地区公民館事務職員E氏へのインタビュー（2015年2月17日実施）。

<sup>78</sup> 飛渡地区公民館「飛渡地区公民館設置35周年記念誌」1989年。

<sup>79</sup> 非常勤職員となったことを意味する。

飛渡地区でも、1962 年度に文部省委嘱婦人学級の開設がなされることになり、各分館に婦人会メンバーが集まって婦人学級が取り組まれるようになった。高度経済成長期に入ると、男性たちが出稼ぎで毎年半年ほど地域にいないこと、それによる生活の負担が嫁の立場の女性たちにのしかかっていったことから、公民館事業では彼女たちの困難に寄り添う婦人教育事業がより一層模索された。ただし、多くの分館では、過疎化による人口流出や、内職で多忙化した女性の増加から、婦人学級の参加者が減少して活動が停滞していった。飛渡地区で 1980 年代以降も活動を継続していたのは、飛二小・枯木又分校区で行われた枯木又婦人学級だけであった。

1973 年には、多くの集落・分校区の青年団活動の停滞を受けて、飛渡地区青年団が解散したため、地区公民館では集落を超えた新たな青年の交流の場づくりや組織化を重点的に行うようになった。1970 年代後半のそうした試みの蓄積により、1980 年代には、過疎問題と向き合い地域の未来を考えるための事業が青年中心に展開された。例えば、地区公民館による動機づけで「地域おこし青年会議」（1985 年結成）が組織され、青年のアイディアによる地域づくり実践が行われるようになった。この活動が基盤となって、地区公民館は次第に多様な地域住民による地域づくり団体の結成を促していった。特に、学社連携事業「ふるさと環境学習」の支援団体である「濃実会」（1996 年結成）は、飛一小・飛二小校区を超えて、かつ、老若男女を問わない住民の結びつきのシンボリックな団体として位置づいており、現在まで活動を継続している。

2004 年には、飛渡地区は中越地震によって大きな被害を受け、家の損壊が引き金となって人口流出が一層進行した。その際、飛一小校区・池谷集落は、いち早く復興支援ボランティアを受け入れ、都市部からきたボランティアとの交流に取り組んだところ、移住者獲得につながった。その経験をふまえて、飛渡地区振興会は、「地域おこし協力隊」制度を活用して移住者の受け入れを行うことにして、飛渡地区の地域おこし協力隊（以下、「協力隊」とする）の活動拠点を飛渡地区公民館とした。飛渡地区公民館は、協力隊の管理業務を担当することになり、協力隊の活動の相談や支援、地域住民からの要望と協力隊の調整役を行ったことで、地域住民と協力隊の交流を深めるのに寄与した。それにより、協力隊と地元農家による「飛渡の食と農を考える会」（2012 年）が結成されるに至り、地区の農業の活性化にむけた活動が生み出された。この活動を基盤に、2015 年には、農業に限らない、教育・福祉など生活の多方面について話し合い活動する「飛渡の未来を創る会」が結成され、地域住民主体で活動が展開されている。地区公民館は、濃実会や飛渡の未来を創る会など、現在も続く地域住民による実践の側面的サポートを行っている。

このように、飛渡地区の地域社会と公民館の関連とは、地域社会の危機が文化的再生産の構造に反映して学習実践に影響し、または反対に、学習実践が文化的再生産の構造を再構築することで地域社会構造の再生産の論理を組み替えようとする関連が見て取れる。

## （7）本論文の構成

第1章は、周辺層の地域認識をめぐる新たな価値の意識化の学習を通した主体形成の意義と限界、第2章では、周辺層の主体形成を起点に文化的再生産の構造が再構築される論理を検討する。その上で第3章では、過疎地域における地域づくりの協同形成を支える学習支援機能のあり方を検討する。

各章で対象とする事例に即して述べると、第1章では、飛渡地区において過疎問題に対抗していく地域づくりを展開する土台となった婦人学級の内実を検討する。婦人学級の学習活動の始まりから停滞に至る過程に即して、生活記録文集を手掛かりに、生活の対象化の質の変化から女性たちの主体形成プロセスを検討する。その検討を通して、地域認識の視座の転換の論理とそれにより切り拓かれる地域社会の構造変化の可能性を考察したい。

第2章では、飛二小・枯木又地区での婦人学級と青年の都市農村交流を通した学びの中から地域づくり実践が生まれ、地域づくり団体「枯木又エコ・ミュージアムの会」成立に至る事例を取り上げる。周辺層の地域づくりの主体形成から、地域づくりの協同形成へと展開していくプロセスに即して、新たな文化の公共圏の形成・拡張の過程を検討する。

第3章では、地域づくりの協同形成過程における学習支援機能を、飛渡地区における地域づくり団体の組織化過程における飛渡地区公民館の役割に着目して検討する。

終章では、本論文の総括を行う。

## 補論 過疎地域の地域づくりにおける集団的主体形成への視角

### 1. 課題と方法

#### (1) 課題設定

補論では、序章で検討した先行研究の到達点をふまえて導かれた課題のうち、異なる価値観の住民間コンフリクトを乗り越えていく集団的主体形成過程に迫るための分析視角を検討する。そのために、地域生活に根ざした価値の意識化が確認されている実践事例を取り上げ、実践的限界の所在を明らかにしたうえで、理論的課題を整理する。取り上げる対象事例は、地域の価値の見直しと外部との新たなつながり形成を検討できる実践として、エコミュージアム<sup>80</sup>に着目する。以下では、北海道中川町のエコミュージアムセンターボランティアによる地域づくりにむけた取り組みをみていく。なお、ここで事例について紹介している内容は吉田（2010）によるものである<sup>81</sup>。

中川町エコミュージアムセンターでは、来訪者に対して、地域住民ボランティアによる地域の自然・文化の紹介や、地元食材を活用した料理提供を通じた交流が行われており、都市農村交流の性質を持つ実践といえる。この実践に関わる地域住民ボランティアは、活動への参加を通して、各自が地域生活に根ざした価値の意識化をしている点が確認されている。しかし、ひとりひとりのボランティアに地域づくりの主体性が芽生えても、実践が展開していかない問題や困難が生じていた。以下では、事例の概要を述べた上で、実践が提起している論点を確認し、過疎地の地域づくりにおける集団的主体の形成への視角を導き出すこととする。

#### (2) 中川町エコミュージアムセンターで住民ボランティア活動が行われた経緯

まず、中川町とエコミュージアムセンターの概要を確認する。

中川町は北海道の北部に位置し、天塩川とこれに合流する安平志内川流域に沿って南北に細長く拓けた中山間の農村である。世帯数 791 戸・人口 1491 人（2019 年、1 月末現在）であり、1957 年の 7,337 人をピークに一貫して人口流出が進み、過疎化・高齢化の進行し

---

<sup>80</sup> 「エコミュージアムとは「ある一定の文化圏を構成する地域の人びとの生活と、その自然、文化および社会環境の発展過程を史的に研究し、それらの遺産を現地において保存、育成、展示することによって、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする野外博物館」と定義づけられている。そして、その運営は、住民参加を原則とし、普通の博物館と違って対象とする地域内にコアと呼ぶ中核施設（情報・調査研究センター）と、自然・文化・産業などの遺産を展示するサテライト（アンテナ）、新たな発見を見出す小径（ディスカバリートレイル）などを配置し、来訪者が地域社会をより積極的に理解するシステムで行われている。」（文部科学省 HP、[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/014/shiryo/07082703/002.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/014/shiryo/07082703/002.htm)、2021 年 1 月 9 日閲覧。）

<sup>81</sup> 本章で取り上げる中川町の事例は、吉田弥生「過疎地の地域づくりにおける生活文化活動の意義」（修士論文）2010 年から引用している。

ている町である。

中川町の過疎対策は、「第3次中川町総合振興計画（平成1～10年度）」までハード面整備中心であったが、「中川町第4次総合計画（平成11～20年度）」策定にむけて行われた町民アンケートでは、町民が地域経済や地域社会の衰退を受け、地域に対してネガティブな認識を形成していることが明らかとなった。当時、学術的価値の高い化石が発見されて町では化石博物館をつくってまちおこしの起爆剤にしようとする計画が進んでいたが、学芸員は、化石に興味がない人も関わるができる、地域を捉え直す場として博物館をデザインすることにした。こうして2002年、「町民一人ひとりが学芸員」となり「地域の魅力を新・再発見」することのできる場として「中川町エコミュージアムセンター」がオープンした。

「町民自らが地域の魅力を新・再発見」していけるようにセンターが用意した住民参画のしかけは、特技を生かして教育・普及事業の講師役をする「地域講師」と、センター運営（調理・清掃・草刈り・ミュージアムショップ）を担う地域協力隊「エコール咲く」というボランティアグループの2種類であった。センターでの住民の活動や交流の蓄積が、地域づくりにつながることが期待されていた。ここでは、地域を捉え直す学習が焦点となった時期を中心に、「地域講師」（ほぼ男性、50～70代）と「エコール咲く」調理メンバー（全員女性、40～60代）の学習の展開と、実践の展開によって生じた矛盾を確認する。以下では、2007～2009年に行ったボランティアへのインタビューと、刊行物に基づいて分析する。

## 2. 地域の価値の意識化論理

### （1）地域講師のケース

#### ① 外部とのかかわりを契機に地域の価値を捉え直す学び

まず、最も長く地域講師に関わってきた、「なかがわ化石会<sup>82</sup>」（以下、「化石会」とする）という地元グループのメンバーを例にみていこう。彼らは、化石採集を趣味で楽しむ町内の中高年男性によるグループであった。化石会のメンバーは、郷土資料館からの依頼で中川町に化石調査にやってくる研究者・学生の支援や彼らとの協働作業を行うようになったことで、地元でとれる化石の学術的意義、ひいては化石会の活動への使命感を感じるようになっていった。すなわち、研究活動への参画を媒介して地域資源のひとつとして化石を認識し始めたといえる。

続いて、学芸員からの依頼で「地層観察教室」の地域講師役として化石会メンバーが事業に参画したのも、化石会として中川町で採れる化石の魅力や学術的意義を伝えたいという使命感があったからである。しかし、事業における都市部の子どもたちとの交流を通し

---

<sup>82</sup> 「なかがわ化石会」は、1988年に発足した町民による団体。活動目的は、「古代生物の化石からロマンを追求し、地域文化の向上と振興」を目指すことである。

て、化石以外の地域資源を見出すようになっていった。例えば、地域講師役の住民は、子どもたちが昆虫や植物に感動したり、大人が焦るような川の増水を楽しんだりする様子を目の当たりにしたことで、化石が見つからないと申し訳ないという思いから、「子どもたちと一緒に目線で見えていくと、まだまだ遊べるものが無尽蔵にあるんじゃないか」と感じた。すると、「一緒に行動しながら一緒に喜びを共有していく、感動を与える、与えられる。そういうことであれば、結果もの（化石）がなくても、それなりに楽しめるんじゃないか」と考えるようになった。また、都市住民が「田舎の料理」である山菜料理に喜ぶ様子からは、お金をかけていない素朴さを卑下する必要はなく、むしろ都市住民は「田舎の良さ」を求めてきているという実感を得ていた。

このように、化石の地域講師たちは、はじめは学術的に価値が認められている化石という、外部が価値を与えているものしか地域資源と捉えてなかったが、自然の中で子ども達がいきいきと過ごす様子に触れることで、交流を行うことの喜びを実感していった。また、地元の食文化を都市への劣等感から「田舎料理」だと下げた物言いをしていたが、山菜料理を評価する都市住民に出会うことで、自分たちの生活や地域に対する自信や誇りを回復した。外部者が地域の自然や食文化など住民の予想外のことに心から喜ぶという肯定的評価を得たことを契機として、住民が抱いていた地域への否定的な認識（資源が乏しい地域という認識など）が覆り始めたことがわかる。

そして、町内外の老若男女との様々な交流事業を重ねるにつれ、地域講師は自分が本当に大切にしたいことや相手に伝えたいことを模索していった。例えば、都市の子どもの様子からもっと自然に触れさせてあげたいという思いが強くなった地域講師は、「石（化石）ばかりではなくて、自然界にいる動物から、虫から何から」実際にふれさせてあげたい、と思うようになり、アウトドアの専門ツアーコンダクターができれば、と考えるようになった。

自分が事業で伝えたい価値や地域資源、取り組みたい役割を意識化していくと、農業や昔の遊びなど他の地域講師の「専門性」を理解するまなざしも、その人の背景や土地の歴史に意味づけられて生まれているとの理解に基づくものとなった。「町民みんなが学芸員っていうテーマは、あながち間違っていないという気はする」という言葉にもあるように、地域講師の人たちは、互いの持ち味を出し合うことで子どもたちに地域の歴史を見せていくことができる「仲間」だと考えるようになっていき、地域講師間に横のつながりが生まれ、自分の専門以外の事業も手伝い合う関係が生まれていった。飲み会では、互いにアイディアを出しあうようなことも起こりはじめた。

このように、交流の喜びをもたらす地域の自然や文化が対象化されたことで、それらに価値を感じるようになっていった。すると、自分の実感や生活文化への自信を回復し、大切にしていきたい価値を自ら再構築（「諸事象の自分事」化）でき、さらには、様々な地域講師の生き方も尊敬し、互いの実践を支え合い、発展させようとする関係が生まれたと考えられる。つまり、地域の中には交流の契機や喜びをもたらす価値ある資源が様々なところ

と認識する住民の間では、地域の自然を活かしたり生活文化を継承する住民としての連帯が形成されていたといえる。

## ② エコミュージアムセンターという学びの場の対象化から価値の拡張へ

地域講師たちは、自分たちの伝えたいこと（価値）や役割が確信されるにつれ、それを実行していくための条件整備を行うため、実践を規定するものを意識するようになった。まず、実践の舞台であるエコミュージアムセンターに対して、様々な人が集う「ふれあいの場所」、「学びや気づきの場」としての意義を見出していき、センターの役割に自覚的になっていった。一方で地域内にセンターに対する批判的意見（「お金が無いのになんであんなところにお金をかけないといけないの」）があることから、そこにどう向き合うかという問題も見出されていった。それに対して、化石会の地域講師は、化石会メンバーが地元で採集した化石の特別展を企画し、地元の学校や町内会を招待して積極的に案内をするなど、地域の人びとがエコミュージアムセンターの価値を感じてもらうきっかけを作ろうと宣伝に励むようになった。

このように、地域講師たちは、守り育てたい地域の価値を意識化したことで、このような学習を可能とするエコミュージアムセンターへの批判に目を向け、自分たちとは異なる価値観＝ここでは、経済的視点からしか評価しない地域住民の認識を対象化した。そして、他の地域住民にもエコミュージアムセンターの意義を理解してもらおうと取り組む活動は、地域づくり主体として自身の重視する価値を他者と共有しようと試みているといえよう。そして、このような活動が可能となったのは、かれらがもともと学校や町内会の活動への発言力を有する立場にいたからこそ可能であったと考えられる。

## (2) エコール咲く調理グループ・メンバーの学び

### ① 地域の価値を捉え直す学び

「エコール咲く」調理班とは、宿泊者に提供する食事づくりに取り組むボランティアグループである。ボランティアと言いながら公募で人数が集まらず、役場関係者や地元住民の声かけで集まった中高年女性がほとんどである。地域の衰退を案じる者もいたものの、多くのメンバーの参加動機は地縁的な義務感からであった。

活動が始まって一年ほどは、エコミュージアムセンターを推進してきた町長の支援者らが運営を取り仕切っていたが、選挙でその町長が落選してから支援者の人々はボランティアを脱退し、地域のために加入したメンバーだけが残った。彼女らはそれまでの運営に不満を抱いていたので、リーダーは置かずにボランティアみんなで協力して運営を行うことになった。運営が安定して行えるまでは、「来ている子どもたちとふれあうような時間とか余裕が無い」ほど食事提供を無事遂行することに必死だったが、慣れてくると食事に対する来館者の反応や提供メニューの内容にも意識が向くようになった。例えば、「おいしかったよとか（言われたり）、おかわりしたら嬉しい」と思ったり、「残して先生に怒られたら

かわいそうになあ、あんまり注がないほうがいい」など、来館者の様子を手掛かりに食事のあり方を検討するようになり、徐々に変更を加え始めた。そのひとつに、市販のイチゴジャムを提供した際に、「うちの手作りジャムのほうがおいしい」と感じたメンバーが出てきて、センターの食事でジャムを手作りして提供するようになった。

ある時、センターの職員から、敷地内にあるハスカップがそろそろ採れると声をかけられたメンバーは家にもちかえってジャムを作り、仲間に食べてもらおうと好評だった。この経験以降、「せっかくここにあるものを使ったら、ここの敷地にあってみんなが手作りで作ったもんだよっていうのであれば、食べる人もちょっとうれしい気持ちになるんでないかな」と感じ始めるメンバーや、エコミュージアムセンターという「中川の魅力を発信する場」「中川らしいものが集まる場」で提供する食事だから、工夫する余地があると感じるメンバーが増えてきた。

いよいよ調理班全体で「中川らしいもの」を提供しようという機運が高まっていき、「中川町エコミュージアムセンターの食事」のアイディアをみんなで出し合うこととした。しかし、センターの売りである「化石」にひきずられて「アンモナイトラーメン」などの形式的な中川らしさにとどまった案は提供イメージがわからなかったため、検討が深まらなかった。

しかし、ある時たまたま市販品のコーンスープを提供したときに、来館者の評判が良かったことから、自宅で手作りコーンスープを作っていたメンバーが、自分達で作ったものなら添加物はないし地元のとうもろこしを活かしたメニューを提供できると考えて、センターで手作りすることを提案した。中川町ではとうもろこしを作っている家が多く、多くの家庭で手作りコーンスープは生活にねぎしたメニューだということがわかり、「みんな作ってるから、やれると思って」「みんなが賛成したから、みんなで協力して、やるようになった」。また、作ったことのないメンバーも覚えたいということで、積極的に手伝いに来た。実際に提供したところ非常に反応が良く、メンバーは「ここのオリジナルメニュー」とアピールできるものだと感じていった。こうして、「中川には自然しかないから、だからその自然の中で、中川でとれたものを来た人になんかひとつでも食べてもらいたい」という思いが高まっていき、ほかにもカボチャやフキなど地元産食材を用いた家庭料理がメニューに加わっていった。また、メンバーの集まりでは自宅で作ったものを持ち寄ることも増えた。使ったことのない地元食材のメニュー開発も行われるようになった。こうした動きは、「中川の紹介とまでは言わないけど、自分たち調理班で、中川のもの一品は入れようか」という合意がつくられていったことによるという。ただし、少ないメンバーで活動しているため、活動を乱さないようにと様々なアイディアを気軽に言い合う状況ではないという。

このように、調理班のメンバーは、調理提供に慣れたことで、「エコミュージアムセンターでの食事」なのだから地域の魅力を表現する食事を提供した方がよいと考え始めた。その際、化石という外からみた地域の特徴を形式的に生かすアイディアを採用するのではなく、提供してきた食事で来館者が好んで食べる市販のスープを手掛かりに、自分たちが日

常的に地元食材で作る味の方が美味しいと気づいたことで、それをメニューに組み込んでいる。すなわち、女性たちは外在的な価値によろうとするのではなく、日常の食生活の中で美味しいと実感する地元食材の料理に価値を見出しており、自分たちの生活文化の中から検討することを重視していたといえる。

さらに、地元食材のメニューが好評だったことを受けて、自分たちだから生まれた「オリジナルメニュー」だと自信が生まれていった。その自信は、女性たちが生活の中で育んできた食の知恵の自覚につながり、仲間内での家庭の味の学び合いにつながっていたと考えられる。

## ② エコミュージアムセンターという学びの場の対象化

メンバーの中には、調理班にかかわることで地元食材を活用したメニューの作り方を互いに学び合う楽しさを実感したことから、この輪を広げて若い世代にも伝えていきたいという思いを持つ者もいた。地元の子育て支援センターから若い母親に料理を教えてほしいとの声かけがあった時は、あるメンバーがつくっていた昔ながらのおやつを紹介して「センターに来ると、いろんなこと覚えられていいよ」と声掛けをしたという。

また、メンバーたちはセンターで活動することで、様々な地域から化石の研究者が調査研究に来たり、遠くから見学に来る人がいることを知り、中川町の多くの家庭ではちょっとした化石を持っているために化石の価値を感じていなかった者が多かったが、町外の知人に「有名な石（＝化石）が出るところなんだよ」とアピールしたり、来町時にセンターに連れていくようになった。

メンバーはセンターの価値や活動の楽しさを実感するにつれ、センターの価値を多くの町民が理解していないという思いが強くなっていった。「全然携わってないときは、すごいここにお金かけてそれだけの需要はあるんだろうかっていう思いはあったけれど、実際携わってみると、ここは残ってほしいなっていう、ひとつの「中川らしいところ」だと思う」というように、多くのメンバーは活動したことで「ここを盛りたてていかなきゃいけないっていうのは、最初より強くなってきた」という。お金の面から見ると「すごいお荷物だって言う人もいるんだけど、せっかくできたものをやっぱり持続させたいなって気持ち」があるという。だからこそ、町内でも来たことのない人がいるということで、各メンバーは積極的に口コミの宣伝に取り組んでいる。

以上から、エコール咲くの人びとは、外部との関わりを契機に地域を捉え直すようになっていたのだが、捉え直す方法は地域講師とは以下の点が異なっていた。例えば、メニュー開発の際、外部から指摘されてきた価値だけにこだわらず、自分たちの生活文化の次元から、自分達にとっての価値あるものを検討していた。彼女たちのメニュー開発の動機は、中川町にわざわざ来てくれた人に、ここに来たから食べられたと喜んでもらえるものを提供したいという思いから出発している。そのため、地域講師は、外部からの指摘を契機に発見した地域の価値を直接的に資源とするにとどまっていたが、エコール咲くは、「おいしい」「地元食材」を活かしたものであれば資源とみなせる価値基準が形成されていたため、

それに該当するものを検討するために自分たちの生活を省察することとなったからだと考えられる。

また、エコミュージアムセンターの意義を周囲に理解してもらうべく、エコミュージアムセンターと関わりのない地域住民とその意義を共有するための実践に取り組むという点では地域講師と似通っているものの、調理班の場合は、メンバーの個別的な試みにとどまっており、食事提供を超えた活動を調理班として合意形成できてはいないし、男性のように地域団体等に働きかけはしない。これは、むしろ彼女たちが、地域団体に働きかけるルートを日常的に持たないと理解できよう。

以上から、地域外部のアクターと多様な次元の関係性を構築することで、市場的・都市的視点を相対化する視点が形成されることは両者から確認されたが、その質は異なっていた。地域社会を再生産する主要な担い手である中高年男性である地域講師たちは、都市農村交流を契機として、外部から承認されている地域資源（化石）以外のものにも、人間的な交流に資する価値があることを見出したことで、ありのままの地域を受容してもよいという地域認識が形成されていた。それに対し、調理班の女性たちは、「地域らしさ」の模索を契機として、「おいしい」×「地元食材」の組み合わせに価値基準が生まれた。それによって、生活実感を手掛かりに、自分たちにとっての生活に根ざした価値ある資源を探索しており、そのことで見出した価値を土台とした資源創造の可能性も拓かれていたといえよう。

したがって、外部との関係性の構築だけでは地域づくりの芯となる価値形成までつなげていくには不十分で、地域住民の生活実感に即して価値を検討する局面を有することによって、生活文化に基づく価値を土台とした地域づくりの展望を見出されることが確認できる。

### 3. 明らかになった実践的課題

以上、センターのボランティアが地域講師や調理班の活動を通して地域と生活を捉え直し、自らが大切にしたい価値を意識化し、その価値を周囲と共有したり拡張しようとする過程が実践に即して確認された。しかし、活動を通して生まれた地域づくりの主体性を発揮しようとした際、上記の実践だけでは限界がみられた。以下では、本事例においてどのような実践的課題が顕在化したか見ていこう。

#### (1) 思いついたアイデアをメンバーに言えない

地域講師と比べて調理班で顕著だったのが、「本当はアイデアがあるけど、みんなに提案できない」という集団と個の関係である。合意が取れているのはあくまでもメニューに関する工夫だけで、調理提供を超えたアイデアは出しづらいという。その理由は、言い出しっぱは必ず最後まで携わるべきということ、自分ができる自信が無いならアイデアを出すべきではないとするなど発案者の責任を重視する雰囲気強いということだ。その

要因として、地域講師は各自が個別的かつ主体的に活動への関与度を決める裁量があるのに対して、調理班は地縁的なしがらみから最低限の協力をしているメンバーも含めギリギリの人数で運営していること、また、初期の運営中心層が抜けた際、残ったメンバーで「全員が対等に活動に関わる」方針が共有されたことから、活動継続のためには波風立てずに組織の分断や離脱者を出さないことが最優先だったことがある。よって、例えば料理提供時にどんな地元の食材を使用しているか説明したほうが良いと考えているひと、地元食材の加工品販売に興味があるひとがいたものの、組織として料理提供するという目的達成にむかって全員で足並みを揃えることが優先されたため、活動目的の豊富化や、様々な参画の仕方が生み出されるのが困難となっていた。

## (2) 行政の地域振興の枠組みにあてはめられることへの反発

2007～2009 年にかけて、美瑛町・中川町・中頓別町、北海道大学・民間企業・NPO の連携による「プロジェクト北の杜」が行われた。このプロジェクトは北海道大学のコーディネートのもと、「地域に新しい生業（ライフウェア産業）を作ること」を目指して、「癒しや健康づくりを目的とした観光」の提案などに取り組むものであった。

中川町では、中川町のもつ魅力（地域財産や風土・人）を媒介としたツーリズムの展開を目指してツアー人材の養成や特産品づくりの推進が目指されて、エコミュージアムセンターのいくつかの活動がこのプロジェクトに組み込まれた。行政の意図としては、地域住民にセンターでの活動の蓄積を地域づくりに生かすきっかけにしてほしいという思いもあった。センターの事業として行っていた山歩きや化石探検の事業を「中川町森の学校 2008 秋課外授業『中川の歩き方』」としてエコツーリズムやグリーンツーリズムを意識した枠組みのもと実施することになったり、料理研究家の星澤幸子氏にセンターの調理班で地元食材の料理をふるまう料理会が行政によって設定された。

プロジェクト北の杜の枠組みで事業に参加した地域講師は、観光産業として事業をやることで受け入れ人数を増やして、事業の質や教育的価値を担保できるのかとの疑問を抱いた。「数が多い方がかっこいいかもだけど、人がかかわるなら、信頼が育つような、（参加者の）ニーズに対応できるようなものがいい」「（参加者が）たくさんいても、みんな目配りできないんなら、来た人も面白くなかったらそれっきりになる」と述べるように、彼らは参加者とのふれあいの重視や、中川に住んでいるからこそ知っている地域資源を「アレンジして提供していく」役割を担いたいという思いがあり、行政の側から事業をビジネスの文脈に位置づけられたことに困惑し、プロジェクトへの関わりを控える者もいた。

調理班のメンバーも、地元食材を使った料理会の要請が突然ふってきて戸惑っていた。提案した職員の意図としては、引っ込み思案な女性たちに自信をつけてもらいたいという思いがあった。しかしメンバーは、「ほとんどこの食材でやったの。（略）結構気を使って、豪華にやってました。星澤先生に（つつこみを）言われないように（笑）」「忙しかった…面白いところまでいかなかった。大変だからもういいねってみんなですって」と、

通常のスタンスを超えて取り組んだことへの疲れを感じていた。調理提供がある事業でも、「北の杜なんだかエコでやってるんだかなんだかわかんない部分あるけど、あたしらは料理つくってればいっかってやってます。深くかかわらないように…」と、距離をとっている様子うかがえた。彼女らは、思いを行政側に明確に表現し対話するということは考えていなかった。

このように、当プロジェクトでは、住民がセンターの活動を通して構想してきた地域づくりの実現にむけて主体性や創造性を発揮する局面はなく、地域振興に向けた観光ビジネスコンテンツの担い手として住民が当てはめられたに過ぎなかった。センターの活動を通してボランティアの中で育まれてきた「中川のもつ魅力」を発信したい、という思いについてはボランティアも行政も同じであり、また、ボランティアの中には地域資源の商品化に関心を持つ人がいたのだが、観光ビジネス的視点が全面に打ち出されたことに対して多くのボランティアが違和感を覚えており、結果としてこのプロジェクトはボランティアたちに歓迎されなかった。

#### 4. 理論的課題の検討

以上、事例を通して、地域づくりに取り組む様々な住民・組織が実践を展開しようとする中で引き起こされた矛盾について検討した。中川町の事例では、ボランティア集団内で、ある者が地域づくりに関する新たなビジョンを見出だしたとしても、現状の活動を維持するため波風立てないよう黙ったり、また、行政が地域振興として地域づくり実践を展開しようとした際、巻き込まれたボランティアたちが、違和感を伝えずに実践への深い関与を避けようとする動きが見られた。つまり、地域社会内の政治・経済的に異なる立場に立つ人々の価値意識の対立や非対称な関係性（パワーの差異）などによって、必ずしも協同的活動が生み出せないという事象ととらえられる。したがって、地域住民の一部がある価値意識に基づき実践を展開しても、支障なく地域全体にその価値意識が共有されるわけではない様子が確認された。

以上の実践の意義と限界が、過疎地域における地域づくりの主体形成論に対して提起している論点を、以下に述べる。

第一に、地域社会の周辺層やマイノリティが、地域社会を組み替えるための主体的な活動を作り出す力量形成の論理についてである。調理班メンバーは、彼女たちの生活に根ざした地域（資源）の価値を意識化しつつあったものの、調理班でそれぞれの考えを対話的に共有できなかったり、行政の企画に動員されて違和感に苛まれたりしていた。また、調理班は職員に「引っ込み思案」と称されていたが、メンバーたちはみな農村社会で嫁として生活してきた女性たちであり、彼女たちが地域社会で主体性を発揮してきた機会は少ないことが推察される。すなわち、周辺層の住民は声を上げにくく地域生活の中で客体化されがちであり、地域づくり実践に対等に参画することの困難さが見てとれる。ここから、周辺層の人々の主体形成において、生活に根ざした価値や課題意識を意識化し、それを安

心して表現できるようになること、また、そのような思いを共有していける関係性のあり方がどのようなものか、問うていく視角が求められると考える。その上で、周辺層の協同の形成と地域づくりの主体形成それぞれの学習を区別した上でそれらの関連構造を明らかにすることが求められよう。

第二に、地域づくりの過程において、地域づくりの展望や価値観をめぐるコンフリクトをいかに乗り越えていくことができるのかという点である。中川町の事例から示されたのは、外部との新たな関係が形成されることで、地域内での価値の発見につながり、地域内の価値意識の差異が顕在化するという点であった。そして、ある価値の下で外部との関係を構築しようとするれば、地域内の価値意識の差が対立に転化し、地域づくりに向けた協働が困難になることが確認された。

北の杜事業をめぐるのは、市場の論理に基づく価値と、地域社会に対する誇りの回復や交流を通じた学び合いという人間的価値が衝突を起こしていることが確認できた。エコミュージウムセンターのボランティアに参加した住民たちは、地域外部との新たな関係を築き、新たな地域の価値を発見したことによって、地域内の価値意識の差異が明らかになり、住民もそれを認識し始めていた。そうした中で、ボランティアが実践で価値を置いていた点をふまえずに行政が産業づくりとしてかれらの活動を位置づけようとしたことで、価値意識の違いが対立に転化してしまった。

市場の論理が人々の生活を支配する転倒的な社会システムが過疎地域の人々の生活条件を奪ってきた中で、市場に適応する方法を模索することは避けられないが、住民の見出した生活の中の価値とどのような折り合いをつけて新たな地域社会のあり方を構想していくのか問われているといえよう。

## 第1章 地域認識の視座の転換論理

### —高度経済成長期に十日町市中山間部で行われた婦人学級を事例に—

#### 1. 課題と方法

第1章から第3章にかけて、事例ごとに分析と考察を行う。本章では、過疎問題に対抗するための地域づくり実践の基盤となった婦人学級の学習活動と生活記録を対象に、女性たちの主体形成過程の検討を通して、新たな文化再生産の構造の再構築の起点となる地域認識の視座が転換される論理に迫りたい。

生活記録に基づく農村女性の意識変容に関しては、書くことで農村生活がはらむ矛盾に理性的な批判を向けていく傾向が確認されてきた<sup>83</sup>。しかし、必ずしも生活を変革することにつながらない点から、能動的な生活主体の形成という点から限界が指摘されることが中心的であった<sup>84</sup>。そのため、長期的な視点から地域社会にとっての学習の意義を明らかにしようとする検討は見られない。本章では、地域社会の文化的再生産の構造の再構築にいかなる意味を持ったのかという点から、生活記録を含む婦人学級の学習活動の意義を捉える。

この検討にあたっては、婦人学級の実践初期に関する資料の保存状況に制約があることから、十日町市内の中山間地域にある飛渡の近隣地区（下条地区・吉田地区）の婦人学級も飛渡地区と近い経過をたどっていることを踏まえて、適宜関連資料を参照しつつ分析を行うこととする。

表4 1960年代に十日町市内山間部に位置する地区で発行された生活記録文集

| 飛渡地区                                                                                                                                                                                                                                            | 下条地区                                                                                                                                                                                                               | 吉田地区                                                                                                                 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 「廻し書き」(新水婦人会 1962 年)<br>「まわしがき」一・二(池入婦人学級 1963/1968 年)<br>「まわしがき」一・二(東部婦人学級 1963/1966 年)<br>「またたび」一～三(枯木又婦人学級 1964～66 年)<br>「とびたり」一～一〇(飛渡婦人会 1966～72 年)<br>「若芽」一～十一(飛渡家庭教育学級 1967～77 年)<br>「いけいり」四・五(池入婦人学級・1969/1970 年)<br>「私の一日」(池入婦人学級 44 年) | 「ざっそう」一・二(下条地区公民館 1960 年)<br>「ざっそう」一・二(下条婦人学級 1962/1963 年)<br>「らくがき帳」(下条婦人学級 64 年)<br>「二子のかあちゃん」一～五(二子婦人会 1966～70 年)<br>「けいじのかあちゃん」一・二(慶地婦人会 1966/1967 年)<br>「お母さんの目」(下条地区公民館 1967 年)<br>「わらび」一～四(願入婦人会 1968～71 年) | 「わかくさ」三・四(北鎧坂若草会 1961・1962 年)<br>「私の一日」(つくし会 1961 年)<br>「信江」一～現在(吉田地区婦人学級 1963 年～)<br>「らくがき」一～四十四(鉢婦人学級 1963～2007 年) |

<sup>83</sup> 江田忠「東北農村婦人の生活と学習にみる変容と停滞」『婦人の学習』東洋館出版社、1967 年など。

<sup>84</sup> 江田忠「生活記録運動」『社会教育の方法（日本の社会教育第 17 集）』東洋館出版社、1973 年。北河賢三『戦後史の中の生活記録運動』岩波書店。

## 2. 生活の矛盾の対象化と課題解決にむけた学習実践の創出

### (1) 十日町市における婦人学級の成立経緯

#### ① 婦人学級前史

まず、十日町市において婦人学級が開設されるに至った経過とその広がりを確認する。1947年に開館した旧・十日町市の公民館は、設置目的として、公民館とは「住民の茶の間」であり、「住民の文化教養のための事業を行う、いわゆる学習の場」であり、「地域振興の拠点になる」ことを掲げた。そのため、創設時から専任の職員を置き、1946年に新発足した青年団・婦人会・文化協会などの本部の役割を担った。こうして、十日町市の公民館は、草創期から官公庁の講習会、各種組合・団体の総会、町内会・委員会の集会や趣味の集まりなど幅広く利用されるようになっていった。

#### ② 十日町市における婦人学級のはじまり

女性を対象にした各種講座・学級が活発に動き始めるのは、1950年代以降であった。既婚の女性が学習活動に参加するようになった前提条件として、婦人会の存在がある。婦人会は、基本的に各集落にあり、各戸から1人ずつ姑か嫁の女性が参加することが基本となっていた。十日町市は、新生活運動の一環として婦人会の活動で婦人の教養講座を催すことを推奨しており、初めのうちは、婦人会主催で婦人教養講座や映画会などが開かれていた<sup>85</sup>。そして、すでに青年団の学習活動として行われていた青年学級を公民館が支援していたのと同じように、婦人会の学習活動を公民館が支援するようになり、徐々に公民館側の企画・主催による婦人教育講座が設けられていった<sup>86</sup>。

1958年度には、すでに婦人会の学習活動が盛んであった中条地区（市中心部と純農村である周辺地帯を結ぶ中間に位置する）で、婦人会と中条地区公民館がタイアップして十日町市初の文部省委嘱婦人学級（中条婦人学級）が開設されることになった。以下で取り上げる中条婦人学級の事例の引用は、上村（1961）の実践報告によるものである<sup>87</sup>。

中条地区で婦人学級が開設されることになった契機は、地区婦人会の役員のあいだでの活動のあり方に対する問題意識の高まりである。婦人会活動といえば、毎年恒例の行事や講演会のくりかえしであり、「いったいこれでいいのだろうか」と自問自答する役員が多くなっていた<sup>88</sup>。ところが、一般会員は昔ながらの考えのままにひとつ積極的な意欲を見せようとしないうえ、役員と一般会員とのギャップが1955年頃から強まり、運営に携わる役員の中で「みんなの婦人会にするためには、役員だけが会のあり方を勉強してもうま

<sup>85</sup> 「十日町市政だより」第6号、1957年3月15日。

<sup>86</sup> 『十日町市史 通史編5 近現代二』1997年。

<sup>87</sup> 上村政基「十日町市中条婦人学級のあゆみ」『月刊社会教育』1961年1月号、国土社。

<sup>88</sup> 例えば、新しい婦人のあり方や子どもの教育についての講演会、衛生講習会、新年会、旅行、敬老会、子供まつりなどが行われていた（上村政基、同上）。

くいかない」「みんなが心から願っていることを取り上げ、考える機会をつくる。これが本当に研修ではないだろうか」という問題意識が深まっていた。そして、公民館のサポートを受けながら、1956年にお母さんたちがみんなで話し合う会として「子供のしあわせを願う母親の集会」を開催するに至る。その際、会では熱心な話し合いがなされたことから、第二回「子供のしあわせと母のしあわせ、新しい母親の生き方について考える」、第三回「赤ちゃんの健康と幸福のための集会」と回数が重ねられていった。これらの集会に集った人たちの熱心さやなごやかさは、行事を会員のものとしていたい気持ちで悩み続けてきた役員たちに、これからの婦人会の進むべき方向を示してくれたという。そして、一部の会員から、特定テーマによる継続学習の希望がよせられたことが、婦人学級開設への直接因となる。

しかし、当時まだ婦人学級が何をするのかわからないと訝る人も多かったため、婦人会役員の中には、「特別な先入観をもたぬように、流行語のようになりつつあった婦人学級という名称は当分のあいださけて、いままでの勉強をそのままけいぞくしながら、自然と学級にふさわしい内容をもつようにしたらどうか」との意見もあり、まずは集会の経験を踏まえながら開設準備を進めていくことにした。そして、浮かび上がった問題点として、年齢差による出席の程度や関心の対象の違い、家庭における立場によって問題が相当ひらいている等、属性と学習ニーズの関連のこと、問題を与えられるより皆で出し合った方が身近に感じられることや、話し合いに未熟だから助言者がいるものの、気楽に仲間になってくれる助言者がよいということなど学習の進め方に関する、とくに若い人に出席してもらうために家のひとの理解を得る方法を考えなければならないことなど、様々な課題が出てきた。よって、役員たちの手作りで、「学習したいことがら」、「集まりやすいところ」、「出やすい時期・時間」に関する学習希望調査が行われ、以下のことが明らかとなった。

**表 5 中条地区婦人会における学習希望調査の結果(上村、1961 を基に作成)**

| 学習希望調査 調査結果                        |
|------------------------------------|
| ○若い人も年とった人たちも、もっと勉強したい気持ちにあふれている。  |
| ○毎日のくらしに役立つ勉強をのぞんでいる。              |
| ○年齢によって、相当考え方や希望していることが違っている。      |
| ○気楽な集まりをほしがっている。                   |
| ○忙しい仕事のあいまをみつけて、できるだけ会にでようとつとめている。 |

その結果に基づいて、グループ学習・集落学習を主体にすることが決まり、「食生活」や「か業のやりくり」等のグループが作られて「地区婦人会が公民館とタイアップして婦人学級をひらく」第一歩が踏み出された。各グループの助言者の選定は、女性たちが気楽に学習できるようにと平素から会員と親しい人をお願いするという方針になり、小中学校の先生や農協職員、栄養士が引き受けることとなった。学習は熱心に取り組まれていき、教

委側は「皆が仲良しになる」ことと「問題追及の態度」を伸ばしてゆくことを二大目標としていたが、二年間の成果として両方とも得られたと当時の職員は記録している。また、二年間のあゆみの記録として「手をつないで」という学級文集も作成した。

表 6 1958 年“か業のヤリクリグループ”学習表(上村、1961 を基に作成)

| 月・日   | 項目      | 内容のあらまし                               |
|-------|---------|---------------------------------------|
| 8・1   | これからの計画 | 勉強の内容と仕方について                          |
| 8・5   | か業の苦労話  | お互いのか業のヤリクリのくどき話をし、8 月の収支を記帳することを約束する |
| 9・5   | 八月の家計   | 八月の家計について話し合い、家計簿の費目分類を決める            |
| 10・5  | 九月の家計   | 記帳の結果をもちより、検討する。(とくに農家と非農家の違いについて考える) |
| 11・5  | 家計簿と支出簿 | 支出簿にすぎなかった今までの家計簿を反省                  |
| 12・11 | 費目の分類   | 九月の家計を費目別にくらべて個々の違いを研究                |
| 1・7   | 1 年の計画  | 大きな支出について、年間計画をたてる、その話し合い。            |
| 2・7   | ニワトリの収入 | 「ニワトリは損だ」という話を、実際の経験から計算してみる。         |
| 3・7   | 副食の研究   | ツケモノの作り方や醤油の買い方、使い方などをおしえあう。          |

以上の中条地区婦人学級の成立過程は、他の地区館・分館においても婦人会や嫁の会へ学習支援を行う際のモデルとなった。その学習の方法とは、地域社会構造の再生産に関わる専門職（教師、農協職員、栄養士等）を学習支援者にむかえ、女性たちの生活の改善を学習活動として再検討するというものであった。

この中条モデルをもとに、他地区でも徐々に、婦人会の学習活動として婦人学級の開設が進められていった<sup>89</sup>。

### ③ 職員集団による学習活動の支援

十日町市の社会教育職員たちは、婦人学級を「生活を見つめ、生活を高める」学習の場と位置づけて、婦人学級の支援に取り組んだ。職員たちは、話し合いに加え、自分たちの状況をより確かに知るためとして、学習の感想文や、生活記録の文を書く学習を女性たちに勧めるようになっていった<sup>90</sup>。「書く」取り組みが広がってきたことで、十日町市を含む中魚沼郡の社会教育主事と様々な地区館の公民館主事からなる婦人教育研究グループ（以下、「研究グループ」とする）では、女性が自分の思いを「書く」ことへの抵抗・困難を乗

<sup>89</sup> 中条地区（同上、1961）の事例同様、当時の婦人文集の多くが、発行元に「～婦人会」という名称を付けていることから、婦人会として婦人学級に取り組んでいたと考えられる。

<sup>90</sup> 『豪雪と過疎と』前掲、p.23～24。松田鉄夫「つまりからひとこと：「豪雪と過疎と」の虚像と実像」『月刊社会教育』1977 年、12 月。

り越えるための支援について、重点的に話し合った。この研究グループでは、「思いは胸中に溢れていても、まず鉛筆を持つこと、そんな生活を離れてすでに久しい年月がたっているし、誰にも共通する字の巧拙、人に見られることの恥かしさ、何をどのように書くかといった見方、方法の問題等々が続出しては、臆するのが当然」という理解に立ち、「まず話し、そのことばをそのまま綴る、短くてもよい、文体も短歌であろうと詩詞であろうと文章であろうとなんでもよい、字は誤字や脱字は勿論、仮名でも片仮名でも一向構わない」とはげましていくことが重要と確認された<sup>91</sup>。また、閉ざされたムラ社会ゆえに、女性たちの投稿は匿名のものがほとんどだったが、研究グループでは「それで充分ではないか」「むしろその方が自然だ」という声が多く、「大事なことは書きやすく書くことである」という方針を共有した<sup>92</sup>。職員らは婦人学級の参加者達に何を書いてもよいと励ましながら、学級生に原稿用紙を渡していった。そして学級生と主事たちとの交流が深まるにつれて徐々に作品が出るようになっていった<sup>93</sup>。

以上のような職員の働きかけによって、集落ごとに創意をこらした文集が刊行されるようになったことは、女性たちの声の地域社会への発信と捉えられる。すなわち、地域社会で前提とされる認識枠組みへの働きかけが行われ始めたといえる。

この状況をうけて、研究グループでは「仲間のあいだだけで回し読みされるのはもったいない」と考え、地域内で発刊された数多くの文集からいくつかの作品をまとめて<sup>94</sup>「妻有のかあちゃん」第1集（1962年）を発行し、各方面に配布した<sup>95</sup>。さらに、この文集をもとにした婦人教育研究集会が開催され、中魚沼郡の女性たちが婦人学級から数名ずつ代表して集まった。集会では文集を読みあい、話し合い、討論しながら、自分たちが置かれた厳しい生活の条件に声を荒げる人や涙を流す人もいたほどであったという<sup>96</sup>。この研究集会は、女性たちにとって地域生活における新たな価値の問い直しの契機として捉えられる。

その後、「妻有のかあちゃん」第1集は、多くの婦人学級で話し合いの教材として活用された。そして「こういう文ならば、おらにも書ける。おらも書いてみよう」と多くの女性たちをはげまし、これを機にどっと堰をきったように各集落、公民館分館、冬季分校など

---

<sup>91</sup> 『豪雪と過疎と』前掲、p.22。

<sup>92</sup> 「心の垣根を取り払って話し、語っていた母ちゃんたちはやがてエンピツを握り、そのつぶやきや語り、話したことを書き記すという方向」『豪雪と過疎と』、同上。

<sup>93</sup> 『豪雪と過疎と』、同上。

<sup>94</sup> 研究会では、全41冊から「生活をありのままに見つめて書いてあるもの」「自分の考えや、感じたことを実感こめて書いてあるもの」という角度から作品を選んで編集した。（「妻有のかあちゃん」第一集、1962年）

<sup>95</sup> 1960年代には、研究会に東京からのメンバー（横山宏氏など）が加わった。彼らは文集活動に強い関心を持ち、この活動を広げるべく尽力したという。「妻有のかあちゃん」の編集では、横山氏が中心的な役割を担った。（元・六箇地区公民館主事へのインタビュー2012年8月11日実施）

<sup>96</sup> 『豪雪と過疎と』前掲、p.23。

を単位に刊行される文集の数がにわかに増えていった。1965年の時点では、中魚沼郡全体で女性たちの学習グループ数は280にのぼった<sup>97</sup>。

## (2) 市内山間部の婦人学級における学習実践の展開

### ① 初期の学習活動：安心して語れる場づくり

前節で述べたように、1950年代末には、十日町市の多くの地区で公民館職員による婦人会の学習支援がすすめられた。ただし、町場に対し山村に暮らす女性たちは、「久しい年月にわたって半封建的な社会や、がんじがらめになった家庭のしがらみに生きてきた婦人たち」<sup>98</sup>であったことから、自分の思いや考えを話すことには抵抗があった。そこで、婦人学級の開設当初は「婦人たちが胸の内、心の中を話し合う場」をこしらえていくことが目指された。そのために、「ひとりひとりが孤立することなく、(略)語り合うこと、そのことによって、たとえささやかであっても心の垣根を取り払っていくこと」を進めていった<sup>99</sup>。女性たちにとっての「婦人学級」とは、月に一度の「デバタ労働からの解放」であり、同じ境遇の者どうしでおしゃべりができる憩いの場であった<sup>100</sup>。最初は、地区公民館主事のコーディネートによる講話や映画会などが行われ、そこから徐々に「家庭や部落の中から問題を掘り起こして考えあう話しあい」が進められていった<sup>101</sup>。

このように、嫁の立場にある女性たちは、それまで家庭や集落での生活において戸主である男性や舅姑に従って家のために働くことが求められてきたため、自分の意見を述べたり、聞かれることがない状況だった。そのため、初期の婦人学級では、支援者が学習活動を行う前提として、参加者同士が安心して自分の思いを語り合える場づくりを進めていた。それによって、学習する者の間に信頼関係が育まれ、生活上の問題を共有し話し合うことが可能になったと考えられる。

しかし、婦人学級の回数を重ねるにつれ、姑や夫が厳しい家の女性はやがて出られなくなることや、農繁期は出席者が激減しがちなこと、冬は豪雪で外出しづらいという問題も出てきた。すなわち、女性たちが主体的に自分の意見を語り合い学ぶという新たな文化の公共圏が拡張しはじめたことで、地域社会構造の再生産の営みとの間に衝突が起こるようになってきたと考えられる。それを解決するための方策が、以下の対応だった。

婦人学級では、「まわしがき」や「らくがき」と名付けられたノートが用意され、学級生内の交換ノートが始められた。この方式は、十日町市の多くの婦人学級で採用された。そのノートには何でも書いてよく、例えば『らくがき』はきらくに何でも書くと云う約束でず(略)みんなが集って勉強することは大変なので、せめてみんなで話合う時のような気

<sup>97</sup> 田村達夫「妻有のかあちゃんの生活と文集」『月刊社会教育』1965年11月号、国土社。

<sup>98</sup> 『豪雪と過疎と』、前掲。

<sup>99</sup> 『豪雪と過疎と』同上。

<sup>100</sup> 元・六箇地区公民館主事へのインタビュー(2012年8月11日実施)。

<sup>101</sup> 田村達夫「妻有のかあちゃんの生活と文集」『月刊社会教育』1965年11月号、国土社。

持で書いてほしいと思います」のような但し書きでその旨が強調されている。年度末などの区切りには交換ノートに書かれたものを地区館主事が文集化して、女性たちに配布した。

ただ、婦人学級の仲間うちで回す「まわしがき」や「らくがき」であっても、女性たちは書く勇気を持つのに一苦労したもので、書かずに次に回す人、名前を書かない人が多いのはもちろんのこと、書いたもののそれを結局破る人まで続出し、「破らないでください」という注意が出されるところもあった<sup>102</sup>。書きたい思いが胸中にあふれていても、字の巧拙など文を書くことそのものへの抵抗に加え、閉ざされた社会であるがゆえの「誰が書いたか」が知られることを案じて、書くことに踏み切れず、自分の意見を言うことへの抵抗がある者も多かった<sup>103</sup>。こうした問題は、先に書いている人が励ますことによって解決され、ノートが無事に回るようになっていったという<sup>104</sup>。

では、ノートには生活の記録や「自分の思う事」を書けばいい<sup>105</sup>ということであったが、どのようなことが書かれていたのか。まず、創刊して1～2年の文集に書かれていた内容を検討する。

#### ■書くことの意味：学習活動初期の「まわしがき」ノート・生活記録文集から

・「たびたび有った映写会特に衛生映画は、子供が病気のおそろしさを知り、予防注射をいやがらずにする様になったなど効果があつたと思います。此の頃新聞紙上に婦人の活動が活発に発表されていますがそれらの会合は、一つのテーマを持って話し合う事が行われて居る様です。それで私たちの会もなるべく暇をみて会合を一度も多く重ねて、自分の意見や経験をみんなで話し合い、良い嫁となり、活発なそして意義ある会に作り上げませう。」（「らくがき」1集、吉田地区南鑑坂二葉会、1958年）

・「せっかくの廻し書きを誰も書いてくださらないとはなんと寂しい事でしょう。この廻し書きは人を批評するためではなくただ皆さんで集まることはなかなかできないことから、せめて思うこと、やってもらいたいこと、何なりと思いついたこと、なんでもよいと思いますから、できるだけ大勢書いてもらいたいのです。会員または部員のまとめをとることはやっぱり色々なことを聞いたり、見たりが大切だと思いますから、人の事も見たり聞いたり、自分の事も聞いてもらい、見てもらうことです。人のふり見てわがふり直せ、とか自分の痛さで人の痛さを知れとかいう通り、自分の今だけを十分としていては困ることと思います。」（「廻し書き」新水婦人会、1962年）

・「こういった廻し書きなども各個人の意見、思想を表面化するので自己をよくよく反省し人の長所を取り入れ、主婦として又グループの一員として進んでこそ、活動力は向上し個人的修養にも非常に有効化すると思います。」（「廻し書き」東部婦人会、1963年）

<sup>102</sup> 「らくがきノート」山谷つくし会、1961年。

<sup>103</sup> 『豪雪と過疎と』前掲、p.22。ある交換ノートでは、「本家の手前とか上の方々の手前など言わないで、勇気をもって意見を出すべきだと思う」（鉢婦人会「らくがき」第三集、1965年）と励ます者もみられたが、当婦人学級の初期の文集の冒頭では必ず、誰が書いた文章なのか詮索しないことを注意していることから、多くの人がしがらみを気にして自分の意見を言えずにいたことがわかる。

<sup>104</sup> 新水婦人会「廻し書き」1962年。

<sup>105</sup> 東部婦人会「廻し書き」1963年。

このように、「良い嫁」になるためだと婦人学級の活動を正当化したり、ノートの意義を主張して「書く」ことを励ます記述からは、女性たちにとって婦人学級での学びとは、社会的に有意義なことであり、お互いの意見や考えを学び合うことで視野を広げることにつながると捉えられていたといえる。すなわち、「グループの一員として」集団の中で学び合うことに、自己形成の基盤を求めようとしていると理解できる。それぞれが自分の意見を述べるという学び方は、「婦人」は家の仕事だけしていればよい、「主人」に従っていればよいというような旧来からの社会秩序の対極であるもので、みんなが気軽に書ける状況ではなかったからこそ、書く人々は婦人学級の意義や書く意味を提起するような記述をしていたと考えられる。このような女性たちの励まし合いによって、徐々に書く人が増加していったといえよう。それでは、みんながノートに書いたり、婦人学級で話し合うことで、女性たちはどのような気づきを得ていくのか。そして、婦人学級にみんなで集まることのできないジレンマが、いかに対象化されていくのか。次で確認しよう。

#### ■婦人学級をどのような場にしたいか：学習活動初期の「まわしがき」ノート・生活記録文集から

・「婦人は家の中にとじこもり外出しないのが良いとされていた古い生活習慣や日頃のせわしなさから抜け出て同じような生活をし又同じような苦労を持ってる人たちといっしょに話し合ってみるとほかの人々も同じような問題を持ってる事、でもみんなの話を聞いてると学べられる事が多く視野がだんだん開けてきます」（「ざっそう」創刊号、下条婦人学級、1962年）

・「廻し書きを読んで、皆まだまだ若いなあ…と感じて楽しくなりました。何かしら言いたい、しかしうまく書を表せない。こんな思い、社会に対してうすら目を開いた。しかし自分はなんにもわからないで、とまどうばかり。（略）考えてみると、女は働いていさえすれば良いとしたばかり見つめていて、近頃は少しばかりあちこちを見まわしはじめたら、どなたかかかれたように「ウワッ」と叫びたいようだと思う気持ちわかるようですね。あまりにも女の身の上に変化が大きいようで頭の中がこんがらがりますね。（略）でもまだまだ先があるんだから、できるだけやってみましょうよ。お互い励まし合っていきたいものです。」（「まわしがき」東部婦人会、1962年）

・「PTAの時男の人に負けず女のひとがどしどし話していたとか。もっと寄りあう機会をつくって、もっともっと話し合い、明日の仕事や生活をどのようにしていったら良いか考え、明るい豊かな農村の生活をとがんばって行こうではありませんか。」（「まわしがき」東部婦人会、1962年）

・「仕事に追われ、経済に追われ、子どもの教育どころか、自分自身が自然に社会に遅れ時のまま、時代の変化の移り変わりに達し、昔と違って最近婦人たちも主人ばかりにたよらず、先に立って経済面を考えて、養鶏なりまたは織物に熱心に生き抜く人生の一手手前、皆で団結しあって、年に一度くらいの見学やら親子連れなど賛成と思う。まずはこのへんであとのお話も聞きましょう。（「廻し書き」新水婦人会、1962年）

「同じような生活」で「同じような苦労」をしている婦人学級の仲間たちの思いを知ることで、私だけの問題ではない＝「女（婦人）」をめぐる問題であることへの気づきが生まれていることがわかる。それによって、地域社会での女をめぐる規範の相対化や、戦後の

新しい女性像への着目をもたらし、地域社会における別の女のあり方を模索しようとしていると捉えられる。そのために、婦人学級を「団結しあって」頑張りたいという意気込み、一緒にがんばっていこうという動機づけが強く表現されている。ともに学び合うことが、自分の学びにつながり、自分たちの生活の向上につながるという考え方が広く共有され、それに基づいて婦人学級を進めていきたいという意思が確認できる。つまり、問題や苦勞が個人のことでなく、「女（婦人）」という属性により生じているという認識の形成がなされている。同じ属性の人たちで連帯し学ぶことで地域生活や社会を捉え直すことにつながり、より良い生き方を見出そうとしていると考えられよう。その射程は、旧来の社会秩序では女性たちが直接的に関与できなかった地域社会構造（「経済面」）まで広がっていき、そこまで含めて生活のあり方を考えるようになっていく。

### ■生活の主体としての自己の意識化：学習活動初期の「まわしがき」ノート・生活記録文集から

・「役員改選に思う。今年始めて婦人会役員をしましたが、振り返って見ると少しくらい無理をして出かけても、楽しくためになったことが多くありましたが、さて役員改選の時期になって一番苦勞しました。適任と思われる人に願ってみても、色々な都合上だめな人ばかりで、（略）こんな有様だったので役員の人の間では休会の案まで出る始末でした。ホッとした今、「どうしてこんなだったのだろうか」と考えてみました。難しい問題ではあるけれど、毎日の生活費がかさみ、人の気持ちもぎすぎすしてがめつくなっていく婦人会など、生ぬるい上品すぎる会という人もあり、（略）婦人会は長く続いているけれどあまり向上もしないようだ。（私たちの会では）婦人部が最近できた（私達では）新しいものにめずらしさを感じるということもあるかしれない。私にはわからないのですが、婦人会はやはり社会教育上大事なものではないかしらんとします。」（「廻し書き」新水婦人会、1962年）

・「書き廻しは良い事です。これをただかき回しでなく、ひとつひとつを何かの機会に討議したらいいかがでしょう。そしたらだんだん建設的な事だ出て来るんじゃないでしょうか？たとえばこんなことを一つ取り上げて討議してみたらいいかがでしょう。子どもは日に増し熱くなるので、アイスクリームだのジュースだのと買いに行く。（略）大通りを走る車がたいしたものだ。中には子供たちも構わず40キロ～50キロも出して走っていくオートバイもある。私はこれを見るごとに気が気でない。子供など眼中にないのだから始末が悪い。このようなことを婦人会の力でどうにかならないものか。できることではないでしょうか。こういう事は関係当局に婦人会の力として話して、速度制限してもらうとか、飛渡地区運転者協会もあるそうだから、なんとかできることではないでしょうか。」（「廻し書き」新水婦人会、1962年）

生活記録文集に頻繁に書かれている内容として、婦人会／婦人学級への意気込みや不満・批判も多くみられる<sup>106</sup>。また、婦人学級でやってみたいこと、地域社会に訴えたいことも

<sup>106</sup> 文集のはじめやおわりには、必ず主事からのメッセージが寄せられ、婦人たちが学ぶことや変わろうとすることへのはげましがなされた。そのために、学級生や婦人会の雰囲気に対して切り込んでいくメッセージも強く書かれた。例えば、「今の婦人会のあり方にあい

述べられた。つまり、婦人学級で信頼関係が形成されてきたことで、批判的な意見を出し合うことが可能となったのではないか。また、彼女たちが長らく抱えていた困難を打破していくチャンスとして、婦人学級の学習活動を捉えるようになってきたと考えられる。その意思を表明するツールの一つが、文集活動であった。女性たちにとって思いをありのまま書くことは、自分の置かれた境遇を見つめ、なぜ学習活動に参加しにくいのか、言いたいことが言いにくいのか、地域社会の構造的問題を対象化する端緒であることがうかがえる。そして、自分達の抱える課題を確認することで、その課題解決に主体的に参画したい姿勢が育まれているといえる。すなわち、与えられた役割を遂行するばかりではなく、どうしたらよりよい生活を送れるのか自分で考える生活の主体としての意識が芽生えている。

このように、交換ノートでの学習とは、女性たちにとって、婦人学級のへの参加者の少なさという活動の停滞を乗り越えるため、婦人学級の意義を確認するツールとなって始まった。ノートには、婦人学級の学習が女性たちの生活を高める実践につながるという意義が提示されたことで、励まし合いながらそれぞれの思いを書く活動が展開した。すると、ノートの位置づけは、農村社会の嫁という属性を同じくする人々とつながりを形成し、共感的関係を築く場として、また、彼女たちが長らく抱えていた日常の困難を打破したい思いを表明する場となっていった。そこから、地域社会構造の再生産の現状を具体的に捉えて、課題解決の仕組みを創り出そうとする意識が生まれていると考えられる。

## ②「全体学習＋コース別学習」形式の成立

文集の「まわしがき」形式は1～2年続いたのち、年度末などの節目に原稿を集め発行する形式へと移行していった。その形式での内容は、日常で思っていることに加え、一年間のふりかえりや婦人会・婦人学級の感想・要望、地区館主事が提示したテーマ（戦争体験、出稼ぎなど）についての文章が中心となった。

女性たちにとって、励まし合いながら文章をつづり、それが初めて「冊子」として活字となり発行されたことは非常に喜ばしい事であった。匿名やイニシャルといえども、部落の中のメンバーが自らの生活をつづっている文章は、話し合いやおしゃべりも並行して行ってきたことから、学級生どうしだと誰がどれを書いたかわかっていたそう。よって、文集が完成するとお互いに「おまえじゃうずに書いたなあー」と声を掛け合っていたという。また、一度書くと「今度はもっと上手にかいてみよう」と、文章を書くことへの向上心も高まっていった<sup>107</sup>。

---

そをつかしている人があると思います。もっと民主的でもっと学習できるものでありたいと賢い人は思っているに違いないはず。けれども彼女等の前に大きな壁があるのは、みなさんの方がよくご存じでしょう。率直に言わせてもらいますが、あなたの方の中にある権力争いです。…だがこんな小さな考え方があるうちは、やれ話し合いだやれ勉強だ、とさわいだところでクソの役にも立たないでしょう。」（「ざっそう」下条地区公民館、1960年）

<sup>107</sup> 元・六箇地区公民館公民館主事へのインタビュー（2012年8月11日実施）より。

1960年代半ばには、話し合い学習と生活記録文集の成果から、共通の生活課題の整理や、解決すべき問題の確認が進められた<sup>108</sup>。学習内容は表7のように、家事・育児に関すること、社会のことから趣味的学習まで幅広いものであった。多くの婦人学級では、生活課題ごとにコース別学習（月一回程度）と全体学習（二か月に一回程度）のカリキュラムに基づく学習となった<sup>109</sup>。コース学習による婦人学級が開始されると、女性たちは各々の関心に沿ったコースで学習を進めていった。

表7 婦人学級のコース一覧(1966年当時)「市報とおかまち」1966年5月～12月号を基に筆者作成

| 飛渡地区                                                                          | 吉田地区                                    | 下条地区                              |
|-------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|-----------------------------------|
| 栄養と料理<br>映画と話し合い<br>子供のしつけ<br>時間を生かす工夫、環境と衛生<br>家庭教育<br>家族の人間関係<br>デバタ従事婦人の健康 | 子供のしつけ<br>農繁期の食生活<br>成人病<br>現代語<br>社会見学 | 育児<br>くらしの工夫<br>料理<br>生け花<br>明治大正 |

また、生活記録文集の発行も年度末の恒例行事と位置づき、学級生の中から文集発行担当を決めるようになるといった、主事まかせではない自主的な文集発行を進める学婦人級もみられた<sup>110</sup>。この時期の文集では、生活の中で感じていることが中心的に記述された。婦人会の役員からは文集活動を「心のつながりの場」として婦人会の年中行事の一つにしていきたい<sup>111</sup>という意気込みも表明された。

## ■日々の生活記録と鋭くなる問題提起

・「明るく楽しい郷土を」と叫びかたわら、実際の空気は村に生まれ、村で育った人さえ人気の悪い住みにくい村だという。なぜか？新しい環境に慣れる努力をしつつ考えた。四辺を山に囲まれた息の詰まりそうな土地条件？決して豊かと言えない貧しい経済のため？これといった楽しみがないため？つかみどころのないまま子どもが生まれ忙しくなり、5、6年過ぎてしまった。私は何度か逃げ出したくなった。若い人々が村にいたがらないのも無理はないと思った。でも結婚は就職とちがって簡単にしなすわけにはいかない。子どもたちのためにもがんばらなくてはならない。私は再び生活に根付いたファイトを漏らしている。時代の流れで人が村を去るのは止めようもないが、村を出たくても出られないと惰性と諦めで暮らしているのは悲しい。なんとかして若い人がいつき、娘たちが喜んで嫁に

<sup>108</sup> 「二、三年前の集会よりとても話しあいの機会が多くなりどの方も皆よく話し合いができるようになりました。」（「ざっそう 創刊号」下条婦人学級、1962年）

<sup>109</sup> 講師は、地元の学校教員を中心に依頼がなされた。

<sup>110</sup> 吉田地区の文集「信江」の場合。

<sup>111</sup> 「とびたり」1、飛渡婦人会、1966年。

来る明るい村にしたいものだ。」（「とびたり」1、飛渡婦人会、1966年）

・「婦人会に入って私の感じたこと、考えていること。まず、今の婦人会はこのままでよいのだろうか。私たちは何のためにこの会に入っているのか。一日中家事、育児と休む暇もなく働き続けている。主婦が部落の主婦たちと話し合うことによって、自分の中にない何かを学び取り、そして話すことによってより多くの人たちに自分の考えや意見を聞いてもらい、お互いに睦みあい楽しみを持っていくのがこの会の目的ではないだろうか。婦人会の中に根強く残っている封建性をまだ吐き出すことができないのはなぜか。本家とか家柄とか尊重しなければならないか。今はもう昔と違うのだ。これから若い婦人がたくさん入ってくると思うが、本家とかもう考えずに、もっと婦人会を発展させるにはどうすればよいのか真剣に考え、みんな集会を楽しみにできるような会にできないだろうか。集会と言えば会員の3分の1しか集まらず、時間通りに集まらない。みんなが集会に集まり、時間を守ることによって話も発展し、集会も楽しみになるのではないか。ひとりひとりところがなければどうしようもない。みんなで発展のために頑張りましょう。」（「とびたり」2、飛渡婦人会、1967年）

このように、それぞれの生活に根ざした学習課題を学ぶようになった時期の文集では、「若い人々が村にいたがらないのも無理はない」ことや「本家とか家柄とか」にこだわる無意味さ等について、「嫁」の立場である女性たちがかかなり強い言葉で指摘し、地域社会の根深い問題点を追求するような文章を書くほどに至っている。学ぶことと生活をよりよくすることの循環が実感できるからこそ、女性たちの中で生活の中での違和感や不満を仲間突き付けられるし、共有しようとする事が出来たのだと考えられる。

### 3. 社会変動による困難とそれを乗り越える新たな価値の模索

本節では、婦人学級が停滞した要因と、停滞の中で女性たちがそれをどのように乗り越えようとしたのか、検討していく。

1960年代後半にさしかかると、十日町市の婦人学級も生まれては消えを繰り返していくようになる。このような背景には、高度経済成長による地域社会の急激な変貌、農村においては著しい物価上昇と米価のすえおきによる現金の必要性の急激な高まりがあった。現金収入を得るために、農村女性の生活は内職のデバタ労働が大きな割合を占めるようになり、人と会う時間すら惜しまれるほどになっていた。それまではデバタ労働は冬の副業程度のものだったが、時間さえあれば行いう通年の労働のひとつとなった。さらに、冬期間の夫の出稼ぎも例年のこととなり、婦人が家庭運営を一手に引き受けねばならず<sup>112</sup>、めまぐるしい日々の中で集まりに出ることも、文章を書くことも困難な状態になり、婦人学級の学習活動は停滞していった<sup>113</sup>。つまり、これまで前提としていた生活のあり方が崩れて

<sup>112</sup> デバタ従事婦人の生活実態の調査と研究』新潟県教育委員会、新潟大学社会教育研究会、十日町市教育委員会、1965年2月。『出稼ぎ農民とその家族の生活―へき地山村の社会調査』十日町市教育委員会、新潟大学社会教育研究室、1966年2月。

<sup>113</sup> 飛渡婦人会「とびたり」1966年など、当時の多くの文集でそのような記載が読み取れる。

家庭や地域のつながりは失われていったことで、婦人学級で取り組んでいた「生活課題」の学習と自分たちの生活実態がかけ離れていき、女性たちにとって婦人学級で学ぶ理由が薄れていったことによるものと思われる。

次第に、出席者が減少して継続が困難となった婦人学級では、集まって行う学習活動は行われなくなった。その後、市内の多くの公民館では、婦人対象の趣味・教養の教室がいくつか開講されるにとどまり、婦人教育事業はカルチャースクールの性格が強まることとなった。つまり、地域社会や生活の課題に即した学習活動からは少し距離が生まれることとなり、個別的な趣味・関心を重視した学習活動へと移っていった。

**表 8 婦人学級のコース一覧(1977～78 年当時)**

「市報とおかまち」1977 年 6 月～翌年 8 月号を基に筆者作成。() は集落名。

|       | 飛渡地区                                                                             | 吉田地区                    | 下条地区                                        |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------|-------------------------|---------------------------------------------|
| コース内容 | 枯木又を調べる(枯木又)<br>郷土民謡の伝承<br>健康問題と地域を見直す<br>料理<br>生け花<br>習字                        | 部落の歴史を調べる<br>料理<br>体育教室 | 手芸(下条)<br>料理(下条)<br>書き付け(下条)<br>家庭教育講座(東下組) |
| 文集活動  | 「わらぼし」<br>「若芽」(家庭教育学級)<br>「またたび」(枯木又)<br>「山の灯」(枯木又)<br>出稼ぎ先へ送付する飛渡通信「ふるさと」(東部分館) | 「信江」<br>「らくがき」(鉢、名ヶ山)   | 「東下組のわたし」                                   |

ただし、多くの婦人学級は学習活動の停滞に伴い生活記録文集づくりもなくなったが、山間部の地区公民館では、地区や集落単位の婦人学級が停滞・解散状態になっても、婦人会の唯一の恒例行事として生活記録文集が「心のかけ橋」<sup>114</sup>となるように、地区館主事の支援によって粘り強く刊行が行われていた。

## ■厳しい生活の対象化と経済の論理ではない地域の価値の模索:急激な人口流出と出稼ぎ・デバタの時期(1960 年代後半～1970 年代)の文集から

・「山の中といっても金のある人たちは機械化して、楽をしているのに、零細農では買うことができずまったく労力的にも骨を折らなければならず、また地域的に恵まれない田畑を持てば、人より余計苦労して作ってみても、収量は少ないのである。勢い内職をしなければやっていけない家業では、冬でもちっとも楽々できず、全く地域的に恵まれないところは、生活にどれだけ駆動するか身体もこのまま続くかどうかと思うほど無理をしているのに、つくづく考えさせられるこのごろである。なおまた、この文化の世に山の中に入れば入るほど嫁たちの自由など少しも認められていない状態である。たまた

<sup>114</sup> 飛渡婦人会「とびたり」5、1968 年。

ま婦人会の会合に出ても少し遅くなれば、家の人が良い顔をしないなど全く楽でない嫁の地位である。」（「お母さんの目」下条婦人学級、1967年）

・「男衆のいないどの家も、ひっそりと雪にうずもれてしまって、あゝ、死んだ村だなあ。出かせぎは第4次産業だって？仕方のないことだって？ほんとにそうか。おい！ほんとにそうなのかい。あきらめちゃっているんだなあ。それとも、つかれきっているのか。（略）皆んないっしょにがんばらなければならないのだ。女だけの暗い冬をなくさなければならないのだ。たとえ、今くるしくとも、やれることが、いっぱいあるじゃないか。さあ、逃げ出すな。」（「二子のかあちゃん」3号、1968年）

・近頃はどこでも山間部落が減っていく傾向にあり、なんだかさびしいような、いやなかんじがします。こんなことがいつまでも続くのでしょうか。でも今ある山地の部落が全部どこかへ行くことも一寸考えられません。山地といっても春の雪消えとともに商人の車は入ってきて、家にじっとしていても買い物もできるし、作場もあまり遠山がないので手間のある人は車やバイクで勤めに出ながら農業ができるのだから、そんなに悪い土地だと私は思いません。一番困るのは冬期間。里へ出入りする時、病人が出て医者頼む時等です。」（「わらび」2号、東下組婦人会、1969年）

・「雪さえ消えれば、住めば都のことわざ通りこんなに良い所はないと思います。（略）休日ともなれば、町から山菜取り等に我先にと車をとばしてくるという事は、山地は山地なりに里では味わう事の出来ない良さがあるからだと思います。だから、この地を捨てるばかりじゃなくて、…（略）。」（「またたび」6号、枯木又婦人学級、1976年）

ここでの学習活動の停滞とは、これまで女性たちの問題意識に即して学習と実践のサイクルが生まれていたものの、地域の経済的再生産様式が崩れていくにつれて、そのサイクルが通用しなくなった状況と捉えられる。シビアな生活状況に置かれた女性たちの生活課題を受け止める学習活動が組織されることは少なく、学習から遠ざかった女性たちが、自身が望む生活や地域のあり方を誌上で表現することを超えて主体的に地域社会に提起するに至ることは、個別的にみられるにとどまった<sup>115</sup>。

そうした状況の下ではあるものの、文集には、社会変動のもとで広がる経済格差や農村ジェンダーに関わる指摘など、地域社会の理不尽な問題を見つめることを諦めず、より良い暮らしに向けた連帯を求めることばが見られる。また、高度経済成長期の社会変動による人口減少や経済的な苦しさが増す中でも、山間部の暮らしの価値を「町」の視点からとらえ直し、自分の実感に即して価値を見出す視点を共有しようとする姿勢がうかがえる。

これは、地域の衰退を抗えないものとして受け入れるのではなく、地域の価値や生き方についてのより根源的な問い直しを行うことで、地域社会構造の新たな再生産のあり方を主体的に模索しようとしていることの表れと捉えられる。このような地域認識の視座の問い直しがされつつあったのは、これまでの婦人学級や生活記録実践の積み重ねによって、生活の主体性と、自分の感じる困難をありのままに対象化し表現する力量が形成されてい

<sup>115</sup> 吉田地区では、尾身ミノ氏がプール建設を提起し実現に至った例などがある。松田鉄夫「つまりからひとこと：『豪雪と過疎』の虚像と実像」『月刊社会教育』1977年12月、国土社。

たからだといえよう。

#### 4. 小括

以上、山間部の女性たちの学習活動を対象に、女性たちの主体形成に即して地域認識の視座が転換する過程を検討してきた。婦人学級が組織されるまで、女性たちは家庭や地域社会について意見を述べたり変化を求めて働きかけることが許されない規範を前提として暮らしており、女性たちの生活の主体性が奪われていたといえる。そのような状況だからこそ、公民館という当時の農村社会では大きな正当性を持つ「公」の組織が呼びかけることで、初めて家を堂々と空け学習の場にアクセスすることが可能となった。ただし、旧来の社会秩序（女が自分事で家を空けてはならない等）との狭間で学習活動への参加が阻まれる女性たちも多く、その葛藤を乗り越えるために、学習の意義の確かめ合いが「交換ノート」で行われ、そこではグループで学ぶことの重要性、話し合いや書くことの効果が確認された。そのことを土台に、孤立していた女性たちが、安心して書く・話すといった表現の場を得て自分の生活を対象化したこと、そして同質の困難や不満を持つ者と出会い互いの思いに共感し合うことで、地域社会の権力構造や理不尽な規範などの矛盾を「私だけ」から「私たちの問題」として捉えて、そのような生活課題を乗り越える連帯を求め始めた。すなわち、「書く」という、地域社会への表現である学習活動を媒介して、旧来の社会秩序に代わる新たな文化の公共圏を創出しようとする試みと捉えられる。自分達の学習ニーズを洗い出し、コース学習を通じた自己形成に取り組もうとしていたことは、より良い生活のあり方を模索する学習とみることができる。このように、解決したい課題を意識化し、そのための学習実践を求めようとする女性たちは、文化的再生産の構造を再構築しようとする主体であったと捉えられる。また、その主体性には旧来の地域社会における社会的・経済的再生産の様式にも働きかけたいとする視点も含まれていた。

こうした婦人学級での学習の蓄積により、女性たちは地域社会の矛盾と向き合い解決を探る力量が形成されていた。すなわち、書くことによって女性たちの共通する生活課題の意識化がなされ、共に学ぶ仲間の存在を前提に「私たちとしての私」が形成されることで学習する主体性を保持しつつ、生活上の問題と自分を分離して対象化する「私」が確立<sup>116</sup>していったと考えられる。こうして、困難な状況に当面してもそれを対象化することができ、困難を乗り越えるための課題を探求する方法があることを学んでいた。そのため、高度経済成長期の社会変動によって生活課題とコース学習のズレが生じたり、生活の矛盾が女性たちに集中したことで学習活動への参加が困難となった時でも、学習を展開しようと

---

<sup>116</sup> 宮崎（2007）によると、「同質の他者との間で共感的理解が成立し、体験の共通性が確認」されている当事者たちの間では、「他者との共通体験に照らして、特殊な自己の体験の普遍性が理解され、その限りで自己と出来事が分離可能」と指摘されている。宮崎隆志「成人学習論における記録分析の課題と方法：生活記録を手がかりに」『日本社会教育学会紀要』No.43、2007年。

する主体として粘り強く生活の中の矛盾を対象化していくことができたと考えられる。さらに、地域社会の過疎化や経済的困窮など生活の厳しさが増したことで、経済的価値ではとらえられない農村生活の「良さ」に目を向けて、「良さ」に着目して生活を組み立てたいという主体性が芽生えていた。厳しさが深まる中でも生活を書くことで困難な状況を対象化して、より根源的に地域を捉え返すようになり、経済的視点を相対化して自分自身の実感に即した地域の価値に目を向けて、困難と向き合う拠り所となる地域認識の視座を形成しつつあったといえるだろう。

最後に、本事例から、周辺層の主体形成の前提条件として、以下の3点を指摘しておきたい。

第一に、学習活動に参加することの困難に留意すべきである。地域社会の中で周辺化すればするほど、コミュニティの中で孤立する場合が少なくないだろう。また、事例では高度経済成長期に多くの農家の家計が苦しくなった際、家庭運営のために女性たちが内職や従来にはなかった生活上の負担を背負わなければならなくなったように、周辺層は社会の矛盾の影響を受けやすく、学習の場にアクセスすることが危うくなりやすい。学習の前提としてこれらの組織化をいかに成立・継続させる条件をつくりだすか、支援者にはその配慮が求められる。

第二に、困難を抱え孤立する人々は、自己の問題を容易には周囲に語れない場合が多いといえる。そのため、同質の困難を抱える人々の組織化を行うことで、仲間との共感的関係を構築することが求められる。安心して表現できるコミュニティがあるからこそ、そこで行われた生活記録実践で、地域社会の矛盾ひいてはそれが生み出される地域社会構造を鋭く対象化することが可能となったと考えられる。また、仲間と共に課題解決に向かいたいという主体性も芽生えていたといえる。

第三に、生活課題に即した学習活動の構造についてである。地区公民館が、女性たちが生活を見つめて見出したニーズに基づいてコース学習を支援していた時は、自分達の生活を作り変えるための力量を学習活動で高めるという学習と生活(実践)の好循環があった。しかし、たとえ生活記録実践で生活を捉え直し、生活課題をすどく対象化して、生活の主体性を育みつつあっても、実際に生活課題を解決する主体としての力量を形成する学習実践がともなわなければ、生活を対象化する学習は継続的に発展することができなかった。

ただし、婦人学級や生活記録実践の限界が明らかになることで、地域社会の矛盾を解決するためにはさらに別の視点や方法が求められることが意識化されていた。このことは、婦人学級や生活記録実践を通して学習を展開しようとする主体性が形成されていたからであり、こうした限界の意識化は、地域社会にとって新たな発展の契機となる可能性を含んでいたと捉えられる。

以上から、生活を対象化する学習の意義と限界が明らかになったといえる。このような学習をふまえて、そこからどのように周辺層の主体性を高めて地域づくりの主体性を形成することができるのか。さらには、地域社会の文化的再生産の構造が変容するに至る過程

とはどのようなものか、次の章で検討する。

## 第2章 文化的再生産の構造の再構築過程

### —枯木又エコ・ミュージアムの会の成立に至る経緯を事例に—

#### 1. 課題と方法

##### (1) 本章の課題

本章では、飛渡地区内の枯木又地区（東枯木又・西枯木又集落）で地域づくりのために組織された「枯木又エコ・ミュージアムの会<sup>117</sup>」が結成されるプロセスを手掛かりに、以下の課題を検討していく。

本章の課題として、周辺層の主体形成を起点とした地域づくりの協同形成過程に即して、新たな文化の公共圏が生成・拡張して文化的再生産の構造が再構築され、地域社会構造への働きかけに至る論理を検討する。その際、地域づくりの展望をめぐる多様な価値の折り合いがいかにつけられていくのかに着目してみていく。

##### (2) 調査対象の概要

本章で取り上げる枯木又地区は、先述のとおり（26 ページ）、飛渡地区で唯一、高度経済成長期以降も婦人学級で過疎化による地域課題に対応した学習活動が長期的に展開しており、また、1950 年代から現在に至るまで都市農村交流が行われてきた地域である。

当地区は標高 450m の山間部に位置し、近隣の集落とも数 km 離れていたため、平成の大合併（2005 年）以前は「十日町の最も奥の地」と称されていた。飛渡地区の中でも隔絶度の高い山間部ゆえの厳しい生活条件と封建的規範の強さがあったにもかかわらず、多様な人々の協同によるエコ・ミュージアムの地域づくりが生み出されたのは、後述する婦人学級の地域に根ざした学習・文化活動や、青年会の人びとが行っていた都市住民との交流の積み重ねによるものであったと考えられる。彼ら・彼女らの長年の活動がなぜ地域内外の人々との協働による地域づくり実践へと結実したのか、以下では両団体の活動の展開に即して地域住民の学習過程と協同的關係の広がり进行を明らかにしていく。

表 9 枯木又の戸数推移

| 1960 年 | 1965 年 | 1975 年 | 1980 年 | 1985 年 | 1993 年 | 2001 年 | 2019 年 |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 48 戸   | 39 戸   | 34 戸   | 28 戸   | 24 戸   | 18 戸   | 16 戸   | 8 戸    |

（『枯木又をしらべる』1-3、1976～78 年、『枯木又のうた』1994 年、聞き取りより筆者作成）

「枯木又エコ・ミュージアムの会」（以下、「エコの会」とする）は、「枯木又地区の自然や文化・歴史・産業に根ざしたエコ・ミュージアムを創造し、守り育てていくこと」を目

<sup>117</sup> 一般的にエコミュージアムは「エコミュージアム」と表記される場合が多いが、当会では「エコ・ミュージアム」を会の名称に用いている。それに従い、枯木又の事例においては「エコ・ミュージアム」という表記を用いる。

的とする団体として 1995 年に結成され、現在まで様々な地域づくり実践に取り組んできた。会の構成は、枯木又在住の地元会員と枯木又在住でない会員（「一般会員」と賛助金を負担する「賛助会員」の 2 種類）からなる。地元会員は集落の全戸が加入しており、男女問わず、子どもから高齢者まで活動に関わってきた。地元外の会員は、活動方針に共感する離村者や十日町市民、都市住民などであり、地元会員とともに運営に携わる者からたまに行事・イベントに参加する者までかわり方は多様である。

**表 10 枯木又エコ・ミュージアムの会・申し合わせ**

私たちは、枯木又が豊かな美しい自然に囲まれていることを誇りに思います。そしてまた、全国各地で多くの自然が失われていく中、枯木又の自然を守り育てていくことは枯木又住民だけでなく都市住民にとっても大切なことだと認識しています。

私たちは、厳しい自然条件の中で長い年月にわたって育まれてきた雪国山村文化は、ここに住む者にもここを訪れる者にもたいへん魅力のあるものだと思います。また、全国各地で山村文化の担い手がいなくなっている現状では、これを守り伝えていく方策を確立することが貴重な活動であり、かつ私たちの急務であると認識しています。

私たちは、二十世紀後半の高度経済成長とよばれる社会変革は、工業化と都市化を進める一方で、豪雪山間地などでの生計を苦しくし、全国各地に多くの過疎地を生み出してきたと思います。これに代わる価値観の確立を、過疎に悩む山村住民と過密に苦しむ都市住民とがともに探し求めていくことの大切さを感じています。

ここに私たちは、枯木又エコミュージアムを創造していくことを宣言し、その創造に寄せる多くの人たちの思いや知恵、力、財力などが有意義に生かせるようにこの申し合わせを作成します。

（平成 7 年 5 月 4 日）

続いて、本章で分析対象とした時期に存在した枯木又の地域集団の概要について述べる。集落運営を担う組織としては、「常会」（又は「部落会」と呼ばれる）が枯木又地区内に二つあり、「東枯木又」、「西枯木又」に分かれて運営されていた。常会は、世帯主一名ずつで組織された。

特定の年齢や性別に基づく団体は、青年会、婦人会、老人会がある。枯木又青年会は、枯木又地区全体の 15 歳以上 45 歳未満の青壮年で構成され、青年学級や集落行事の企画運営などに取り組む団体である<sup>118</sup>。婦人会（のちに「枯木又母の会」に改称）は枯木又地区全体の各世帯の既婚女性一名ずつで構成され、婦人学級や地域奉仕活動に取り組む団体である。老人会は 60 歳以上の地域住民の団体である。

<sup>118</sup> 枯木又青年会「平成 4 年度まちづくり特別補助事業 地域づくり計画報告書」。

### (3) 分析の枠組み

取り上げる学習実践は、分校教員と飛渡地区公民館主事が枯木又の住民の生活課題・地域課題をふまえて企画して始められたもので、そこから展開した諸実践は、地域づくりの課題の質の変化に合わせて生成してきた。団体によって実践の時期に多少ズレがあるものの、地域課題の変容に即して実践形態は三期に分けられた。すなわち、地域社会の閉鎖性・封建性に対する学習活動が行われた第一期、急激な過疎がもたらした地域社会の衰退に対抗するための学習活動と地域づくり実践が行われた第二期、第二期を基盤としてエコの会結成にむけて住民の協同形成を目指す第三期と分けることができた。各期の実践に基づいて自己認識・地域認識が変容し、それに伴い地域づくりの展望も変容していた。

先取りして言うと、その要因として、時間・空間・関係に関する認識枠組みは①「今・ここ」という局所的視点→②「過去－未来」・「都市－農村」という時間軸・空間軸が拡張した視点→③固有性尊重の視点への変化が確認できた。また、それに応じて地域づくり主体としての住民の関係性と地域づくりの展望も、①共感的関係に基づく同じ属性の住民集団による地域の価値の意識化→②協同関係に基づく同じ属性の住民集団による地域づくり→③協働する様々な属性の住民集団による地域づくりと区別できた（表 11）。

**表 11 事例の時期区分**

※婦人学級と青年会の実践の質の発展に着目して分析しているため、両者の活動が発展する年月にズレがあることから、各期の時期区分が一部重なる

|                  | 第一期                                   | 第二期                                                            | 第三期                                                                          |
|------------------|---------------------------------------|----------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------|
| 地域課題             | 地域社会の閉鎖性・封建性                          | 急激な過疎によってもたらされた地域社会の衰退                                         | 地域づくりにむけた住民の協同の形成                                                            |
| 学習実践             | <婦人学級><br>レク・話し合い・生活記録・俳句<br>(1962年～) | <婦人学級><br>地域を調べる学習 (1975～78年)<br>→影絵制作・上演、版画絵本制作<br>(1979～98年) | <エコミュージアム準備委員会→エコの会><br>地域内外に地域づくりの展望を発信する<br>多様な属性の住民の参画をばねます支援<br>(1993年～) |
|                  | <青年会><br>都市農村交流 (1962年～)              | <青年会><br>都市農村交流「20周年行事」 (1992年)                                |                                                                              |
| 自己認識・空間認識を規定する視点 | 今・この視点                                | 過去－未来の視点<br>都市－農村の視点                                           | 第二期に同じ                                                                       |
| 主体の関係性           | 同質集団による共感的仲間関係                        | 同質集団による地域づくりにむけた協同関係                                           | 多様な属性の住民集団による地域づくりにむけた協同関係<br>(住民を属性ではなく「固有性」に着目して対等にとらえることによる)              |
| 地域づくりの展望         | 日常の改良                                 | ・地域アイデンティティを未来に受け継ぐ<br>・多様な視点で地域資源をほりおこし活用する<br>・ともに学び合い楽しむ    | ・第二期で形成した展望の実現<br>・発信を続けて地域内外に対話的関係を広げる                                      |

## 2. 生活の対象化と新たな価値の意識化（第一期：1962年～1989年）

第一期は、山間地集落であるゆえに地域社会に色濃く残存していた閉鎖性・封建性に対して、戦後まもなく近隣の地方都市からやってきた枯木又分校（飛渡第二小学校の分校）の教師と、枯木又を含む飛渡地区の地区公民館主事が、学校教育・社会教育それぞれにおいて教育事業を計画し、地域住民はそれらの事業に参加したことを契機に、自分たちの日常生活や地域社会を対象化しはじめる局面である。また、次第に高度経済成長期に入っていく時期であり、枯木又の男性（世帯主、青年）は出稼ぎを始め、女性（姑、嫁）は出機内職する者が急増し、過疎化も進行し始める。

### (1) 枯木又分校と飛渡地区公民館の関係

1955年に枯木又分校の教師として、当重夫妻（夫・益郎氏、以下では集落における通称である「男先生」を用いる。妻・菁子氏、以下同様に「女先生」を用いる。）が赴任してきた。男先生は、「不利な条件を有利な条件へ」という言葉を信念とし、枯木又の地域特性を活かした教育を推し進めた。当重夫妻は長岡市という新潟県内の地方都市からやって来たことで、山間地の閉鎖性の強さに危機感を感じて、地域住民に様々な情報に触れさせるべく市内でもいち早く分校にテレビを導入したり、教員住宅の一部を開放して子どもから大人まで交流して、家の格による言葉遣いの違いなど封建的な慣習の見直しを提起するなど、熱心に「へき地の生活改善」に取り組んだ<sup>119</sup>。分校教員である当重夫妻の地域に根ざした活動を地域住民は受け入れ、かれらを慕った。社会教育に関しても、男先生は青年学級の学級主事と講師を兼務で担い、女先生は婦人学級のリーダー的存在であった。飛渡地区公民館主事は、枯木又で事業を行う際、基本的に当重夫妻の協力を得ながら進めていた。かれらの活動によって「分校は公民館であり、集会所でもあり、何でも相談の場」、「地域の文化施設」と呼ばれるほど、枯木又の住民にとって文化の中心となっていた<sup>120</sup>。

### (2) 婦人学級の始まり―日常生活の対象化と仲間づくり

1962年、飛渡地区の各分館で文部省委嘱婦人学級が開設されることになったのに合わせて、枯木又地区でも婦人学級が開設され、婦人会会員約40名が参加した<sup>121</sup>。枯木又地区では、「女、特に嫁が家の中にしばられていることがあたりまえ」という風潮が強く、既婚女性の自由な外出が難しかった<sup>122</sup>。そのため、婦人学級は当地区の女性どうして交流できる唯一の場であったこと、また、公民館という「おおやけ」から呼びかけられた集まりであることから家人の許可が下りやすく、彼女たちは積極的に参加した。婦人会会員と婦人学級生はほぼイコールであったため、姑がいる家の嫁は、姑が婦人会活動から引退するまで参加できなかったものの、参加者の年齢層は幅広く20代～60代であった<sup>123</sup>。

学習内容は、一年ごとに学級生の話し合いで年間テーマを決めた上で、地区館主事が具体的な学習内容を編成した。例えば、初期の内容（1965～66年度）は、野菜作りや保存食の勉強会、子育てや食生活等に関する「話し合い学習」と称した交流会、映画鑑賞や体育などのレクリエーション、地元の小学校教員・栄養士・農業改良普及員らによる講話を聞く学習が中心で、月1回程度行われていた<sup>124</sup>。

<sup>119</sup> 「不利な条件を有利な条件へ当重益郎の思い出」前掲、閉校記念誌「枯木又」2006年。

<sup>120</sup> 「不利な条件を有利な条件へ当重益郎の思い出」、同上。

<sup>121</sup> 1965年度「十日町市青年学級・婦人学級・家庭教育学級計画書」。

<sup>122</sup> 十日町市公民館「わらばし通信」No.3、1978年。

<sup>123</sup> 婦人学級生H氏へのインタビュー（2015年8月10日実施）。

<sup>124</sup> 十日町市公民館「昭和40年度婦人学級計画書」1965年。「市報とおかまち」1966年6月15日。「ゲームでオホホ、アハハと皆んなを笑わせ又色々ためになるお話を聞かせたり、

表 12 1965 年度枯木又婦人学級の年間計画

(昭和 40 年度青年学級・婦人学級・家庭教育学級計画書)

|                                                                      |                                  |
|----------------------------------------------------------------------|----------------------------------|
| 全体学習：年 13 回                                                          | 講師：枯木又小学校教諭、飛渡第一・二小学校教諭、十日町普及所員等 |
| 内容：野菜作り（ねぎ・人じん）、保存食、体育レクリエーション、時事問題、食生活の研究（料理と漬物）、栄養と健康管理、家庭生活と子供の問題 |                                  |

3 年目（1964 年度）からは、学級活動に加えてノートの「廻しがき」も行われるようになった。それは、ノートに生活記録を一人ずつ記して回覧し、年度末にそれを婦人学級文集「またたび」として発行する活動である。文集の内容は婦人学級の感想や、生活の中で感じていること等が中心的で、生活記録・俳句・詩と各人が好きな形式で発表できた。完成したら、各自で目を通した。初期の文集では「農村の主婦にふさわしく健全な家庭をつくる様に努力致したい」「少しでも勉強してあまり世の中に立ちおくれな様になんばって行きたい」「皆<sup>ママ</sup>の力で明る<sup>ママ</sup>いゆたかな村をつくる事にしよう」<sup>125</sup>という婦人学級や地域生活への意気込みに加え、婦人会トラブルの解決案、豪雪による困りごと、子育ての悩みや出稼ぎの心細さなど、彼女たちの身の回りの生活課題がつづられた<sup>126</sup>。

このように、枯木又における初期の婦人学級は、市内の他の婦人学級と同様に、地域生活の対象化にむけた学習活動が行われていた。会合での話し合いを積み重ねながら学級生の間に共感的関係が育まれ、生活記録では学習の意義の確認や女性たちが感じている地域の矛盾が提起されており、価値の意識化の土台が形成されたといえる。

1974 年の婦人学級では、地元の俳句名人による講話で、昭和初期から続く枯木又の俳句グループが離村・過疎で窮地に陥っているという話がなされた。すると、一部の学級生がそれまで我流で文集に俳句を寄せていたことから、枯木又の俳句文化を再び盛り上げようと、講師と高齢の学級生 12 名で「かあちゃん俳句の会」を結成した。会のメンバーは農作業や機織りの合間、豊かな自然や暮らしを題材に俳句作りにいそしみ、月一回の句会を開催した<sup>127</sup>。句会に参加すると、「ここで生まれ育った人たちが気づかないでいる良さを指摘し、認識させられることがたびたび」<sup>128</sup>あったという。彼女らの句は、「生活の記録であり、生活の中からにじみ出た生の叫び」が表れたものだ<sup>129</sup>と講師達から評価された。俳句とは、感性を表現する芸術的文化活動であるがゆえに、詠む者は、生活の中の心が動く場面への

私共の意見もきいて下され…（略）。」（枯木又婦人学級「またたび」1、1964 年）

<sup>125</sup> 枯木又婦人学級「またたび」1、1964 年。同、2。1965 年。

<sup>126</sup> 「皆<sup>ママ</sup>がもうちと人の身みなって考えてからいろいろ云った方がい々と思うどもの…」（「またたび」2、同上）。

<sup>127</sup> 「またたび」6、1976 年。「またたび」9、1979 年。

<sup>128</sup> 「またたび」6、同上。「またたび」7、1977 年。「山の灯：第二集」1979 年、「またたび」13、1985 年。

<sup>129</sup> 田村達夫『豪雪と過疎と』その後 全日本社会教育連合会編「社会教育」、1977 年 11 月号。「またたび」7、同上。「山の灯：第二集」同上。

自覚が一層高まっていくと考えられる。また、生活記録のような具体的な日常を書くこととは違って、俳句では抽象的な表現も可能であり、直接的に表現し難いことも表せる。よって、婦人学級に加え俳句会も並行して行われていたことで、女性たちの日常を捉えるまなざしが一層鋭くなったと思われる。この俳句会は、メンバーの高齢化による離村や死去で解散するまで、10年弱続いた。

このように、婦人学級での話し合い・文集制作・俳句会などの学習活動を通して、婦人学級内に限定されるものの、彼女たちは思いを表現する方法と共有し合える関係性を育んでいった。その関係性を基盤に、婦人学級生は日常生活を対象化して、自身の生活の悩みに関連した地域の問題点、自分の感性でとらえた生活の中の感動について自分たちが選んだ方法で表現し、互いの着眼点を学びあい励ましあう様子が確認できる。すなわち、女性たちは地域の課題や価値を意識化しはじめた学習段階であり、俳句の会では途絶えそうな地域文化の継承に取り組む実践者としても活動し始めたといえる。

### (3) 枯木又の青年と都市住民の交流の始まりー生活の中の楽しみを見出し共有する仲間づくり

以下では、枯木又の青年たちが地域外部との関係性を構築していくことを通して、新たな価値の視点を形成する過程をみていく。

1962年、分校の男先生は、「山の中の僻地だからこそ外の世界に触れることが大切」と考え、教育実践の一環として新潟市内の大学生・高校生による団体「新潟子供の会」の「へき地慰問」を受け入れた<sup>130</sup>。この慰問は、夏休み中の5日間で行われた。新潟子供の会のメンバーは、昼に分校の子どもたち42人に勉強を教えたり遊んだりして、その合間に各家庭を訪ねて集落の大人たちとも交流した。夜には分校で集落の人々と新潟子供の会の演芸会を行った<sup>131</sup>。慰問が終わっても、新潟子供の会と子どもたちの間で文通が行われ、子どもたちも親も交流を続けた。この取り組みは「辺地の子供にとって一年間を通じてたった一つの楽しみ」と地域住民から大変好評を博した。交流は断続的に1980年頃まで続いた<sup>132</sup>。

1969年からは、首都圏に住む新潟子供の会OBのZ氏が度々訪問するようになった。枯木又の大自然や地域住民の『『地に足をつけて』生きてこられた人生の確かさ』<sup>133</sup>に感動した彼は、「枯木又」という空間の魅力や教育的な価値に惚れ込み、1972年から自身が経営する学習塾の子どもたちを連れてくるようになった。ちょうど同年、Z氏が最初に交流

<sup>130</sup> 当時「新潟子供の会」では様々な地域に入り込んで体育教室や子ども会づくりの手伝い等、子どもとの交流を中心としたボランティア活動を行っており、その一つとして枯木又への慰問が行われた。

<sup>131</sup> 兼松芽永「『循環する場所』としての枯木又一エコ・ミュージアムと／から大地の芸術祭へ」2012年度みんぱく若手研究者奨励セミナー 報告資料。

<sup>132</sup> 枯木又婦人学級「またたび」1963年。

<sup>133</sup> 「枯木又クォーターリー」Vol.95、2016年。

した小学生たちが高校を卒業して農家の後継ぎの青年として集落に戻っていた。そして、Z氏が連れてきた都市の子ども達に、枯木又の青年がお兄さん役として都会ではできない遊びをしてあげたり、農作業や地域行事に参加させてあげる関係が生まれた。塾関係者の訪問は回数を重ねていき、今度は成人した元塾生が集落の子どもたちの面倒を見るようになるなど、「関係が共に重なり合いながら織り成していく」状況が生まれていった<sup>134</sup>。

Z氏ら都市住民との交流を通して、青年たちは、枯木又にみられる絶滅危惧種植物の存在など、この地域の自然の価値を教えられた。青年たちにとって、都市住民が枯木又という場所・人を求めて継続的に訪れること、地域にある価値あるものを教えられること、ともに遊び、歌い、飲み語らう仲間ができたことは、生活の中の大きな楽しみのひとつとなった<sup>135</sup>。当時、枯木又も周辺地域と同様に過疎が進行していたが、この交流があったことで青年同士は和気藹々とした関係を築き、地域の雰囲気についても「暗い感じはなかった。

(みんなで) 楽しくやっていた。」と感じていた<sup>136</sup>。つまり、周辺の過疎問題を抱える集落の住民が地域の価値を認識できず地域の未来に悲観的になる傾向があったのに対し、枯木又の青年たちは枯木又の環境や人間との交流に価値を認める都市住民との交流を行っていたため、都市からみた価値の視点を認識していたからだと考えられる。

交流が継続して1989年になると、枯木又の元住民がZ氏に土地を提供して、それまで拠点として毎年作っては畳んでいたプレハブ小屋を止めて家建てるよう勧めたため、都市住民と枯木又住民の交流拠点となる一軒家が建てられた。建設にあたっては塾関係者と新潟子供の会OBが中心的に出資したが、長年の付き合いがある青年たちも「枯木又青年会」として出資金集めに協力した。その理由として、青年たちにとって交流が生活を充実させるもので継続したい思いがあったことも大きい。それに加えて、枯木又に価値を見出す人びとの存在を実感したことで、このような交流がいずれ移住者獲得につながるかもしれないという期待もあり、地域としてこのような交流を深める意義を確信していたからだった<sup>137</sup>。

このように、青年たちにとって都市住民との交流は、日常生活では得られない刺激を与え、視野を広げてくれるものであった。特に、枯木又の生活や豊かな自然に対して肯定的評価が与えられる機会だったため、都市の視点から枯木又を捉えることで地域の新たな価値が見えてくることを知る契機となっていた。これは、新たな地域の価値を獲得し始めた段階と理解できる。よって、都市住民との交流の楽しさを共有する青年たちは、ともに遊び楽しむ仲間としての関係性を築きつつ、この交流を発展させていく地域づくりのあり方

---

<sup>134</sup> アグリネクスト編集部、『「農の世界」を耕す：発想転じて大発見。』ローカル通信舎、1998年。

<sup>135</sup> アグリネクスト編集部、同上。

<sup>136</sup> 枯木又エコ・ミュージアムの会役員・I氏へのインタビュー（2013年8月26日実施）。

<sup>137</sup> アグリネクスト編集部、前掲。

を意識し始めた。しかし、この段階ではあくまでも青年たちの個人的な付き合いとして交流が行われるにとどまっている。

#### (4) 小括

第一期は、閉鎖性・封建性が強い地域社会のもとで、地域内外とのつながりを持ちにくい者たちが、分校教員や地区館主事の働きかけによって学習活動に参加することで関係性を構築し、地域の価値を学び合う／知ること意識化する段階だった。

学習活動が成立した初発の契機として、分校教員や地区館主事という地域社会で信頼された立場の人間が、周辺のまちの暮らしと比較して枯木又の閉鎖性や封建性の強さを問題視したことで、事業を企画した際も地域社会で受け入れられ、事業の対象となる住民の参加が可能となったと考えられる。

婦人学級に参加した女性たちは、話し合いや生活記録・俳句づくり等の活動を通して日常生活を対象化し、互いの生活の苦労や喜びを学び合うことで、共感的関係を育んだ。それを土台に、自然の美しさなど生活の中で価値を感じる具体的な事柄を共有したり、出稼ぎへの不満など生活や地域社会の矛盾を対象化して改善したい事柄について問題提起するなど、生活を改善しようとする主体性の高まりがみられた。さらには、俳句を手がかりに、みんなで共有した地域の価値を継承するための活動も取り組み始めた。

青年たちは、長年の都市住民との交流を楽しむことで仲間意識を育みつつ、彼らがなぜ枯木又を評価しているのか知るにつれ、自然そのものや自然とともにある生活の価値を学んでいった。そのため、都市住民の枯木又への視点を認識し始めたことで、人口減少の最中でもネガティブな地域認識に陥らなかったと考えられる。よって、青年たちは「自然」を活かした交流という地域づくりの展望を描き始めることが可能となった。それは、＜今・ここ＞の枠の中だけで自分たちや地域のあり方を捉えるのではなく、都市―農村という空間軸の視点が形成されつつあったからと言えよう。

このように第一期では、女性たちは集団的に生活を見つめてお互いの地域認識を学び合うことで、地域内の矛盾や生活で大切に感じていた価値を意識化していったのに対し、青年たちは地域外との交流を契機に、ありのままの地域に価値を見出す都市的視点の存在を知ることによって地域の新たな価値を認識し始めた。そして、それぞれ実際の地域生活を変えるための展望を見出しつつあったと捉えられる。前章と比較すると、地域の矛盾を対象化したのに加えて、婦人学級の女性たちは俳句の会を始めたり、青年たちも自然を活かした交流の足掛かりとして交流拠点づくりの支援を行ったりと、地域の価値を新たに見出すだけでなく具体的に実際生活を作り変える方向性まで意識するに至ったからだと考えられる。

両者の方法は異なるものの、これまで見えなかった地域の価値を意識化し始めて、それに基づく実践に着手するという点では、新たな文化的再生産の端緒となる学習であったといえよう。

### 3. 新たな文化の公共圏の形成と拡張（第二期：1975 年～1992 年）

高度経済成長期に入り、十日町市の山間部では、1960 年からの 10 年で専業農家戸数が 81%減少し、急激に兼業化が進んだ<sup>138</sup>。つまり、農業だけで生活していくには非常に困難な状況となっていた。近隣の山間部集落と同様に、枯木又においても離村者が増加し、残る家では家計を維持するために男性は出稼ぎ、女性はデバタ内職が常態化していった。

1970 年代半ばには急激な人口減少がおさまるものの、ゆるやかに過疎は続いた。1975 年の枯木又の戸数は、高度経済成長期前の約 3 分の 2（34 戸）になっていた。地域生活にも影響が出始めており、例えば、地域行事が簡略化され始めていた<sup>139</sup>。

第二期は、過疎化による地域の持続可能性の低下という危機的状況に直面したことで、婦人学級と青年会のメンバーそれぞれが学習実践を通して新たな地域づくりの展望を形成し、それを実現するための実践を産み出していく局面である。

#### （1）時間軸の拡張の学習：婦人学級における集落の文化・歴史を調べる学習

1975 年度婦人学級の年間学習主題を決める話し合いの時、過疎化による地域の様変わりを受けて、地区館主事は「枯木又の将来を考え、枯木又を伸ばしてゆくことを積極的に考えてゆく婦人達になってほしい」「枯木又の将来をみんなで考えてみよう」という動機づけを行った。学級生たちの話し合いでは、「枯木又の過去のことを知らずに、将来は考えられない」、「枯木又の昔のことを、身近なことから調べてみよう」との意見がまとまった<sup>140</sup>。こうして、年間学習目標に【①枯木又を良く知り、理解する。②調べることになれる。③話したり聞くことになれる。】が掲げられた。

表 13 1975 年度枯木又婦人学級 参加者の年齢分布

| 年代 | 20 代 | 30 代 | 40 代 | 50 代 | 60 代 | 計    |
|----|------|------|------|------|------|------|
| 人数 | 2 人  | 6 人  | 8 人  | 9 人  | 1 人  | 26 人 |

表 14 「枯木又を調べる」主な学習内容

| 一年目                                                                                                                                                                           | 二年目                                                                                                                                        | 三年目                                                                                        |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・年中行事とその料理</li> <li>・女のくらし</li> <li>・救急手当と予防法</li> <li>・年中行事の生い立ち</li> <li>・農作業・野菜の移り変わり</li> <li>・子どもの頃の遊び</li> <li>・あそびうた</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・枯木又の歴史年表</li> <li>・地藏様の由来と伝説</li> <li>・東枯木又・西枯木又同族系譜図</li> <li>・夜逃げ―出稼ぎ―</li> <li>・冠婚葬祭</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・枯木又に伝わっている昔話を調べてみよう</li> <li>・高齢者の語りの録音</li> </ul> |

<sup>138</sup> 十日町市辺地調査プロジェクトチーム「辺地調査報告書」1974 年。

<sup>139</sup> 十日町市飛渡地区公民館「飛渡公民館 45 年のあゆみ」1999 年。

<sup>140</sup> 枯木又婦人学級「枯木又を調べる」1・3(1976～1978 年)。

学習の進め方は、4 グループに分かれ、各自が自宅の高齢者に聞き取りをして調べてきたことをグループでまとめて、全体学習日には専門家の話を聞いて基礎知識を深めつつ、全員で話し合っけてまとめていく形式をとった<sup>141</sup>。

一年目は、彼女たちに身近な生活の事柄に関する調査を行った。二年目は、それらを時系列に整理して枯木又地区と分校の年表作りに取り組んだ。その過程で、年表に入れられないが深めたい調査結果が出てきたため、そのような内容は文集「またたび」に掲載された。三年目には、これまでの調査結果から、「やがてなくなるであろうと思われる昔ばなしを、次代に伝えてゆくためにも残しておきたい」ということで「枯木又に伝わっている昔ばなし」をまとめることになった。「昔ばなし」に着目したのは、例えば、子育てにおいて「良い子にするため」に「吹雪の夜など『やさぶろうばさ』がくるすけえ早く寝なさい」などと言って昔ばなしを用いてきたため<sup>142</sup>、彼女たちの生活に根ざした身近な地域文化だったからである。これらの学習は一年ごとにまとめられ、報告書「枯木又をしらべる」(1～3号、1975～1977年度)が出来上がった。

この学習の特徴は、自分たちの「現在」の生活と関連付けながら地域の一昔前の歴史を自ら調べて理解するところにあるといえる。姑世代にとっては「これまでのことを残しておきたい」という思いから、若い嫁世代にとっては「地域の暮らしを知りたい」という思いから、学習活動が進められた<sup>143</sup>。つまり、地域社会の衰退によって生活文化が途絶えるという危機への対抗策を模索する試みであり、過去から未来へ残すべき／受け継ぐべき枯木又の価値とはなにか、彼女たちの生活に根ざして検討する学習であったと考えられる。この学習を契機に、彼女たちはお互いの生活の知恵や技術を学び合うようになった<sup>144</sup>。女性たちが、「生活者」(主に嫁、母として)としてこれまでの集落の暮らしのあり方や知恵を意識し、自分たちの生活に即した継承に取り組み始めたのである。

## (2) 女性たちによる地域づくりとしての文化活動

続いて、彼女たちは婦人学級として調べた成果を「よりわかりやすい方法で表現し、より多くの人たちから見てもらおう」と考え、「枯木又に伝わる、今は消えそうになっている遊びうたを、影絵で表現し残していこう」と決めた<sup>145</sup>。「自分で調べたことを自分で表現できること」は女性たちの意欲を燃やすものであった<sup>146</sup>。一昔前から今に至る生活のあり方

<sup>141</sup> 「枯木又を調べる」1、前掲。婦人学級生 F 氏へのインタビュー (2015 年 8 月 12 日)

<sup>142</sup> 「枯木又を調べる」3、前掲。

<sup>143</sup> 婦人学級生 F 氏、H 氏へのインタビュー、前掲。

<sup>144</sup> 婦人学級生 F 氏、H 氏へのインタビュー、前掲。「枯木又を調べる」2、前掲。

<sup>145</sup> 十日町市公民館設置 60 周年記念事業実行委員会「十日町市公民館 60 周年記念誌」2009 年。田村達夫、前掲。「市報とおかまち」1994 年 7 月 10 日。

<sup>146</sup> 「市報とおかまち」8 月号、1978 年。また、作業の後のお茶会では、作業の中でうまくやった人に声をかけあつて互いの労をねぎらった。また、家のことに関する愚痴などをおしゃべりし、日々の息抜きとしても大きな場であったという。(婦人学級生 H 氏へのイ

をたどったことで、このままでは忘れ去られそうな遊びうたが、彼女たちにとって枯木又らしい生活を表現するものであったことが意識化されたと考えられる。

地域のお祭りや郡市社会教育大会で影絵発表の機会を得ると、地区館主事のはからいで集落の青年に写真を撮ってもらい、その写真を絵はがきにした。青年たちは「母ちゃんたち」の頑張りやいきいきとした活動ぶりに刺激を受けた。周囲から評価される経験を重ね女性たちはますます気合いが入った<sup>147</sup>。1980年には、第二作として枯木又の池にまつわる昔話「龍王様の伝説」の影絵を制作し、地区の催事や婦人学級中越研修会などで上演を行った。のちに、エコの会の行事で母の会として影絵を堂々と上演する姿は、集落の人々の昔の生活感情や地域への思いを呼び起こすものであり、地域の年配者は食い入るように見つめ、多くの人々の感動を呼んだという<sup>148</sup>。このような女性たちの上演活動は、地域の文化の価値を再評価する空間を作り出したと捉えられる。失われつつあった地域文化を守り育てるという新たな文化の公共圏がほかの地域住民に対しても開かれた局面といえる。

1992年になると、過疎と高齢化によって婦人学級生の人数は13人（平均年齢61歳）に減少し、影絵の操作が困難となった。しかし、十日町公民館館長や地区公民館主事が発表をやめてしまうのはもったいないと動機づけしたところ、「いつも手元にあってひもとける」「離村した人たちにも見てもらえる」「わたしたちの手で残していけるもの」との願いから、影絵を木版画による絵本にすることとなった<sup>149</sup>。地域の未来に残していくだけでなく、地域外の人々にも活動を伝えようとしている点で、活動の意義は時間軸のみならず空間軸が拡張した座標軸のもとで位置づけられたといえる。

版画絵本は1994年に第一作が完成し、そこには、「急激な過疎が進行する山狭の地枯木又が、どんな歩みをしてきたか、どんな生活が営まれてきたか、次の世代にわかりやすく残せる『絵本』として、今後も制作していきたいと夢見ています。」という婦人学級のメンバーの思いが記された<sup>150</sup>。1997年には、影絵絵本の第二作目「龍王様のはなし」を完成させた。彼女たちは状況に柔軟に対応しながら、残していきたい地域の生活文化を表現できる方法を選択し、地域内外の人びとに伝えようとしてきたのである。ただし、第二作目の版画絵本の完成をもって、婦人学級メンバーの減少と高齢化により、集団的な制作による文化活動は行われなくなった。

このように、婦人学級の女性たちによる、枯木又に伝わる遊びうたや昔ばなしを活かした表現・文化活動と、地域の生活文化を紹介する活動は、地域のアイデンティティといえる生活文化の価値を絶やさぬよう、地域内外と共有しやすいかたちで具体化し発信する実

---

ンタビュー、前掲)

<sup>147</sup> 枯木又エコ・ミュージアムの会役員経験者 L 氏へのインタビュー（2015年8月12日実施）

<sup>148</sup> 枯木又青年会「平成4年度まちづくり特別補助事業 地域づくり計画報告書」

<sup>149</sup> 枯木又婦人学級『枯木又のうた』1994年。

<sup>150</sup> 同上。

践として捉えられよう。

表 15 1997 年度枯木又婦人学級 参加者の年齢分布

| 年代 | 20 代 | 30 代 | 40 代 | 50 代 | 60 代 | 70 代 | 計    |
|----|------|------|------|------|------|------|------|
| 人数 | 0 人  | 1 人  | 0 人  | 4 人  | 3 人  | 2 人  | 10 人 |

その後の婦人学級では絵手紙教室が行われたが、各自のペースで参加するようなものとなり、後述するように若い嫁である女性たちが「枯木又エコ・ミュージアムの会」に参画し始めるため、2000 年代前半には枯木又母の会は活動停止状態となる。しかし、版画絵本の取り組み以降も、婦人学級で学んだ女性たちは、枯木又エコ・ミュージアムの会からの求めに応じて、踊り・影絵の披露、地元料理づくりや俳句の講師役を担うなどのかたちで協力を行った。

以上、女性たちは、地域の衰退が生活に影響し始めた危機感から、嫁・母という役割の範囲ではあるが、その対抗策を模索した。その方法として、女性たちの身の回りの生活文化の歴史を調べたことで、地域の衰退で生活のどのような部分が失われつつあるのか、具体的に意識化せざるを得ない契機を得たといえる。すなわち、現在を生きる自分たちが、枯木又の生活者として何に価値を見出して継承するのか、地域をつくる当事者として迫られる学習であった。過去から未来への時間軸の視点が形成されたことで、次世代に継承する主体としての自己や、地域社会の継承すべき価値を見出すに至ったと考えられる。また、自分たちの手で上演できないという困難に対して版画絵本という方法をとることは、未来の人々にも地域外の人々にも活動を届けられるようになることであり、時間と空間を超えて他者と協働して地域の文化を継承する実践へと展開したと捉えられる。

### (3) 新たな文化の公共圏の拡張実践：青年会による地域づくりとしての都市農村交流

#### ① 地域づくりとしての都市農村交流の検討

ここからは、青年が過疎化への危機対応を模索し、都市住民との協働で都市農村交流を地域づくりとして実践することで、地域づくりの展望を明確化していく過程をみていく。

1991 年に入ると、枯木又の笠置山周辺をゴルフ場、スキー場にするという開発の話が持ちこまれた。地域の年配者から「このままなにもしないのでは枯木又もいずれみんながいなくなってしまうのではないか。しかも今自分達で何かをする力がないのなら、東京マネーを活用するのも一つの方法ではないか」という意見が出たが、青年たちは約 20 年にわたる都市住民との交流から自然の価値を認識していたため、「山をけずって、後の子供達がなにもできなくなる様なことをするより、この自然を活かした活性化を探りたい。しかも、親父達ほど将来に不安を感じていない」と主張して、話は立ち消えた<sup>151</sup>。

<sup>151</sup> 「枯木又レポート」1、1992 年 5 月、十日町市タイムス社。

1992年には、最初の「新潟子供の会」との交流から満30年、塾との交流が満20年になったことをうけて、新潟子供の会OB・塾関係者の都市住民と枯木又青年会で「交流20周年記念」の行事を催そうという機運が高まった。その際、都市住民側からただの飲み会でいいのかという問題提起があり、青年たちもこの地域で生きていくために何かしないといけないと思っていたため、「行事をするということは一体何なのか」「交流するとは」「地域とは何か」という議論に発展した<sup>152</sup>。この議論は、これまでの都市農村交流が自分たち／地域にとってどのような意味を持つものなのか、どんな可能性があるのか、明確にしようとする作業の始まりと位置付けられる。

議論の結果、「交流20周年記念」の一年を通して集まって、今後の交流や山間地集落のあり方を共に考えていくこととなった。記念事業の立案はZ氏が中心的に行い、それまで行われてきた体験活動や地域行事をベースに、都市住民の視点で魅力的な地域資源や生活文化が整理され、13の事業（表16）が立ち上がった。

**表 16 20周年記念事業一覧**

（枯木又青年会「平成4年度まちづくり特別補助事業 地域づくり計画報告書」1993年3月を参照）

|           |                    |
|-----------|--------------------|
| ①写真絵葉書の発行 | ⑧龍王祭               |
| ②花見と自然観察会 | ⑨浦和→枯木又リレーサイクリング   |
| ③山菜料理講習会  | ⑩20周年記念パーティー       |
| ④バーベキュー大会 | ⑪小正月行事：さいの神（どんど焼き） |
| ⑤わら細工講習会  | ⑫手打ちそばの会           |
| ⑥盆踊り      | ⑬自然観察実験池の整備        |
| ⑦俳句入門教室   |                    |

青年たちは「20周年記念行事」として行われた数々の事業を通して地域内外の人々と新たな交流を重ねたことで、「この辺の農業の良さや山村の良さを生かした生活をしていければ、まだまだここでやれるんじゃないかと思うし、そういった生活をするのが（略）青年会の活動を通して見えた都市住民の憧れの本体だったんじゃないか」<sup>153</sup>と確信し、枯木又での生活に自信を高めていった。

このように、青年たちは「自然」と「都市住民との交流」を手がかりにして、地域の活性化に関する具体的な検討を始めた。青年たちは、「交流20周年事業」での都市農村交流を通して、都市住民の視点からみえる枯木又の価値を、自然にとどまらず農業や山村の生活文化まで含みこんで捉えるようになっていったといえる。以下で、どのような学習が展開したか見ていこう。

<sup>152</sup> アグリネクスト編集部、前掲。

<sup>153</sup> 「枯木又レポート」12、1993年4月、前掲。

## ② 地域づくりの主体のあり方の再検討～価値の葛藤の表面化

「交流 20 周年記念」事業の計画が議論されていた時、折しも、十日町市ではふるさと創生政策による「まちづくり特別補助事業」として、各地域の振興会・婦人会・青年会や市民活動のための企画・調査・研究に対して費用の補助を行う取り組みをしていた。そこで、青年会は「20 周年記念行事」を「地域の将来像を探る活動」と位置づけて応募したところ、採択されて補助金がおりました<sup>154</sup>。補助金の獲得によって、これらの行事は地域づくりの方向性を具体化するための活動と明確に位置づいた。すなわち、この取り組みは単なる青年会と都市住民の個人的交流ではなく地域づくりにむけた活動だと地域内外に示され、それまで関わっていなかった地域住民や都市住民にも開かれる契機となっていったといえる。

また、「交流 20 周年記念」事業が十日町市まちづくり特別補助事業として採択されたことで、枯木又青年会主体の活動ではあるものの、地域としての合意形成が必要になった。この当時の枯木又では、青年会に地区の 20～30 代男性が所属しているのに対し、それ以上の年長男性が「世帯主」（〇〇家の「父ちゃん」と呼ばれる）として常会の構成員という構図があった。したがって、青年会にとって地域づくりに関わる事柄は常会の理解を得るのが重要であった。そこで、事業の「相談役」として、年長男性から 3, 4 人選出してもらい、青年会は時々意見を聞かせてもらうことにした。また、地区の人数の減少の中でみんなで協力することが大事だと考えて、青年会メンバーのパートナーである「若い嫁さん」たちも月に 1 回程度青年会の会合に呼ぶことにした<sup>155</sup>。

このような変化によって、青年会や地域社会の中では人々の考えの違いが浮き彫りになった。

青年会では、事業を進めていくにあたってこれまで以上に様々な人との関わりが増えることから、「もっと話し方の勉強会なども必要じゃないか」という提案をする者が出た。すると、「青年会は堅苦しいことをしてこなかったから続いてきたんじゃないかな」、「話しの苦手な人は来るのが嫌になる」、「自分たちの自然な姿のままでいいだろう」などの対立が生じた。しかし、会が分解しては何にもならないということで、この話は流れた<sup>156</sup>。

「交流 20 周年記念」事業が 5 月に始まり、相談役は 8 月に行われた都市住民との地域づくりの勉強会に同席することとなった。すると、相談役からは「このままのやり方では疲れるのではないか」「こんなことしてもムダだ」「今の政治体制の中ではなにをやってもダメだから、政治を変えなければうまくいかない」と否定的な意見をぶつけられ、青年会の思いには理解が得られなかった。都市住民と協力していることに対しても、「都会の衆に

---

<sup>154</sup> その計画では、「都市住民との交流の幅を広げる」「地元の若者や子供たちに文化を受け継ぐこと」を目指して、自然を生かす地域づくりの可能性を調査・研究するという目的を掲げた。

<sup>155</sup> 「枯木又レポート」3、1992 年 7 月、前掲。

<sup>156</sup> 同上。

利用されるだけじゃねやんか？」という声が出た<sup>157</sup>。このような発言が出たのは、青年たちより一回り上の「父ちゃん」世代は、高度経済成長期に突如として農業が立ちゆかなくなり、生活のために出稼ぎせざるを得なくなった経験を持つため、農村は政治・経済に振り回される無力の立場という諦念があったと推察される。父ちゃん衆のこのような意見に対して、青年たちは地域づくりの方向性を主体的に模索することに手ごたえを感じていたことから、「自分達が自立してやって行かなくてはどんな体制になっても頼っている限りダメ」で、「政治や体制が変わらないのなら、まず自分達の方から変わっていく必要がある」と思ったようで、「感情的なやりとり」になってしまったという<sup>158</sup>。

このように、都市農村交流が地域づくりの文脈上にのったことで、様々な対立が生じた。例えば、青年の中では外部の基準に合わせてふるまうべきか否か、という対立が生じ、青年と年長男性との間では、開発か自然の保全かという対立に加えて、地域づくりへの無力感や政治経済の客体意識をめぐる対立が浮かび上がった。こうした対立を抱えながらも、「交流 20 周年記念」事業は進んでいくこととなった。

それでは、「交流 20 周年記念」事業を通して、青年たちは、自分達の地域づくりの方向性や自分達のあり方について、どのような展望を見出したのか。

特に、青年たちに新たな視点をもたらしたのは、枯木又の生活文化に関する事業（山菜料理、俳句、わら細工、手打ちそばなど）であった。そこで講師役を務めてもらったのが、婦人学級生や高齢者である。かれらの熟練した技術や知恵を間近に学ぶ経験をしたことで、これらの技術を今自分たちが継承しなければ絶えてしまうと実感した<sup>159</sup>。それ以前、青年たちは高齢者や婦人学級の生活文化に関わる活動を見かけては漠然と関心を持ちながらも、日常生活で学ぶ機会がなかった。そこで、このような都市住民との交流事業を契機に、地域住民の側も継承するきっかけにしていきたいとの展望を持った。つまり、青年たちは、ありのままの地域に価値があるという漠然とした認識から、具体的に実践を組織したことで、現状のままではこれまでの地域の文化が失われていくことや、それを生み出してきた人びとの生活の営みに気づくことになった。それによって、漠然とした関心から、積極的な学習意欲を形成し、地域文化や年長者の知恵・技術を再評価するに至ったと考えられる。

また、俳句会やわら細工講習会では、地域のこどもから高齢者まで多世代の参加者が一緒に楽しめたことや、活動を通して思わぬ人の才能に気付く経験を通して、青年たちは地域内で多世代交流する機会がなかったことを認識した。そして、地元住民と一緒に楽しむために活動すること自体が地域活性化のひとつだと感じた<sup>160</sup>。つまり、青年たちは都市住民や地域の多世代との交流を通してこの地域ならではの価値を共有し継承することで、人びとがともに楽しんで暮らすことにつながる可能性を見出していた。単なる都会から見た

<sup>157</sup> 「枯木又レポート」4、1992 年 8 月。同、10、1993 年。

<sup>158</sup> 「枯木又レポート」4、同上。

<sup>159</sup> 「枯木又レポート」4、同上。「枯木又クォーターリー」Vol.2、1993 年。

<sup>160</sup> 「枯木又レポート」9、1992 年 12 月、前掲。

価値を知る都市農村交流ではなく、枯木又で暮らす地域住民にとって、生活を高めていくためのツールとして都市農村交流が位置づいたといえる。

このように、生活文化の事業を実践したことで、自らが生活文化を継承する当事者であるという自己認識、高齢世代の住民の培ってきた高い技術力や子どもたちの新たな側面への気づき、地域への視点の違いなどを人びとが学び合う意義が意識化された<sup>161</sup>。それによって、地域住民の生活を高める地域づくりにむけて、なぜ都市農村交流が意味を持つのか具体的に認識されていったといえる。これらの学びにもとづいて婦人学級や高齢者の活動の意義を理解した青年たちは、高齢化で解散していた「母ちゃん俳句」の会を引き継ぎ、地域の高齢者が持つ技術を継承する活動も恒例行事にするなど、地域づくり実践として積極的に文化を継承する仕組みをつくりだしていった。

さらに、「交流 20 周年記念」事業の記念パーティーでは、新たな試みとして「みやげ物コーナー」を用意した。そこでは、枯木又地区の人たちの自家用のマタビ漬けやマタビ酒、豆やわら細工などを出品した。初めてで値段を高く設定しすぎた商品もあり課題は残ったが、交流の際に枯木又の特産品を購入してもらう仕組みづくりも始められた。

このような実践と並行して行われていた地域づくりの勉強会では、都市住民から紹介された山形県朝日町の「あさひまちエコミュージアム」が青年会でやっている活動と共通している部分が多いということで、青年たちはその検討を進めた<sup>162</sup>。全国各地でエコ・ミュージアムの取り組みが広がっていることを学び、視察研修や他地域との交流を行ったことで、「外部資本を導入して地域のあり様を全く変えてしまう大規模な開発ではなく、地域の特性を活かし、地域住民が主体となった環境整備的な事業こそが、今必要とされている」<sup>163</sup>と確信するに至った。その結果、「枯木又エコ・ミュージアム準備委員会」を発足し、エコ・ミュージアムの考え方から特に以下の4点「①建物ではなく、地域である。②収集品の展示ではなく、地域内の自然・文化遺産の発掘・展示である。③訪問者が見学するのではなく、地域住民が研究・利用していくものである。④専門家が主ではなく、地域住民が主体である」に着目して、枯木又におけるエコ・ミュージアムの可能性を探ることにした。つまり、「エコ・ミュージアム」という枠組みに基づいて「再びこの地域を、青年会みんなで守って行く」と確認し、「地域の人達がそこの良さを再確認して活力を持って生きて行こう」、そのために「地域の自然、文化、伝統などを掘り起こして活用」していこうと構想し始めた<sup>164</sup>。以上の展開を通して、青年たちは自分たちが地域づくりの主体であるという自己認識と、都市と比較する視点に加え地域を受け継いでいく視点が重なったことでみえた地域固有の価値を、地域住民や支援してくれる都市住民ら皆で守り育てていくという地域

---

<sup>161</sup> 枯木又青年会「平成4年度まちづくり特別補助事業 地域づくり計画報告書」1993年3月。

<sup>162</sup> 「枯木又レポート」8、1992年11月、前掲。

<sup>163</sup> 枯木又青年会「平成4年まちづくり特別補助事業地域づくり計画報告書」、前掲。

<sup>164</sup> 「枯木又レポート」35、1995年4月、前掲。

づくりの展望を明確化したといえる。

#### (4) 小括

第二期は、過疎化によって引き起こされた危機的状況と向き合う学習・活動を通して、第一期で形成された同じ属性の仲間集団を基盤に、女性・青年がそれぞれの立場から地域づくりの展望を検討して主体的に実践を創り出す段階であった。それぞれが形成した地域づくりの展望とは、女性たちの場合、地域のアイデンティティを表す生活文化を伝え残していこうとするものだった。すなわち、自分たちの身の回りに即して地域の歴史を調べたことから、過去から未来になにを受け継いでいくか、前の世代から次世代への広い時間スパンで自己の主体性や地域の価値を捉えたことで、絶えつつある生活文化を意識化した。そして、自分たちの生活を表現する地域資源として地域のうたや昔ばなしが選択されるに至り、地域内外でその価値を広く共有・継承していくことが目指されたと考えられる。女性たちの実践は、地域文化を再評価する公共圏を創り出し、高齢者や離村した住民、青年などの次世代の人々とその価値を共有する場となったといえる。それは、青年たちによる地域づくりにおいて地域社会の文化的再生産の構造にアプローチする視点をもたらしたと考えられる。

青年たちの場合は、地域開発か否かの岐路に立たされ、開発を一旦回避したものの地域づくりのあり方を考えざるを得ない状況になり、長く枯木又に通う都市住民とともに今後の地域づくりの方向性を模索しはじめた。それまでの交流を地域内外の人びとに開いて行ったことで、都市にはない枯木又の価値とは自然のみならず山村の暮らしそのものだとの認識し、地域特性に基づくあらゆるものが地域資源としてとらえられる可能性を見出した。すなわち、都市―農村の空間比較の視点が第一期より明確化しており、農山村が持つ特徴を活かすという地域づくりの展望が具体化した。この視点によって地域資源になりうるものを新たに生み出すことが可能となっており、それは女性の学習には見られなかった特徴である。

ただし、地域づくりとしての都市農村交流となったことで、住民のなかで様々な意識の違いからくる対立も生じ始めていた。特に、青年と年長男性の間では、地域づくりにおける価値意識の違いが浮かび上がった。年長男性が高度経済成長期に地域で生活できなくなり出稼ぎで苦労した経験から市場的価値観に基づく地域認識や無力感を強く抱いているのに対し、他方、青年たちは地域の自然に価値を見出していたことから、この段階では地域づくりの展望を互いに理解し合えなかった。

しかし、青年世代は「20周年記念」事業での新たな試みを通して、地域の自然のみならず生活文化も含めた地域らしさを守り育てることを地域づくりの基本方針に据え、さらに、地域住民がここで楽しんで暮らすために、ともに力を合わせて地域を活性化させることが重要だという新たな価値を獲得するに至った。その重要な契機は、以下の2点である。

第一に、生活文化をテーマとする事業に参加して、婦人学級や高齢者の文化活動の意義

を実感し、自分たちが高齢者が持つ技術を次世代に継承できるかどうかの鍵となる世代だと認識したことである。よって、婦人学級と同様の視点、すなわち、地域社会を継承する当事者としての自己や地域で受け継がれてきた地域のアイデンティティといえる文化を見出した。それによって、自分たちで枯木又という場所の持つ固有の価値を未来に向けていかに守り育てていくか、という視点が「エコ・ミュージアム」の理念と合致し、地域づくりの展望として総括されたといえる。

第二に、地域住民が多世代で学び合い楽しむ活動を行えたことで、地域住民が活動を楽しむこと、地域に自信を持つことこそ地域づくりの根底に据えるべきという考えが生まれていた。それによって、単に一部の住民だけが楽しみ得をすればよいということでなく、様々な地域住民がともに学び合い楽しみ合いながら枯木又で生活できることが重要となり、青年以外の住民と共に活動の意義を分かち合いたいと考えるようになっていた。

このような展望が生み出されたのは、第一期と比して、自己や地域の認識に影響をあたえる時間意識・空間意識が拡張していたからと考えられる。それを可能にしたのは、第一に、地域社会存続の危機が深まり、旧来の地域社会の仕組みの限界が生活レベルで実感され始めたこと、第二に、地域を幅広い歴史的・空間的視点でまなざす学習活動において、自分たちの生活に根ざしながら地域固有の価値や活動の意義を検討したことが大きいといえよう。これらの学習によって、地域社会のあり方をめぐって、旧来からの封建的規範にのっとった地域自治と立ち行かなくなる農業を出稼ぎと内職で穴埋めするという生活の仕方から、多様な属性の人びとが主体的に地域づくりに参画することで地域の価値を豊富化し活用するあり方へ転換する機運が青年を中心に高まったと考えられる。

#### 4. 新たな文化の公共圏と従来の公共圏の衝突から統合への過程（第三期：1992年～現在）

以下では、青年会が見出した地域づくりの展望である「枯木又エコ・ミュージアム」をめぐって地域内で衝突が起こり、その解決にむけて折り合いが模索され、その結果地域ぐるみで「枯木又エコ・ミュージアムの会」に協同で取り組むに至るプロセスをみていく。

青年たちが「枯木又エコ・ミュージアム」を提起するようになった際、枯木又の戸数は20戸ほどであった。そのため、この地域づくりを進めるためには青年会だけでは難しく、ほかの地域住民にも協力してもらわないといけない状況となっていた。俳句やわら細工など生活文化の伝承を意識的に行ってきた高齢者や婦人学級生は、青年たちが地域の持つ価値を継承して地域内外に発信・共有しようとする点において共感するものであったため、若い世代の活動を喜んで「この良き伝統文化を次の世代へ確実に伝える為に、私も全力でお手伝いいたします。」と、当初から協力していた<sup>165</sup>。それ以外の地域住民は、いかにして「枯木又エコ・ミュージアム」の地域づくりの展望に合意し、参画していったのか。

ここでは、それ以外の地域住民の層として①地域運営の中心的立場にある年長男性（「父

<sup>165</sup> 「枯木又クォーター」 Vol.9, 1995年。

ちゃん」と呼ばれる)、②地域社会の公共的意思形成の最も周辺に位置する、青年のパートナーにあたる女性たち(「若い母ちゃん／嫁さん」と呼ばれる)が参画するまでに着目して、旧来の封建的規範や価値観の対立を超えて多様な属性の住民が地域づくりの協同的關係をいかに構築していったのかみていく。その際、青年たちの立場からほかの地域住民にどのような働きかけをしたのか、さらにそれが地域住民からどのように受け止められていくのかという応答の積み重ねに即して、地域内の価値意識の変化を捉える。

#### (1) 地域に根ざした価値と市場的価値の衝突：「父ちゃん」衆との協同にむけて

青年たちが「エコ・ミュージアム」の地域づくりを進めようとしたことで、地域内に起こった衝突とは、年長男性が支持する(開発を拒めないと考える)市場的価値観と、青年たちが見出した地域の自然や生活文化を守り育てたいとする価値観の衝突であった。

前節まで述べてきた通り、枯木又では高度経済成長期に過疎化が進む中で出稼ぎをしないと暮らせない家庭が多かった。枯木又での生活に見通しが立たずに離村する家も多く、1960年から25年間のあいだに戸数は半減した(48→24戸)。このような地域社会の中で出稼ぎに出ていた父ちゃん衆は枯木又の地域資源を市場的価値の観点からみて非常に小さいと感じざるを得なかったと考えられる。よって、1991年の枯木又開発の話が持ち上がった際、年長男性の一部に「東京マネー」を利用した開発を強く支持する者がいた。すなわち、地域づくりにおいて優先される価値意識として、市場的論理を重視していたと考えられる。しかし、青年たちがありのままの枯木又の自然を失いたくないと主張するようになり、地域の方向性をめぐるもう一つの価値観が地域内に登場してきた。青年たちが、地域づくりとして枯木又の自然や文化を活かした都市住民との交流事業に取り組んでも、年長世代にとってはそのような地域づくりが本当に成り立つのか疑わしかった。交流事業の際の議論でも、両者の価値意識は衝突したままであった。

交流事業以降の青年たちは、自分たちの目指す地域づくりを実現させる仕組みとしてのエコ・ミュージアムの準備を進めながら、一方で、地域住民がともに活動することを重視していたため、父ちゃん衆にも自分たちの地域づくりの方向性を発信したり、対話しようと努めていく。青年たちは、年長男性との対立をいかにして乗り越えようとしたのか。

第一に、「枯木又エコ・ミュージアム」を、単なる「展望」から具体化にむけた活動へと落とし込んでいったことである。青年たちはエコ・ミュージアムの実現にむけて取り組んでいることを「市民と語る日<sup>166</sup>」で行政に向けてアピールし、再び市から地域整備の財政支援を受けられることになったり、マスメディアに取り上げられる機会が増加したことで地区外の人々から応援や評価される機会を得ていった。活動が知られるようになると、新規就農希望の見学者も訪れるようになった。ある青年会メンバーは地区外からの反響について、「すぐ忘れ去られてしまうのが、過疎地の現状だと思います。そんな中でやはり『こ

---

<sup>166</sup> 市長や市の幹部らが、各地区で市民と意見交換する会のこと。

こにいるんだ』という声を出していかないと、道路も相変わらず良くならないし、学校などもどんどん統合されてしまって、小さい所、不便な所は悪い所なんだという気持ちに内も外もなってしまう。少なくとも自分達自身、あるいは子供達には絶対にそういう気持ちにさせたくない。」<sup>167</sup>と述べていた。自分たちの思いや展望を社会にむけて発信して社会や政治にコミットし続けることが、地域づくりを展開させる重要な方法と考えるようになったと捉えられる。

第二に、エコ・ミュージアム実践が作り出す場が、開かれ、対話的な公共圏であることの提示である。青年たちは、地域づくりとしてのエコ・ミュージアムに懐疑的なまなざしをむける父ちゃん衆などの地域住民に、ともに活動に参画してもらいたい思いのアピールや働きかけが行われた。例えば、「枯木又エコ・ミュージアム準備委員会」が発行する、枯木又地区住民と都市住民にむけた通信「枯木又クォーターリー」(A3 紙 1~3 枚、年 4 回発行)を通して、活動の様子や枯木又地区の動きについて知らせた。そこでは、講師役の地元高齢者や参加した都市住民の声、賛同者からの激励、分校の状況や婦人学級の様子に加え、父ちゃん衆へのアピールがなされた。花見大会の記事(vol.1, 1993 年)では、「村の中心となり背負って立っている『父ちゃん』達の参加者が多く得られなかったことが残念でした。今の枯木又があるのは何と言っても『父ちゃん』達の力添えのお陰であるし、村を盛り上げる上で決して欠かす事のできない存在だからです。是非とも次の機会には、より多く参加してもらいたいと思っています。」と呼びかけた。集落のお祭りの記事(Vol.11, 1995 年)では、枯木又流の盆踊りを披露した父ちゃん衆の迫力ある表現に、「若い衆の学ぶ姿勢にいたらない面があった」「お父さん方の方も伝えるチャンスをつかみそこなっていた」「来年、よいやさ・じんく(盆踊り:筆者注)の講習会でもやんなきゃなあ」と学びたい思いをアピールした。また、集落センターの前に目安箱を設置し、「出来るだけたくさんの人の意見をとり入れてやっていきたい」から「辛口の感想大歓迎」と周知してきた<sup>168</sup>。青年たちは、父ちゃん衆の力量や経験への尊敬の意思を示しつつ、自分たちの地域づくりの方向性を発信し続け、活動で力を貸してほしいと頼み続けるなど、活動に参画してもらうよう働きかけをし続けた。

このような青年による年長男性への働きかけの背景には、青年たちが「20 周年記念」事業を通して、地域をより長い時間軸で捉えるようになり、先行世代が地域存続のために活動してきたことへの理解が生まれていたからだと考えられる。だからこそ、地域存続を願う者同士として、地域づくりにむけた協同の可能性を模索するために対話することに努めてきたと言える。

エコの会結成にあたっては、青年たちは地縁的自治組織との関わりも重要視していることを示すため、「枯木又地区の生活基盤に係わることに關しては、常に両枯木又部落会の了

<sup>167</sup> 「枯木又レポート」37、1994 年 5 月、前掲。

<sup>168</sup> 「枯木又クォーターリー」Vol.6, 1994 年。

承、協力を得るように努めるものとする。また、枯木又部落会あるいは西枯木又部落会が特に反対する事業についてはこれを行わない。」と会の申し合わせに掲げて、地域住民と対話的に活動を行っていく意思を示した。

しかし、会の設立前後は具体的な活動イメージや意義が認識されていないこともあり、「人数は少ないし、農業も厳しい時代にエコジ（エコの会を皮肉った言い方：筆者注）なんかやってられない」という人もいたという<sup>169</sup>。山間部における農業経営の厳しさの中で、エコ・ミュージアムが生活の豊かさにどのようにつながるのか、疑問視していることがうかがえる。

したがって、第三に、対立する側の意識する課題が解決されるような具体的対応の提示が行われた。エコの会設立後、会では自然・生活文化に関する事業に加えて、地域農業の活性化にむけた取り組みも展開されていったことで、青年以外の住民にもエコの会の活動との接点が増えていった。例えば、地域住民のつくる農産物や加工品を特産品として買い上げて賛助会員に発送するという住民の収入につなげる活動を始めたりした。

以上、地区内外の支援を得て、自然・文化・経済など多様なアプローチで枯木又地区の持続可能性を高めようとする事業が展開される中で、父ちゃん衆は関心の合う事業に関わった。それを契機に、実際に参加して様々な人々と交流して地域の価値を対象化していく学びをしたことで、「おらどこ（＝自分たちのムラ：筆者注）がこんないいと思えるようになった」「（都市農村交流に：筆者注）連れて行ってもらってありがとう」と徐々に活動の意義を共有し、さりげなく手伝ってくれるようになっていったという<sup>170</sup>。父ちゃん衆は、地域掃除のついでにエコの看板の位置を直したり、事業の手伝いや懇親会に参加するなど、よりよくエコの会が活動していけるような配慮をしてくれるようになった<sup>171</sup>。こうして、数年かかって、地域住民たちの中に「自分たちが主役なのだ」という認識が、定着していった<sup>172</sup>。つまり、父ちゃん衆は生活に根ざした価値を受け入れてくれる外部とのつながりの存在を実感したこと、そのつながりは、それまで守り育ててきた自然や文化を失わなくても、この土地から生まれたものや体験に対して市場的価値の観点から新たな評価をしてくれることに納得したからだといえよう。

こうして、価値の対立に折り合いがつけられたことで、父ちゃん衆が中心的担い手であった地域の事柄に関する意思形成にも、エコの会の考え方の影響が広がっていった。すなわち、多様な立場の人々の意見に耳を傾けるということである。例えば、1997年には、中山間地政策の農地基盤整備事業として地区で設立された「枯木又地区活性化委員会」のメンバーに、全戸の代表のほかに、「若い人達」もできるだけ参加するように求められた<sup>173</sup>。

---

<sup>169</sup> 「枯木又レポート」40、1995年8月。

<sup>170</sup> 「枯木又レポート」63、1997年7月。「枯木又クォーター」Vol.16、1997年。

<sup>171</sup> 「枯木又レポート」63、同上。

<sup>172</sup> アグリネクスト編集部、前掲、p.70。

<sup>173</sup> 「枯木又レポート」57、1997年1月。

また、エコの会として嫁である若い女性たちもほとんど委員になった。さらに都市のエコの会員にも意見を聞く形で、当地区の「エコらしい整備のやり方」を模索するという方法がとられた。その成果の一つとして、**2002**年に建てられた都市農村交流施設は、嫁の立場である若い女性たちの意見を中心的に取り入れて造られた<sup>174</sup>。このように、枯木又の地域づくりにおける意思決定過程に多様な住民が参画できるようになっていった。

また、**2000**年には、地域の年配者と青年たちの中から**5**戸が協力して「枯木又古代米生産組合」を立ち上げ、無農薬無肥料での黒米生産を拡大する試みが開始された。地域の自然を壊さずに地域資源を生み出す実践が、地域に広がっていることを示している。このような変化は、エコ・ミュージアムという新たな文化の公共圏が拡張したことで、地域社会の文化的再生産の構造が再構築され、地域社会構造にも影響を与えてきたと捉えられる。

以上、当初は市場の論理にのっとった地域認識からくる無力感から「若い衆が好きな事やってる」と距離を置いていた「父ちゃん」衆<sup>175</sup>だが、この変化の前提には、まず、青年たちが彼らの積み重ねてきた生き方を尊重する視点を形成していること、地域住民の様々な考えと折り合いをつけながら対話的に進める姿勢を示し続けてきたことがあると考えられる。地域社会の中心的な立場にある父ちゃん衆への青年たちからの配慮という側面もあるだろうが、青年たちが先行世代も地域存続を願い生活してきた存在だという理解を持ち、多様な視点からの地域参画の重要性を学んでいたからこそ対話的なアプローチがなされていたといえるだろう。その上で、活動への参画によって、地域外の人々との交流を契機に自分や地域のもつ価値を学んだり、エコ・ミュージアム活動の中で「特産品」などのかたちで現金収入が可能となる可能性を学んだことで、今ある地域の自然や文化、自分たちの生き方を活かしたかたちで市場的価値を生み出す地域資源を創り出せることを認識したと考えられる。また、皆で力を合わせて活動することで地域社会のあり方を変革する可能性があると感じていったことで、彼らの活動の意義を理解して協力するようになったと考えられる。

したがって、父ちゃん衆も、青年たちのした学びの追体験をしていったということ、すなわち、地域の自然や文化、自分の培ってきた知識や技術が評価される関係性を多様な人々との間に構築するにしたがって、自己信頼や地域への信頼、住民同士の信頼関係を取り戻していったといえよう。それによって、地域や自己のあり方を大きく変えることがなくとも、地域づくりをしていける展望を確信することができたのであり、生活に根ざした価値を土台として多様な地域資源を育もうとするエコ・ミュージアムの活動を評価するに至ったと考えられる。

---

<sup>174</sup> 同上。

<sup>175</sup> 「枯木又レポート」63、1997年7月。

## (2)「若い母ちゃん」衆との協同

「枯木又エコ・ミュージアム」が、多様な立場の人々の視点を活かした地域づくりであることから、それは地域社会の中で最も周辺的な立場といえる、嫁の立場にある若い女性の対等な参画も可能とした。以下では、その経緯をみていく。

「枯木又エコ・ミュージアム」の地域づくりを検討する過程で、青年会メンバーが一人で何役も受け持つことは負担であり、地域の戸数・人数の少なさをどう克服するかという問題があった。青年たちは地域づくりの先進例の検討を進める中で、女性が元気なところは地域が活性化していると学び、「一家に一人という考え方や世帯主でなければという考え方を換え、婦人や年配者、若者なども役を受け持つようにしていくことが必要」と、彼らのパートナーにあたる「若い母ちゃん」衆にも活動への参画を求めた<sup>176</sup>。彼女たちにとっては、夫から突然参画を要請されたことになるが、積極的に取り組むようになった。それはなぜだったのか。

彼女たちがエコの会に参画する以前の状況は、年配女性が婦人学級で集まるのに対し「若い母ちゃん」が地域で参加できるコミュニティが無かったこと、さらに都市農村交流の活動についても、青年会の会議で週に何度も深夜まで帰ってこない夫への不満、行事当日の手伝いを求められて指示されるも「もっとこうしたらいいのに」「そこまでさせるの」「その時だけ手伝いに来てって言われたって、面白くない」と違和感を覚える経験があった。そのため、彼女らにとって夫と一緒に会議に出て運営に参画することは、それらの悩みが解消されることであった。

「枯木又エコ・ミュージアム」では様々な人の個性や視点、培った技術や知恵を重要視していたので、その人らしい関わり方を歓迎するスタイルがあったことも彼女たちの参画しやすさにつながった。例えば、若い母ちゃん衆は、彼女たち以前の世代の嫁が比較的近隣の農村出身であることに対し、都市部からやって来た人たちだったので、都市住民の目線も持ち合わせながら事業運営に意見した。また、彼女たちは慣れない郷土料理を無理して作らずに集落の年配女性にお願いし、山菜の天ぷらやサラダ等自分たちが作れる料理を出すなど「得意なことは力を貸す」ことから始めた。

会議に参加するようになった若い母ちゃん衆は、地域づくりのアイディアも提案するようになった。「子供が増えていく中で子供の遊び場がない」から「集落に小公園がほしい」という思いを実現すべく、「地主には女衆だけで会いに行こう」「女性陣だけで市長さんに会いに行こう」「(花いっぱい運動を)お年寄り達に話をして一緒にできないか」という計画を次々と実行した。その結果、後の地域整備では彼女たちの思いも組み込まれた。公園が完成してからは、老人会と公園の維持・管理をするグループを結成した<sup>177</sup>。若い母ちゃん衆は、「嫁に来て何もすることがなかったけど、エコが出来てから、自分のいる所を見つ

<sup>176</sup> 枯木又青年会「平成4年まちづくり特別補助事業地域づくり計画報告書」、前掲。

<sup>177</sup> 「枯木又クォーター」Vol.7、1994年、「枯木又レポート」27、1994年7月、前掲。

けたようで楽しい」と感じていった<sup>178</sup>。他方、このような女性たちの動きを青年たちは頼もしく思い、誰もが活躍できる場をつくることの重要性を実感した<sup>179</sup>。

また、女性たちは、エコの交流事業に参加したことで地域の価値をとらえ直す学びもなされた。俳句会に参加した女性は、結婚して枯木又に来たばかりの頃は不便さなど不満が先に立ち、「よく枯木又を見たり、考えたりする事」ができなかったが、俳句会に参加するようになって日常を振り返り、四季のうつりかわりや大地の恵みを味わう喜び、感動を表現することの楽しみを経験して「地域全体が博物館、本当にその通り」と感じるようになったという<sup>180</sup>。

このように、単に青年たちの手伝いにとどまらず彼女たちの主体性が発揮されたのは、エコの会の運営や活動を通じて地域社会で孤立していた若い母ちゃん衆がつながり、ほかの地域住民や都市住民と学び合いの関係を築くことで、旧来の嫁の役割に縛られることなく地元住民／移住者／子育て世代など様々な視点を持つ存在として参画できたことが重要であったといえよう。女性が集落のことに意見したり参画することは、彼女達の前の世代まで行われていない点で大きな変化であった。若い母ちゃん衆が地域社会について発言し行動する場ができたことを、彼女たちが居場所だと実感している点は注目すべきである。それが可能だったのは、エコの会では多様な人々がそれぞれの視点から枯木又を活かして楽しむという地域づくりを目指していたため、若い母ちゃん衆も自分が感じたことを言い、得意な部分で関わることはできたからである。それによって、女性たちは自分らしい地域づくりへの関わり方を積極的に作り出せた。「枯木又エコ・ミュージアムの会」がこのような特質を持つコミュニティとなったことは、「若い母ちゃん」に限らず、様々な立場から関わった人々にとって同様の意義があったといえよう。

### (3) 枯木又住民と都市住民の協働型組織「枯木又エコ・ミュージアムの会」の結成

ここまで述べてきた通り、青年たちは、様々な属性の地域住民と地域づくりにむけた協同の構築を進めていった。その過程で、「父ちゃん」衆が徐々に意義を感じて協力しつつあることや「若い母ちゃん」達の活躍を目の当たりにしたことで青年たちは「地域の方全員で進めてゆく事が枯木又の活性化又、存続につながっていく」という思いを強めた<sup>181</sup>。

1995年の春、「枯木又エコ・ミュージアムの会」の結成時、地区全戸である17世帯86人が会員となり、地区外会員を含め約150名でスタートをきった。設立総会で承認された申し合わせの前文には、「私たちは、枯木又が豊かな美しい自然に囲まれていることを誇りに思います。そしてまた、全国各地で多くの自然が失われていく中、枯木又の自然を守り育てていくことは枯木又住民だけでなく都市住民にとっても大切なことだと認識していま

<sup>178</sup> 「十日町タイムス」1996年1月8日発行。

<sup>179</sup> 「枯木又レポート」27、前掲。

<sup>180</sup> 「枯木又クォーター」Vol.19、1997年。

<sup>181</sup> 「枯木又レポート」35、前掲。

す。(以下略)」と述べられ、これに沿って「地域と住民と都市住民とが力を合わせて、豪雪山間地帯の自然・文化・産業を守り育てる活動を展開」することが目指された(表 10)。

運営の中心は青年会のメンバーだが、エコの会は青年会の延長ではなく、地元住民・都市住民の老若男女が力を合わせて「これからも共同でやって行くんだという事を、内外共に鮮明にしておきたい」意思表示として、役員は様々な属性の人びとで構成され、会の初代代表は塾経営の新潟子供の会 OB である Z 氏が担うこととなった<sup>182</sup>。また、青年会メンバーや若い母ちゃん衆がエコの会で地域活動に取り組むようになったため、まもなくして青年会と婦人会は発展的解消となった。すなわち、従来の年齢・性別によって分けられていた地縁集団が解体され、対等に地域づくりに参画できるエコの会へと住民集団が再編されたといえよう。また、先述のとおり、枯木又地区としての地域づくりの意思決定においても、各戸の代表である年長男性だけでなく、エコの会関連として青年や女性がかかわるようになったり、場合によってはエコの会会員である都市住民も意見を聞かれるようになった。枯木又地区では、生活に根ざした価値に基づき、地域の自然や文化を守り育てるかたちで、市場に適応するための道を探るという地域づくりが、発展してきたと考えられる。

#### (4) エコ・ミュージアムによる地域づくり

##### ① 活動内容の展開

新たな文化の公共圏としての「枯木又エコ・ミュージアムの会」は、大切にしたい価値を守り育てるために、様々な立場の人々が自分ならではの方法で文化的次元にとどまらず経済的次元においてもアプローチして、地域社会の再編を展開していった。

エコの会の活動は基本的に「交流 20 周年事業」で位置づけられた集落行事や企画がベースとなっており、そのほとんどが 2020 年現在に至るまで地道に継続されている。そのような基本の行事に加え、時には各会員のアイディアから生まれたイベントも行われてきた。例えば、走るのが好きな地元男性の企画で、枯木又から新潟県庁まで会員がリレーして無雪道路を要望するというリレーマラソンをしたり<sup>183</sup>、元住民の会員と都市住民の会員が中心となって企画した「山学校」(年 4 回、集落の自然を活かして遊ぶ)<sup>184</sup>が行われたりと、様々な立場からの取り組みが生まれている。また、エコの会の活動に参加したことで、新たな取り組みを始めたという地元住民もいる。仕事が農業ではない地元男性は、都市住民との交流をするうちに「自然の大切さ、自然の中で生きる喜び」を意識し始めて、親から田の一部を借りてコメ作りに取り組みはじめた。その田は、都市の子どもたちの農業体験としても活用された<sup>185</sup>。

さらに、エコの会の活動から派生して、集落で特産品づくりに取り組む動きも見られた。

<sup>182</sup> 「枯木又レポート」37、前掲。

<sup>183</sup> 「枯木又クォーター」Vol.3、1993 年。同、Vol.41、2003 年。

<sup>184</sup> 「枯木又クォーター」Vol.11、1995 年。

<sup>185</sup> 「枯木又クォーター」Vol.26、1999 年。

地元農家による「古代米生産組合」の結成や、自宅の一部を加工所にして枯木又の食材を使った商品をつくる女性も現れたりした<sup>186</sup>。

度々会報では、エコ・ミュージアムの創造に関することならどんな会員の提案も検討したいということをアピールしており<sup>187</sup>、エコの会が集落・都市問わず様々な人のアイデアを共に育み挑戦する場となっていたと考えられる。

このように、エコの会とは、会員が大切にしていきたい地域の行事や伝統を継承していきつつ、交流の中から生まれた地域づくりのアイデアを、仲間と共にチャレンジする場となっていた。単なる行事の継承が目的でなく、地域社会の自然・文化を守り育てるという目的が共有されているからこそ、そのアクセスや方法に自由度があり、開かれた公共圏であり続けられていると考えられる。

## ② 都市住民との協働—中越地震と廃校から「大地の芸術祭」へ—

エコの会の取り組みが開かれた公共圏を作り出してきたからこそ、都市住民との信頼関係が構築され、地域の危機対応に都市住民の知恵が発揮されることもみられる。

枯木又では、地道な活動がありながらも、2007 年に枯木又分校に通う生徒がいなくなり、とうとう分校が閉校となった。この頃には地区の軒数が高齢化や中越地震（2004 年）等の影響でエコの会設立当初の 19 戸から 10 戸まで減少してしまい、地区の仕事やエコの会を住民一人一人がなんでもやらなければならない状況となり、集落の人々としては「新しい人が入ってきてくれないければ集落は疲れるばかりで、いつの間にか交流が重荷になってしまうのではないか」と頭によぎる状況となっていた<sup>188</sup>。そのため、廃校校舎の雪下ろしなどの維持管理を集落では行えないとして、集落の住民は市に校舎の取り壊しを希望することになった。校舎を残したい気持ちを押し殺しての、苦渋の決断だった<sup>189</sup>。

しかし、枯木又分校の統廃合問題については約 10 年前から会報紙「枯木又クォーター」で情報を随時共有し、会員同士で地区の人の思いや会員の考えを紙上で共有してきたことから、都市に住む会員たちが廃校校舎の存続に力を貸したいと申し出た<sup>190</sup>。かれらは、分校校舎を残す方法を探りたいとの思いを強く地区にアピールし、そのために地区の一軒一軒に資金や雪下ろしの労力等を提供することを説明して「分校校舎の活用を考える会」を発足させた。そして、活用の方策を模索しながら、約 1 年ほど維持管理を行っていたところ、枯木又集落に対して 2009 年の「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」にむけて、京都精華大学から枯木又分校を活用して作品展示したいとの依頼があった。

地区の人々は、枯木又には都市との交流 40 年の歴史があり今までの生活を変えること

---

<sup>186</sup> 「枯木又クォーター」 Vol.29、2000 年。

<sup>187</sup> 「枯木又クォーター」 Vol.16、1997 年。同、Vol.81、2013 年など。

<sup>188</sup> 「枯木又レポート」 番外編、十日町タイムス、2009 年 7 月 28 日。

<sup>189</sup> 「枯木又クォーター」 Vol.55、2006 年。

<sup>190</sup> 「枯木又クォーター」 Vol.56、2007 年。

は特にないということで、大学への協力を決めた<sup>191</sup>。そして、「せっかく遠くから来てくれる人に何か楽しんで、思い出に残るようなことができないだろうか」、ということで市の「おもてなし事業」に取り組んだり、独自にエコ・ミュージアムの拠点施設で「そば処」を季節営業することにした。約一か月半にわたる芸術祭の週末に営業を行うことにして、地元の有名そば店の協力を得て特産品の黒米をまぜた「黒米そば」を提供したところ、予想を超えてのべ 800 人が来店して、充実の営業となった。集落の住民は、「分校校舎が残っていたからできたこと」だと、分校の活用を考えようと維持管理に勤めてくれた「活用を考える会」に強く感謝した。そして、「戸数も人口も減って、小さな集落になっていますが、「枯木又大好き」と言ってくれる皆さんと共に、暮しやすく楽しい地域づくりに励んでいきたい」との思いを強くした<sup>192</sup>。その後も、京都精華大学との関係は続き、現在に至るまで大地の芸術祭の際は毎回分校に様々な作品が制作されたり、黒米そばの特産品化を探る動きが続いている。近年は、地域おこし協力隊制度も活用しながら<sup>193</sup>、地区を維持していく方策を検討し続けている。

このように、枯木又地区の戸数・人口が激減していく中で、地区として厳しい状況と感じざるを得ない危機的局面があった。しかし、地区が抱えている困難や課題を常に会員にオープンにして、地区の住民の思いを示し、会員同士がお互いの考えを交わし合う場があったことで、様々な知恵が寄せられて、ピンチを切り抜けてきたのである。都市住民が山間地の集落のメリットを楽しんで単に消費する関係ではなく、山間地集落の価値を学びあい、協同的に創造し続ける仲間としての関係性を構築してきたからこそ、地区の困難を乗り越えられてきたと考えられる。枯木又ではエコの会の存在によって、過度に外部から振り回されることなく自律的な地域づくりを達成していると捉えられる。

一見するとゆるやかに枯木又の人口減少は続いており、現在は 8 戸の小さな地域ではあるが、枯木又は多様な人々の自分らしい参画を掛け合わせた協働によって形成され続けてきた場といえよう。

### ③ 協働して地域をつくり続けてきたことへの確信や誇り

本章の最後に、初期からずっとエコの会に中心的に関わってきた地区の人々（青年会メンバーとそのパートナーの女性たち）が、エコの会の活動をどのように評価しているか示しておく。

まず、この活動がなぜ継続できたと認識しているのか。

「都会の人たちが支えてくれているわけだから、残ってほしいって思ってくれている人たちが会員になっている。20 年ずーっと支えてくれている人っていうのは、本当にここが好きな人。

---

<sup>191</sup> 「枯木又レポート」番外編、前掲。

<sup>192</sup> 同上。

<sup>193</sup> 「枯木又クォーターリー」Vol.67、2009 年。

だから、そういう人がいる限りは、頑張らなきゃいけないから。」<sup>194</sup>

「結局、蚊帳の外みたいになっていると不満ばかりになるし。お父さんたちが一生懸命になればなるほど奥さんたちはつまらないだろうし。だったら、一緒に参加しちゃえばねえ。事情もわかるし。大変なところもいいところもわかるので、それがずっと続いてきたあれだと思いますけどね。」<sup>195</sup>

地域内外に様々な支え合いや協同をつくりだしてきたことが、この小さな地区でこれほどの活動が続いてきた大きな要因だと認識されている。また、活動することへの認識も確認してみよう。

「(行事をやることは) 億劫ではないね。やってきたことだから、別に無くす必要もないし。」

<sup>196</sup>

「行事を続けていくことが地域を続けることだと思うし。(略) やっぱ、地域のことをやることによって (会の人たちが) まとまったり、自分の気持ちが地域にあったりする。」<sup>197</sup>

地域の行事を絶やさないようにしてきたことは集落の人々にとって活動の大きな部分であるが、昔から続いてきたことを引き継いできたという点では負担感が少なく、むしろ行事によって地域をみんなで作り出してきたという自負がうかがえる。

さらに、エコの会の主要な運営メンバーは子育て世代であったので、教育環境として地区をみる視点があった。子どもの数が非常に少ない地区の状況を親たちは案じていたのだが、「枯木又エコ・ミュージアムの会」の活動に子どもたちを巻き込むことで、山間地ならではの遊びや多彩な交流に触れさせていった。夫婦で会議に行くときに子どもたちも連れて行ったり、行事ではあいさつや歌をうたうなどの出番を与えていったことで、数人しか生徒がいらないへき地の分校から市街地の中学校へ進学する時に分校教師が心配しても、子どもたちは物怖じしなかったという<sup>198</sup>。以下に、子育てにおいてエコの会がどのような意義があったと理解しているか示す。

「子どもたちも、親と一緒にいろんな交流をしてきたから…山間地の田舎の部落<sup>マラ</sup>だけど、都会の人たちとか子どもたちと話したりして育ってきているから、そんなに臆せずいろんなことができる」<sup>199</sup>

「わたしたちがやっていることを学んで、東京に出たときに、なんかものすごく、ここがいい

---

<sup>194</sup> 枯木又エコ・ミュージアムの会役員経験者 M 氏へのインタビュー (2015 年 8 月 12 日実施)

<sup>195</sup> 枯木又エコ・ミュージアムの会役員経験者 K 氏へのインタビュー (2015 年 8 月 12 日実施)

<sup>196</sup> 枯木又エコ・ミュージアムの会役員経験者 J 氏へのインタビュー (2015 年 8 月 12 日実施)

<sup>197</sup> 枯木又エコ・ミュージアムの会役員経験者 L 氏へのインタビュー (2015 年 8 月 12 日実施)

<sup>198</sup> 枯木又エコ・ミュージアムの会役員経験者 M 氏へのインタビュー (2015 年 8 月 12 日実施)

<sup>199</sup> 同上。

ところだ、っていうことを再認識してくれている。そういう風に思ってくれているっていうのは、お父さんお母さんたちが、一生懸命やってるのを見ていてくれたんだなって。そういうのを子どもが言ったりするのを聞いたりするときに、あ、やってよかった…っていうのを、すごく感じるかな」<sup>200</sup>

「地域子どもたちって、地域の大人たちに守られていたし、うちの子はうちだけで育ったんじゃないくて、(みんなが)一緒に育ててくれる」<sup>201</sup>

子育て世代は、都市の会員や集落の住民とともに子どもたちの育ちの場をつくり、子どもたちの成長を実感してきたことで、地域社会を教育環境として高めてきたことへの誇りや活動の意義への確信がみられる。

このように、地区の人々はただ過疎化の流れに身を任せて「こころの過疎」と言われるような諦めや否定、投げやりさをもって生活していたのではなく、住民自ら枯木又を地域社会として維持し続けるための工夫を文化的次元から経済的・政治的次元の様々な課題に対して取り組み続けるかたちで地域づくりに取り組んできたのであり、そこに居場所や楽しさ、やりがいがあったことでこの活動は継続することができたと考えられる。

## (5) 小括

第三期では、枯木又の様々な属性の地域住民が、青年たちの提起した地域づくりの展望を共有し実践に参画していく協同の形成過程を見てきた。

まず、最初に協同が形成されたのは、青年たちと高齢者・婦人学級メンバーであった。枯木又の地域特性を継承し活かしていこうとする点において、婦人学級の女性たちや高齢者による生活文化を継承する実践がエコの会の取り組みに包摂され、いちはやく事業を共に行う協同関係が形成された。

第二期で形成された地域づくりの展望を実現しようとする青年たちは、彼らの考えを地域内外に発信し、その反応を得たことで、社会的に意思や要望を示すことの意義を学んでいた。また、都市との交流で顕在化した地域資源を活用する事業を展開していき、経済的な持続可能性を高める取り組みも行われた。

とはいえ、地域社会の中心層であるがゆえ農業の厳しさ(＝農業の市場的価値の小ささ)から地域づくりに対する無力感があった年長男性にとって、市場の論理で評価されることこそ地域社会を持続させる上で重要だという価値観が根強く、青年たちの活動は持続可能な地域づくりにつながるものか理解しがたいものだった。

しかし、青年たちの活動が行政をはじめ多くの人々の支援を受けて活動が幅広く展開されたこと、青年たちが対話的に彼らの意思を尊重して参画を求めてきたことでようやく事業に関わると、青年たちが都市農村交流で経験してきた学びを彼らも追体験し、自己信頼・

---

<sup>200</sup> 同上。

<sup>201</sup> 枯木又エコ・ミュージアムの会役員経験者 K 氏へのインタビュー(2015年8月12日実施)。

地域への信頼を回復した。それによって、年長男性も活動の意義に共感して、さらに、地域での生活を否定しない形で市場的価値を生み出す地域資源の創造が可能であることを認識したことで、エコ・ミュージアムとしての地域づくり実践に参画するに至ったといえる。

他方、青年世代のパートナーにあたる「若い母ちゃん」衆は、地域社会の最も周辺に位置しており、そもそも地域活動に参画したり意見する回路を基本的に持っていなかった。青年たちにとって、中心層に理解されなければ地域づくりを進めにくいことや、人手が足りないという実践上の理由があったものの、様々な視点や経験から枯木又らしい地域資源を作り出し共有・継承することを地域づくりの主たる方法としていたため、地域社会の権力構造の中心一周縁という真逆に位置するような立場すら超えて誰もがその人らしく参画することを求めて彼ら・彼女らにアプローチした。そして、両者は活動に参画した際、自分らしく地域づくりに関わることの楽しさや意義を実感していき、自分の視点や経験を評価するエコの会を受け入れるに至った。つまり、青年たちが、周囲の住民を主体形成していくことで、協同的關係が形成されたと考えられる。こうして、エコの会は地域内外の様々な属性の人びとで協同する実践コミュニティとなったといえよう。この段階において、地域住民にとって「枯木又」という場は属性問わず様々な人びとの手で協同して守り育てる場として位置づき、エコの会は「枯木又」の持続可能性を高める多種多様な活動を生み出す基盤となったと考えられる。

## 5. 新たな文化の公共圏創出と拡張論理の検討

本章の課題は、周辺層を起点とした地域づくりの協同形成過程に即して、新たな文化の公共圏が拡張し、文化的再生産の構造と地域社会構造が変容する論理を検討することであった。その際、異なる価値の折り合いがいかにつけられていくのかに着目することとした。

まず、この展開の前提として重要だったのは、分校教師や地区公民館主事が企画し参画を促すという自治体職員からの働きかけと、同質の属性の仲間づくりであった。地域で信頼される支援者の呼びかけにより、学習に参加しにくい層の人々の参加が比較的スムーズになされたと考えられる。そして、婦人学級の参加者は、話し合いや生活記録文集づくりを通して、生活の矛盾をみつめて地域の生活に根ざした価値を意識化し、語り合える信頼関係を築いていた。青年たちは、都市住民との交流など生活の楽しみを共有する関係を築いて、都市からみた地域に価値を見出す視点の存在を認識した（第一期）。女性たちや青年たちによる価値の意識化は、新たな文化的再生産の端緒といえよう。特に女性たちは封建的規範の制約が強く地域社会で孤立しがちであったため、地域社会で要請される役割に基づく苦労や喜びを共有する経験によってはじめて、生活の中の矛盾の対象化や生活に根ざした価値の意識化につながった。

次に、旧来の地域社会の仕組みの限界が明らかになったことを契機として、第一期で形成された関係を基盤に新たな地域づくりの展望が明確化していった。過疎の深刻化で、地

域の持続可能性が低下していることを突き付けられたことにより、その危機対応が求められた局面である。そこで行われた学習とは、第一期のように「今・ここ」にある地域社会の日常を対象化し、オルタナティブな価値の存在を意識するのみならず、都市―農村という空間軸、過去から未来への時間軸の視点を拡張させて、第一期で見出した地域の価値の正当性を意識的に検討するものであり、その価値を再生産しようとする実践の創出につながるものであった。

この点について、婦人学級では、自分たちの身の回りに即して地域の歴史を調べる学習活動が行われていた。それは、衰退する地域の下で消えそうな生活文化を対象化し、自分たちの生活に根ざした文化の中で未来に継承すべき価値を持つものを模索する学習であった。彼女たちは子育てで用いた遊びうたや昔ばなしに地域らしい価値を見出したことで、文化活動を通してその価値を地域内外に発信するに至った。つまり、地域文化を再評価する公共圏がつくられたといえる。このように、地域のアイデンティティを体現する文化を次世代に伝えることが、彼女たちの地域づくりの展望であった。集団的に過去から未来（次世代）への時間軸の視点を獲得したことは、「現在」の自分たちが生活に根ざした価値を受け継ぐ主体であることが意識化される。それは、地域のアイデンティティを表す文化の継承において当事者意識が高まる契機であり、このような観点から地域の生活文化を再検討するという点で文化的再生産の構造を再構築しようとする主体性の獲得が起こっていたといえる。そして、彼女たちが文化を継承するための実践を創出していたからこそ、以下で述べるように、青年たちが、外部との関係から地域づくりを検討する視点だけでなく、どのように地域社会の生活や文化が再生産されているかという視点からも地域づくりのあり方を検討していく道筋が拓かれた。

青年たちの事例では、都市住民との交流を楽しむ中で、都市の視点から浮かび上がる地域固有の価値や資源の存在を知ったことが地域づくりの展望を形成する起点となっていた。しかし、それだけでは地域づくりにむけた活動が生み出される十分条件とはならない。地域開発案の登場により、開発への対抗として自然の価値を地域づくりの展望の指針として明確に位置づけることになった。そこから、都市農村交流が自分たち／地域にとってどのような意味があるのか根本的に検討しようと、それまでの個人的交流を地域内外に向けて地域づくりとして拡張的に試行したことで、地域づくりで重視したい価値を具体化し、様々な地域資源の活用方策を具体的に見出すことができた。加えて、高齢の地域住民がすでに行っていた文化を継承するための実践を手掛かりに、自分たちの世代が生活文化の継承の要であるという、時間軸の視点からの当事者性も獲得した。それによって、地域の価値を地域住民が積み重ねてきた労働や生活文化と結び付けて理解することも可能となっていた。こうして地域社会の現状と向き合ったことで、地域住民それぞれの持つ力量や視点を楽しんで学び合う機会をみんなで共有するためには、様々な住民が自分らしく参画することが不可欠であることが意識化されるとともに、地域づくりの主体として誰もが意見を述べたり参画することの意義が確認されていた。

このように青年たちは、都市—農村という空間軸の視点から地域特性を意識化したのみならず、時間軸の視点を獲得したことで、「都会にはない価値」が自分たちの生活にとってどのような意味を持つか、さらには自分たちの生活や文化がどのように再生産されてきたのかという点まで掘り下げて地域を対象化するようになったといえる。つまり、枯木又の「空間の履歴」は住民の生活の蓄積によって作り出されてきたという理解がなされ、対立する年長男性も含めて地域を支えてきた人びとを尊重する意識が生まれたと考えられる。そのため、青年たちには、多様な人びとの視点が地域資源を浮かび上がらせるということや、その人の生き方そのものが地域資源であるという認識から多様な住民と協同する論理が生み出され、こうした発想に適合的なエコ・ミュージアムという理念に基づく新たな文化の公共圏を創出するに至ったとみることができる。この時、婦人学級や地元高齢者の文化活動の一部は、年齢的な問題からかれら自身で活動を継続・発展させていくことが難しくなりつつあったが、活動の本質が青年たちに受け継がれたという点で、青年たちの地域づくり実践に包摂されたと考えられる。

また、青年たちは時間軸だけでなく都市—農村の空間軸の視点があったことで様々な地域資源を掘り起こすことが可能であったため、アイデンティティの継承のみならず地域の持続可能性を高めるために柔軟に地域資源を創造することも可能であったといえよう。生活のためには稼ぐことも求められるが、当時広がりつつあったリゾート開発の方向性とは異なる、地域の自然や生活文化を活かす方向性を基本路線として、特産品づくりや都市住民への直販などの方法を創り出す道を志向できたと考えられる。

以上をふまえつつ、枯木又の地域社会内で価値の衝突がいかに起こり、いかに乗り越えられたのかを検討する。まず、第一期から第二期にかけて、青年も女性も同じ経験を有する者ごとに組織化がなされ、新たな地域認識の視座に基づく地域づくり実践が創出された。だが、周辺層だけで活動すれば自動的にほかの住民の認識が転換される（「場の構造」が変容する）わけではないことが確認された。青年たちの活動は市の補助金という「公的承認」があったものの、それだけで地域住民相互の認め合いが起きるとはいえなかった。むしろ、地域づくりの方向性を問うという公共的意思の形成に関わる場面に青年たちが登場したことで、年長男性との価値観の違いが浮き彫りとなり、両者の対立が不可避となった。

年長男性の地域づくりの価値観は、いかにして作り出されたのか。その要因として、高度経済成長期以降、従来の農業中心の生活では生活できなくなり、長年出稼ぎと彼らの妻の内職（デバタ）によって現金収入を得ることでどうにか暮らしてきたこと、同様の理由から多くの住民が離村するのを見てきた経験が大きく影響していたと考えられる。こうした経験によって、政治・経済の流れには逆らえないという意識や、市場の論理にのれなければ、山間部は人の生活できない価値のない場所という認識が強固に形成され、それによって主体的に地域づくりを構想していく力が奪われていたといえよう。このような年長男性との価値観との違いが意識されなければ、青年たちが公的承認を得ることで自分たちの取り組みに公共的価値を付与しようとしても、それだけでは新たな価値の共有は困難であ

ったと考えられる。

青年たちは、この対立をどのように乗り越えようとしたのか。青年たちは、第二期までの学びを通して、先行世代が地域存続にむけて生活してきたことで今の地域社会が在ることを理解していたからこそ、年長男性と共に地域存続にむけて協同的に活動するための可能性を模索しようと対話的な関わりを粘り強く続けたと考えられる。青年たちは、当初は年長男性の地域認識の特徴について自覚的ではなかったが、エコ・ミュージアムの活動の条件整備と自然や生活文化を活かした交流、現金収入を得る方法の検討と並行して、活動について年長男性に発信し、参加してもらい、青年たちの学びを迫体験してもらった。こうした対話や共に活動することを通して、年長男性は生活に根ざした価値を土台としつつ市場的価値を追求することが出来る可能性を認識するに至り、生活に根ざした価値と市場的価値の折り合いのつけ方が両者の間で共有されたと考えられる。こうして、青年たちと対立的な関係にあった年長男性も、エコ・ミュージアムの会に合流するに至った。

このように、青年たちが第二期で他者の視点や人生経験の総体を価値あるものとして捉えていたことで、対立する他者にも敬意をもって接することができ、かれらとつながる必然性が生まれたことは、多様な地域住民の間で協同的關係を構築する上で欠かせなかったといえよう。このような地域住民への認識が形成されていたため、地域社会のもっとも周辺に位置づいて孤立していた青年会メンバーのパートナーである女性たちも、多様な関係性の構築を足掛かりにして、主体的に地域社会に関与していくことが可能となっていた。このように、学習を深めた周辺層が属性の異なる住民の学習を促して、ともに活動する主体としての関係を形成していくことで、文化的再生産の構造の再構築が大きく進んでいったと考えられる。エコの会の作り出す文化が多様な地域住民に共有されたことで、地域社会の公共的な意思決定のあり方（「枯木又地区活性化委員会」）や、地域資源の創造のあり方（黒米などの特産品づくり）にまでもエコの会の発想が広がっており、地域社会構造にも影響を与えているといえよう。

さらに、本事例では地域内の様々な属性の住民の協同に加え、都市住民との協同的關係の形成も可能となっていた。それは、「エコ・ミュージアム」の地域づくりを見出していく段階（第二～三期）において、「枯木又」の持つ価値が地理的空間のなかに閉じられて発揮されるのではなく、都市―農村という空間的広がりをもって捉えることで価値が浮かび上がってくると地域住民が確信していったからだと考えられる。よって、地元外の人々とも協働して「枯木又」の価値を守り育てるのが重要との理解に至ったといえよう。それゆえエコの会では、どのような属性の者でも、地域の持続可能性の向上につながるならば、地域資源を利活用することが合意形成されていた。この段階の「枯木又」という場合は、もはや単なるエリアではなく、枯木又に関わるあらゆる人々の物語が埋め込まれる場であったと理解できる。

## 6. 小括

本章の最後に、枯木又の事例から示された文化的再生産の構造の再構築過程として確認されたことを述べる。第一に、周辺層の地域住民には地域社会の矛盾が凝集されていることから、生活を対象化する学習の組織化がなされると、かれらは生活に根ざした価値の意識化が進展するということである。第二に、公共的な意思形成の場において旧来の発想に対するような新たな価値に基づく地域づくりの展望が現れると、対立が起こることになる。すなわち、新たな価値に基づく文化の公共圏が空間軸・時間軸に沿って拡張していくことで、旧来の公共圏との間に対立が生じると捉えられる。第三に、対立を超える条件とは、周辺層が学習を深めて地域住民の生活の蓄積に基づく「空間の履歴」を認識することで、周辺層が新たに見出した地域の価値とは年長者を含めた地域住民によって生み出されてきたと理解したことであった。つまり、対立があったことで青年の学習の深化が必要となり、それによって青年と年長男性との間に対話と協働の可能性が拓かれた。「公的承認」だけでは対立を超える十分条件ではなかったといえよう。第四に、学習の深まりによって新たな価値に基づく文化の公共圏は拡張することで、年長男性や若い母ちゃん衆、都市住民など多様な人々を包摂する空間として構成されるに至った。第五に、拡大した文化の公共圏が、地域社会構造の変容に影響を与えていた。すなわち、新たな価値を提示した周辺層の地域づくりの展望が共有されていったことで、地域内外の協働による地域社会構造の組み替えが進展していったのである。

### 第3章 地域づくりの協同形成を支える学習支援機能 —飛渡地区公民館における地域づくり集団の組織化過程に即して

#### 1. 課題と方法

##### (1) 本章の課題

これまで、地域づくりにおける周辺層の主体形成と、それを起点とする地域づくりの協同形成過程から、新たな文化の公共圏を産み出し拡張することで地域社会構造の変容につながる論理を検討してきた。第3章では、地域づくりの協同形成を支える学習支援機能のあり方を検討するために、飛渡地区全体の地域づくり集団の組織化過程における地区公民館の果たした役割の分析をおこなう。その際、このプロセスを協同の形成としてミクロかつ長期的に分析して検証していく。すなわち、一つの象徴的な実践を短期的に取り上げるのではなく、一地区の公民館史として長期的分析を行うことで、過疎問題を抱えた飛渡地区において、各時期に固有の社会的・歴史的制約を受けつつ、職員が代わっても、地域づくりへの多様な地域住民の参画がいかんして進展していったのか迫りたい。

以下では、飛渡地区の住民関係の特徴を概観したうえで、地域づくりにむけた住民の学習活動や実践の展開に即して分析を行う。その際、飛渡地区の地域社会において重視される住民の属性（居住する小学校区、青年の男性／年長者の男性（壮年以上）／女性、移住者）に着目し、地域づくりにむけた学習活動・実践に参画する住民の属性が多様化する過程において、地区公民館がどのような関与をしたのか、特に、①住民をどのように組織化したのか、②実践の内容・方法はいかなるものだったかに注目して整理する。以上の作業を通じて、文化的再生産の構造が地域社会構造の変容にいかにつながるかという視点から、地域づくりの協同の形成を支える学習支援機能を考察する。

##### (2) 飛渡地区の住民関係にみられる対立

ここでは、十日町市飛渡地区の住民の関係性を大きく規定してきた特徴を確認しよう。

第一に、繰り返しになるが、世帯主である年長男性のみが地域の自治をめぐる意思決定を行う、戦前からの慣習にもとづく公共的意思形成の形式である<sup>202</sup>。青年と既婚女性が地域社会と関わる主な場としての各集落の青年会と婦人会は、戦後始まった青年学級・婦人学級等での学習を通じて民主化を推し進める機運を高めていた<sup>203</sup>。しかし、高度経済成長期にどちらも停滞したため<sup>204</sup>、青年や女性が地域社会に対して意見を表明したり行動する回路が失われ、彼・彼女らは一層周辺化していたといえる。

第二に、飛渡地区には小学校が2つあり、各校ごとに地域住民が強く団結していた。よっ

<sup>202</sup> 「出稼ぎ農民とその家族の生活」十日町市教育委員会、新潟大学社会教育研究室、1966年、pp.48-55。

<sup>203</sup> 多田朋孔・NPO 法人地域おこし『奇跡の集落』農文協、2018年、pp.12-14。飛渡地区公民館『とびたり』2号、1967年。東部婦人会『まわしがき』1963年、など。

<sup>204</sup> 飛渡地区公民館『わらぼし』1号、1973年、前がき。

て、住民は校区を超えた交流に積極的ではなく、むしろ、対立的雰囲気さえあったという。飛渡第一小学校（以下、「飛一小」とする）と飛渡第二小学校（以下、「飛二小」とする）の教員たちは互いに独立校として距離を置いていたため、それに付随して住民も校区としてのまとまりを重視する傾向があった<sup>205</sup>。

**表 17 協同形成過程と支援内容**

| 誰の組織化か                   | 結成された団体と活動内容                                                                | 支援の内容                                         |
|--------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|
| ①校区をこえた青年の組織化            | 飛渡体育協会（再始動：1982年）<br>→地域おこし青年会議（1985年～1994年）地域資源創造                          | 青年の仲間づくり<br>地域づくりのアイディアを形にする支援<br>（青年の主体形成支援） |
| ②青壮年男性の組織化               | 地域おこし青年会議＋飛渡を考える会（1985～1994年）<br>→桜月会（1994年？～自然消滅）<br>→濃実会（1996年～現在）陳情内容の検討 | 青年の地域づくり実践の活発化をうけた<br>壮年層の組織化と両者の対話の場づくり      |
| ③年代・性別をこえた組織化            | 濃実会：ふるさと環境学習の支援                                                             | 多くの人が参加しやすい地域課題のテーマ設定                         |
| ④旧住民・新住民の組織化             | 食と農を考える飛渡の会（2012年～現在）飛渡野菜のブランド化<br>コメの共同出荷                                  | 両者をつなぐ支援、意見調整                                 |
| ⑤協同的な自治にむけた<br>多様な住民の組織化 | 飛渡の未来を創る会（2015年～現在）農業、教育・福祉、交流の<br>各観点からの地域づくりに取り組む                         | 側面支援（事務、会場提供など）                               |

## 2. 周辺層の組織化と主体形成から周辺層の視点の公共化へ

### （1）校区を越えた青年男性の組織化：飛渡体育協会から地域おこし青年会議へ

以下では、飛渡地区の地域づくり集団の端緒となる、周辺層の主体形成からみていく。

1970年代初頭、高度経済成長期の急激な社会変動・人口流出によって、飛渡地区の集落青年会の多くが停滞・消滅していた。その結果、1973年には地区青年会も解散となった。親世代の出稼ぎの苦勞を見てきた青年たちは出稼ぎをやめて兼業農家として市街地へ勤めに出て生活するようになり、生活スタイルが多様化したためであった。

地域社会のつながりが薄くなっていく状況に対し、3代目地区館主事（1979～1985年）は、「人口減少が続くこの地域では、今後両地区（飛一地区と飛二地区：筆者注）が力を合わせる事が大切」と考えて、校区の分断がある年長世代より青年世代に期待をかけ、「頭が柔軟な若いうちに、みんなが集まって、なにか一緒にやることによって、酒を飲んだり話をする事で近しくなれば」<sup>206</sup>という意図で「青年宿泊研修会」（1979年）を企画した。内容は、飛渡地区の青年男女を対象に、農業・結婚・仲間づくりに関する講話と話し合い、スポーツ、飲み会を通して交流し、地域の今後について考えるというもので、地区公民館で二日間かけて行われた。当時、青年の中には交流する仲間を求めて小グループを結成する動きもあったため、彼らにとってこの事業は活動の幅の狭さという小グループの悩みに応えるものとして好評だった。よって、この事業は年2回のペースで2年間行われた<sup>207</sup>。

<sup>205</sup> 3代目地区館主事へのインタビュー（2013年8月9日実施）、6代目地区館主事へのインタビュー（2015年2月17日実施）。

<sup>206</sup> 3代目地区館主事へのインタビュー、同上。

<sup>207</sup> 十日町市公民館「公民館情報」No.6、1979年8月1日、pp.10-11。3代目公民館主事

表 18 飛渡地区青年研修会スケジュール(十日町市公民館「公民館情報」No.6/1979 年)

| 青年研修会（会場：飛渡地区公民館・飛渡第一小学校）／参加者 42 名（男 37 名、女 5 名） |                       |
|--------------------------------------------------|-----------------------|
| 1979 年 6 月 23 日                                  | 1979 年 6 月 24 日       |
| 午後 7 時半 開会式                                      | 午前 8 時 ゲーム・レク ダンス     |
| 午後 8 時 講話「明日のよりよい地域を考えて（農業・結婚・仲間作り）」野本郁太郎氏より     | 午前 9 時 グループ別討議        |
|                                                  | 午前 11 時 全体発表          |
| 質問・茶話会                                           | 午後 1 時 体育（ソフト or バレー） |
|                                                  | 午後 3 時 解散             |

地区館主事は、仲間づくりは一応の成果をあげたと考えて、3 年目の研修会は地域内の問題点を話し合う会とした<sup>208</sup>。青年たちは議論を通して地域全体で集まったらできることがあると考えるに至り、スポーツ好きな 30 歳前後の青年男性約 20 名が集まって、形骸化していた飛渡体育協会を再開することにした<sup>209</sup>。地区公民館は、飛渡体育協会の拠点として事務局業務を引き受け、事業の共催として広報などの支援をしたことで、地域住民も事業に参加するようになった。

このように、地区公民館の働きかけで校区を越えた青年同士の交流と地域に向き合う学習がなされたことで、青年たちは、自身の関心に重なるところから地域の課題と向き合う主体として形成されたと捉えられる。

さらに地区館主事は、青年たちの地域づくりの主体性を高めようと、「今後まだ過疎の進行のおそれのある中、飛渡を残していこうとする人達が、今後どういった方向で生き残るべきか、一生懸命、研究協議をしていかなければならない時期」と判断して、1984 年度公民館事業のテーマを、飛渡の良さを見直すための「飛渡再発見」を掲げた<sup>210</sup>。そして、地区館主事は青年対象の「飛渡再発見講座」を企画して、体育協会役員らに参加を求めた。その内容は、年間を通じて飛渡の将来をどう考えていったらよいか協議するというものだった<sup>211</sup>。参加した青年たちは自身の生活経験に基づいた集落の自慢を紹介し合う中で、三ツ山集落にある棚田の絶景「田毎の月」観月会が久しく途絶えているという事実を共有した。

4 代目地区館主事（1985～2000 年）は、青年の活動を地域づくりに展開させるため、青年たちに「田毎の月」観月会復活に取り組むよう提案し、その組織と

図 4 田毎の月の写真

<http://tobitari.com/>  
(2021 年 3 月 29 日閲覧)



へのインタビュー、同上。

<sup>208</sup> 十日町市公民館「公民館情報」No.17。1981 年 5 月 1 日。

<sup>209</sup> 飛渡地区公民館「飛渡公民館四十五年のあゆみ」1999 年、p.20。

<sup>210</sup> 飛渡地区公民館「わらぼし」13 号、1985 年 3 月 25 日。

<sup>211</sup> 「市報とおかまち」1984 年 6 月 10 日。

して「地域おこし青年会議」（以下、青年会議とする）の結成を促した（1985年）。青年会議では観月会の再開に取り組みつつ、地区館主事の支援を受けて農業先進地視察や村づくり勉強会も行った。これらの活動を通して青年たちは、これまで過疎問題を直視するのが不安で避けがちだったが、自主的に問題解決できることは挑戦しようと考えようになった<sup>212</sup>。つまり、青年たちは地域づくりの主体としての自信を獲得し始めたといえる。

表 19 地域おこし青年会議 1985～87 年学習表(「十日町の社会教育 No.8」1988 年から筆者作成)

| 回数 | 日程             | 学習内容       | 学習方法      | 備考                 |
|----|----------------|------------|-----------|--------------------|
| 1  | 昭和60年<br>5月9日  | 青年会議発会式    |           | 委嘱状授与              |
| 2  | 5月28日          | 田毎の月現地研修会  | 月の観測      | 三ツ山部落で実施           |
| 3  | 6月             | 田毎の月発足のチラシ | 配布        | 地域内                |
| 4  | 6月21日          | 講演会        | 講演と討議     |                    |
| 5  | 8月7日           | 先進地に学ぶ     | 座談会・討議    |                    |
| 6  | 9月9日           | 考える会との合同会  | 合同討議      | キャンプ場・ブナ林について      |
| 7  | 11月10日         | 地域おこし大会出席  |           | 県地域おこし大会<br>大和町公民館 |
| 8  | 昭和61年<br>5月4日  | 田毎の月現場整備   |           | 道の下刈り              |
| 9  | 6月22日          | 田毎の月実施     | 民謡と観月     |                    |
| 10 | 7月24日          | 講演会        | 講演と討議     | 安塚町総務課長            |
| 11 | 9月9日           | 講演会        | 講演と討議     | 高柳町                |
| 12 | 11月4日          | 考える会との合同会  | 今までの行事反省会 |                    |
| 13 | 11月9日          | 安塚町視察      | スクール参加    |                    |
| 14 | 昭和62年<br>6月13日 | 田毎の月実施     | 三ツ山分校で民謡  | 降雨で地元の人との交歓会       |
| 15 | 7月5日           | 地域内視察      | 地域資源視察    | ブナ林・田毎の月           |
| 16 | 7月10日          | 講演会        | 講演と討議     | 津南町                |
| 17 | 8月20日          | 県政を学ぶ      | 講演・座談会    |                    |
| 18 | 12月2日          | 講演会        | 講演と討議     |                    |

このように、地区公民館は校区を超えた青年の仲間づくりを推し進めて、それを基盤に彼らの地域づくりのアイディアを形にする支援を行ったといえる。また、地区公民館が青年の活動を支えたことで公的保証がなされて、地域住民が彼らの活動を受け入れやすい状況づくりに貢献したと考えられる。

しかし、この段階では年長世代の間に校区の溝があったため、体育協会が校区合同運動会を発案した際、年長世代に受け入れられず実現できないという限界もあった。

## (2) 周辺層の視点の公共化／青壮年男性の組織化：桜月会から濃実会へ

青年の地域づくり活動が活性化してきたため、地区館主事は「地域、家庭において最も実力者の層」でありながら地域づくりへの主体性を失っていた壮年男性にも地域づくりに関心を持ってもらい、青壮年で刺激し合い高め合う関係をつくりたいと考えた<sup>213</sup>。地区館主事は「実力者が地域おこしに無関心では困る」、「若い青年会議のメンバーが力一杯活動するために、車の両輪となって頂きたい」という提案を 40～50 代 11 名に行い、組織化を促した<sup>214</sup>。

<sup>212</sup> 「市報とおかまち」1984年6月10日。同じく1984年12月10日。

<sup>213</sup> 4代目地区館主事へのインタビュー（2013年8月27日実施）。

<sup>214</sup> 十日町市教育委員会『十日町の社会教育実践レポート集 No.7』1987年、p.105。中魚

壮年世代の住民はなぜこの提案に賛同したのか。それは、青年たちの動きを黙って見ていくわけにはいかないという地域の中心的存在としての役割意識が強かったことによる<sup>215</sup>。結成された「飛渡を考える会」では地区館主事の提案を受けて、青年会議の「田毎の月」事業への協力や青年との合同討議など、壮年世代が青年世代を支援する活動が行われた。青年たちの活動が地区公民館の後援に基づく文化的次元の活動内容であったことで、年長男性には公民館関係の活動の範疇として捉えられ、青年たちへの支援は公民館への支援という文脈でスムーズに受け入れられたと考えられる。

年長男性たちはいざ活動に参加すると、飛渡を考える会のメンバーは青年の活動ぶりに触発され、「飛渡のビジョンづくりは、考える会と青年会議が両輪となって進めなければと思っています」、「行政の手助けがなければ何もできやしないと思いがちでしたが、飛渡地区は自分たちで興すといった気概で、現状をしっかりと見すえ、過疎を嘆かず、明るく、そして理想を持って前進すれば必ずや“豊かな飛渡”が生まれるものと考えています」<sup>216</sup>と述べるに至り、青年世代の活動の意義を認めた。地域の衰退を目の当たりにして無力感を高めていた彼らも、「青年の活動支援」というかたちをとって青年の主体的な地域づくり実践に触発され、地域づくりへの主体性を獲得し始めたと捉えられる。

「田毎の月」観月会は、三年目にして天候に恵まれて、美しい景色に彼らはやりがいを感じた<sup>217</sup>。しかし、青年会議と飛渡を考える会の両会ともメンバーが固定化していたため、年齢を重ねて家庭や仕事が多忙になるにつれ停滞した。両会は統合されたが（「桜月会」）、再活性化しなかった。

この状況に対し地区館主事は、青壮年男性の再組織化を試みた。両会メンバーに加え目ぼしい地域住民に対し、「これからは本当にひとつになって飛渡のことを考える会が必要だ」と提案を行った<sup>218</sup>。こうして集まった 20 名は、「私達の住む飛渡地域を皆の力で、活力ある元気な地域とするために、知恵を出し合おう」と掲げて「濃実会<sup>のうみかい</sup>」を結成した（1996 年）<sup>219</sup>。地区公民館は、再び事務局として濃実会の運営を支えた。当初の活動では、市の幹部に提言を行う「市民と語る日」に向けた勉強会を行っていた<sup>220</sup>。しかし、政治的な内容の勉強会が続くうちに出てこない会員が増えてしまった。このままではよくないと判断したメンバーたちは、どの議員を推すなどの政治の話は絶対にしないと決めて、会合の内容を親睦目的の飲み会へと変更することにした<sup>221</sup>。このことは、いきなり地域社会構造まで踏み込んだ検討は、従来の構造における利害に直接的にかかわる内容であるため、それぞれの地域づく

---

沼郡・十日町市社会教育振興会「つまりの社会教育」No.37、1988 年 3 月 1 日。

<sup>215</sup> 地域おこし青年会議役員経験者へのインタビュー（2013 年 8 月 27 日実施）。

<sup>216</sup> 「市報とおかまち」1986 年 4 月 10 日。

<sup>217</sup> 飛渡地区公民館「飛渡地区公民館設置 35 周年記念誌」前掲、p.21。

<sup>218</sup> 六代目飛渡地区公民館主事へのインタビュー（2015 年 2 月 17 日実施）。

<sup>219</sup> 飛渡地区公民館「飛渡公民館四十五年のあゆみ」前掲、p.22。

<sup>220</sup> 飛渡濃実会作成資料。

<sup>221</sup> 六代目飛渡地区公民館主事へのインタビュー（2013 年 8 月 28 日実施）。

りの展望のすり合わせや合意形成なしには、対立を生みかねないことの現れだと考えられる。

このように、地区公民館は、周辺層である青年男性の実践を基軸に、中心層である年長男性との対話やともに活動する関係の形成を促す役割を担ったといえる。しかしこの局面では、メンバーの固定化や活動内容のあり方という課題が明らかになった。

### 3. 文化的再生産の次元における協同の形成

#### (1) 年代・性別を超えた組織化：濃実会の活動再編

続いて、文化的再生産の構造の拡張的再構築の局面で、公民館が果たした機能をみていこう。それは、第一に、公民館が地域の自然を活かした遊びという、生活に根ざした価値をテーマに実践を組織したこと、第二に、校区にもとづくそれぞれの文化的再生産の構造の統合にむけて、空間軸・時間軸を拡張した公共圏の形成をリードする働きである。第三に、新たな公共圏の意義を確認できる支援である。

飛渡地区では、1989年度から「生涯学習基盤整備事業」として地区公民館・飛一小・地域住民の連携による「ふるさと環境学習」に取り組んでいた。児童と地域住民が一緒に地域の自然を題材にして学ぶ実践である。地区館主事は、この事業をより多くの地域住民が公民館に関わる場にしたいと構想していた。また、1996年度に赴任した飛一小の校長は、単発的な学習活動を見直して「総合学習」の時間と連関させたいと地区公民館に相談をしており、両者はより深い連携を模索していた<sup>222</sup>。その際、学校側だけで飛渡川遊び事業の段取りをつけるのが大変と聞いた地区館主事は、濃実会で川遊びを運営できないか打診した。

濃実会は川遊びの運営を引き受けたところ、会員たちが子ども達の楽しむ姿を見てやりがいを感じた。そして、川遊びの運営を濃実会の中心事業に位置づけることにした。濃実会は川遊び以外のふるさと環境学習も支援するようになり、子ども達に自分が昔やっていた遊びを教えたり、子どもと一緒に飛渡の自然や歴史を学んだ<sup>223</sup>。また、濃実会でスポーツ大会に参加するなど会員同士の交流にも取り組んだ。すると、活動が楽しそうだからと夫婦で参加する人が出てきたり、子どもと共に事業に参加した父親・母親も同じようにして入会するようになり、徐々に若い会員が増加して女性も参加する会となった<sup>224</sup>。

このように地区館主事が、次世代のためになるし誰もが楽しんで参加できる活動を提案したことで住民の意欲が引き出され、ひいては幅広い参画が可能となったといえる。

さらに、地区館主事は飛一小校長とのやり取りを重ねて飛二小との連携の合意を得たことで、この事業は保育園や飛二小など地区全体の子どもの対象に行われることになった<sup>225</sup>。これによって関わる地域住民の幅が広がり、濃実会の会員はいつそう多様化した。役員に若

<sup>222</sup> 読売新聞 1999年9月20日。

<sup>223</sup> 飛渡地区公民館「飛渡公民館四十五年のあゆみ」前掲、p.15,24。

<sup>224</sup> 六代目飛渡地区公民館主事へのインタビュー（2013年8月28日実施）。

<sup>225</sup> 四代目飛渡地区公民館主事へのインタビュー（2013年8月27日実施）。

い親世代を積極的に登用したことで世代交代に成功したことも、風通しの良い団体づくりにつながった<sup>226</sup>。のちに移住者も加わり、濃実会は地区全体の 20～60 代の住民約 60 名の団体となっていく。

地区館主事は、濃実会の活動支援として、地区内全戸配布される地区公民館・飛一小共同発行の「ふるさと環境学習」文集に、児童に加え親・地域住民の感想も掲載した。文集は取り組みの意義を確認・共有できるツールになっていたと考えられる。また、地区公民館が濃実会の活動を積極的に発信したことで、濃実会は青少年育成の特色ある実践として評価されて多くの受賞歴がある。外部からの評価を得たことは、会員のモチベーションを高めている。特に、飛一小が「ユネスコスクール」認定を受けたことで、ふるさと環境学習は統廃合に対抗するための学校の特色づくりにもつながっている<sup>227</sup>。

会員からは、「自分達が楽しいと感じる事を欲張らずに行っていることで毎回の行事に対してプレッシャーを感じずに出来ている」、「同じ地域の中でも、業種、性別、年齢を超えた情報交換ができる」、「世代に関係なく自由に意見が交わせる」、「飛一も飛二も（関係）ない」という声があがっている<sup>228</sup>。川遊び事業は、地区内の住民が多世代で協力して楽しむ、飛渡地区の夏の名物イベントとなった。

濃実会の取り組みの意義とは、小学校が関与したことで、子どもの自然体験を支援する協同的關係が、若い親世代を含め幅広く形成されたことである。特に母親も含む組織化は、飛渡地区の地域活動に女性が参画するに至ったという点で画期的なものである。また、子どもの教育というアプローチは、地域の公共的課題を多様な属性の住民で認識し共有することにつながる重要な条件であった。

以上の展開を支えた公民館の役割とは、第一に、子どもたちという次世代の教育のためという目的や地域の自然・文化を活かすという生活に根ざした価値をテーマとした実践の組織化であり、それによって住民がみんなで取り組みやすい活動内容を創り出すことができた。第二に、両校区の多様な属性の人々が連帯するために、地区館主事は新たな文化の公共圏の形成にむけてより広い時間軸・空間軸でその公共圏を設定したことである。そのような枠組みの立場に立っていたため、校区を超えた活動の実現にむけて両校区を媒介する役を担うことができた。第三に、新たな公共圏の意義を確認できる支援によって活動の安定化がもたらされた。活動に対する地域内外の感想・評価を知る機会を用意し、住民が活動の意義を実感し誇りをはぐくむ契機をつくっていた。これらの支援が、地域住民の主体性を高め、住民同士が認め合うことに寄与したと考えられる。

しかし、2004 年の中越地震で、地域社会の持続可能性という根本的課題が顕在化するこ

---

<sup>226</sup> 六代目飛渡地区公民館主事へのインタビュー（2013 年 8 月 28 日実施）。

<sup>227</sup> 第 48 回読売教育賞「最優秀賞」（1999 年）、内閣府「チャイルド・ユースサポート章」（2014 年）など。

<sup>228</sup> 内閣府 平成 26 年度「子どもと家族・若者応援団表彰」について

<https://www8.cao.go.jp/youth/ikusei/katudou/h26/html/p-65.html>（2019 年 7 月 4 日閲覧）

となる。震災後 2 年で家の損壊を契機に 20 戸が地区を離れ、閉村を決めた集落も出た。飛二小をめぐっては 1998 年から統廃合反対運動が行われていたが、校舎が使用できなくなったことで 2005 年に閉校した。地域社会の縮小が急激に進み、住民の間で閉塞感が漂っていた<sup>229</sup>。これまでの地域づくり実践の範疇では対応できないことが明らかだった。次節では、移住者との協同で農業の課題に切り込む地域づくり実践がなぜ生まれたのかをみていく。

#### 4. 地域社会構造の再編にむけた協同の形成

##### (1) 旧住民と新住民（移住者）の組織化：食と農を考える飛渡の会

続いて、地域社会の持続を目指すための地域社会構造の再編にむけた公民館の行った支援をみていく。まず、外部との協働を促進する支援についてみていく。

中越地震による閉塞感を大きく変える契機となったのは、地区内の池谷集落における災害復興ボランティア受け入れであった。池谷集落は震災で住宅・農地や神社が崩壊し、8 戸から 6 戸に減ったことで、住民たちは地域社会の持続可能性が非常に低い状況を突きつけられ、気を落としていたが、知人の紹介で被災民・難民支援 NGO の支援を受けられることになり、定期的に都市部からボランティアがやってくるようになった。住民たちは「若い人たちがたくさん来てくれて、気持ちが若返った」「むらの空気が変わった」と感じ、次第に「本当は集落を存続させたい」「よその人でもいいので集落を継いでくれる人に来てもらいたい」という思いを共有するに至った<sup>230</sup>。つまり、限界状況に陥ったことで、旧来の地域内の再生産のあり方にこだわりすぎず、外部者を受け入れるという新たな地域社会の持続の方法と実践が見出された。ボランティアに来ていた都市住民も、池谷集落の人びとや自然に触れて「村の人から元気をもらった」と感じて、リピーター化する者が出ていた。

交流に手ごたえを感じた池谷集落の住民たちは、集落消滅の危機感から全世帯で合意して移住者受け入れに取り組んだところ、2010 年に 30 代男性 P 氏が地域おこし協力隊として家族 3 人で移住、翌年に 20 代女性 2 名が農業や地域づくりに関わりたいと移住した<sup>231</sup>。

こうした動きに注目して、飛渡地区振興会も地域おこし協力隊制度を活用して移住者の受け入れを行うことにした。飛渡地区振興会の事務局は地区公民館が担っているため、地域おこし協力隊（以下、協力隊とする）の拠点地区公民館となり、6 代目地区館主事（2004～2014 年。濃実会初代会長）が協力隊の管理業務を担当した。月 2 回の協力隊活動報告会議では、振興会の要望と協力隊の意見のつき合わせに地区館主事が調整役として関わる形で、協力隊がどのように活動するかという検討がなされた。また、地区館主事は、協力隊に自己紹介や一年間の活動報告を書くよう勧めて、それを飛渡地区で全戸配布される地域住

<sup>229</sup> 「新潟日報」2006 年 10 月 23 日。

<sup>230</sup> 池谷集落会『村の灯りを未来へ～池谷集落 10 年の軌跡～』2015 年。「市報とおかまち」2013 年 11 月 10 日号・2016 年 1 月 10 日号。

<sup>231</sup> 多田朋孔ら、前掲、pp.56-77。

民の文集「わらぼし<sup>232</sup>」（年 1 回発行）に掲載した。

加えて、地区館主事は協力隊が「地域になじみやすいように」との意図で、協力隊に地域行事やイベントの情報提供を行った<sup>233</sup>。協力隊は地区館を拠点とすることで地域団体との接点を持つことができ、地域活動や公民館活動に積極的に参加して地域に溶け込む機会を得ていった。特に、郷土民謡の伝承に取り組む「合わせおけさ保存会」には多くの移住者が参加するようになり、踊りを通して新旧住民が交流する場となっていた。

このように、地区館主事は協力隊の活動支援として、移住者と地元住民が互いを知り合うきっかけづくりや、両者の意見を聞いて調整する役割を担っていたといえる。

第二に、地域社会構造の再編にむけて、より広い空間軸の公共圏を設定して、提案する働きについてである。2012 年、地区館主事は校区を越えた交流を広げていくために、協力隊 P 氏に「集落またがって何か取り組みができるようにしたい」と投げかけた<sup>234</sup>。P 氏は活動を通して知り合った移住者や様々な世代の地元農家 10 数名に声をかけて交流会を行った。交流会では、農業のこれからに関する意見交換が行われ、「飛渡の食と農を考える会」（以下、食農会とする）を結成して、農業の活性化に向けた活動を行うことになった。会の事務局は協力隊が担当した。最初は、臨時直売所を作って地元高齢者が作る野菜の販売から始めたが、次第に地元給食や飲食店向けなど販路を広げていった。協力隊が「合わせおけさ保存会」で知り合った地元高齢者の協力を得て生産登録者数を増やして扱う品目を広げたことで、売り上げは増加した<sup>235</sup>。食農会の結成は、移住者を起点に飛渡地区内の農業者ネットワークが形成される契機だったと捉えられる。

## （2）地域づくりにむけた多様な住民の組織化：飛渡の未来を創る会の結成

P 氏は、協力隊の任期後も飛渡地区に定住して食農会の活動に取り組み、農産物の飛渡ブランド化や雇用を生む組織化を模索していた。また、会の活動を通して飛渡地区内に「みんなで色々考えて活動」したい人々が増えたと感じていた<sup>236</sup>。折しも農水省が、地域住民主体の将来ビジョンづくりや、集落営農組織等を活用した集落間のネットワーク化を支援する「農村集落活性化支援事業」の募集をしていたことから、P 氏は飛渡地区を対象に申請したところ 2015 年度に採択された。この事業に取り組む団体として、飛渡地区の振興会、地区公民館、飛一小、食農会、市役所農林課で「飛渡の未来を創る会」が組織された。P 氏は活動を始めるにあたって、全集落を回って説明会を開いた。そこには、青年会議や飛渡を考え

<sup>232</sup> 1973 年から飛渡地区公民館が取りまとめて発行している地区住民の文集。もともとは、飛渡地区内の各婦人学級で文集が製作されていたが、戸数の減少で各婦人学級単位ではそれが困難となったことから、飛渡地区全域の女性たちの文集としてスタートした。次第に、子どもたちや男性など、多様な地域住民の文章が寄せられるようになった。

<sup>233</sup> 公益財団法人あしたの日本を創る協会「まち むら」137 号、2017 年 2 月。  
<http://www.ashita.or.jp/publish/mm/mm137/mm137-2-5.htm>（2019 年 6 月 19 日閲覧）

<sup>234</sup> 同上。

<sup>235</sup> 同上。

<sup>236</sup> 元地域おこし協力隊 P 氏へのインタビュー（2017 年 10 月 30 日実施）。

る会、濃実会の OB や現会員が多く集まり、彼らは P 氏の話に耳を傾けて地域づくりの方向性について議論した。

最初の活動として、地区全体から住民が地区公民館に集まり、「飛渡将来ビジョンづくりワークショップ」が行われた。食農会に関わる移住者や若手農家が中心スタッフとなって進行的した。参加者には振興会など地区の役を担う壮年以上の男性が多いものの、移住者や女性、7 代目地区館主事（2014 年～現在）と事務職員も一緒に「今後飛渡地区でやりたい事」について意見交換した。とはいえ女性はこのような場に出てきにくいとの配慮から、ワークショップの「女子会」も別日に行われた<sup>237</sup>。

ワークショップの結果、3 つの部会が作られた。「農業」部会に加え「教育・福祉」「交流」部会ができたことにより多様な属性の住民が会に関わりやすくなった。各部会のリーダーには青年世代も登用された。各部会の内容は、住民自身が飛渡地区の強みと弱みを検討して決定した。農業部会はコメのブランド化と販路拡大、教育・福祉部会では親子向けの運動クラブと春休みの学童保育運営、交流部会では新水集落の伝統行事を地区内外の交流に活かす取り組みが進められた<sup>238</sup>。地区館主事は、当会の動きを役員から聞いて把握するようにしており、メンバーの相談にのったり事務的依頼に協力している。

飛渡の未来を創る会の意義とは、地域課題の共有や地域づくり実践に多様な属性の住民が協同して取り組むという、協同的自治の場が生み出された点だといえよう。注目すべきは、いま振興会など地域の役を担う世代となった地域づくり実践の経験者たちが、彼らだけで地域運営を掌握しようとせず、青年や女性、移住者の提案を受け止め、ともに地域づくりを進めようとしていることである。今なお振興会は年長男性中心の団体だが、飛渡の未来を創る会と振興会は協力関係にあることから互いの動向を把握し合うため、年長男性の考えだけで地域の意思決定を行う形から脱しつつある。よって、現段階は飛渡の未来を創る会を介して多様な属性の地域住民が地域の意思決定過程に参画する回路が開かれた段階とみることができる。つまり、属性によって地域社会への意見表明や活動を制限されてきた状況が改善されていることが確認できる。

以上の展開における地区公民館の役割は、地域団体の動きを把握したうえで、会場提供や事務、相談に対する助言を行うことであった。側面支援中心といえるが、これまでの地域づくり実践を経験してきた地域住民が、住民同士の対話的關係を重視しつつ主体として活動を展開する力量を形成しているからと考えられる。それは、長期間にわたって蓄積された公民館実践によるものといえよう。ただし、女性を含め社会的に排除されがちな人々の十全的な参画は、まだ途上にあるといえるだろう。

---

<sup>237</sup> 「飛渡の未来を創る会女性会のご案内」。2015 年年 9 月 10 日に飛渡地区全戸配布。

<sup>238</sup> 飛渡未来を創る会「飛渡未来を創る会通信」第 1-3 号。2015 年。（飛渡地区公民館収蔵）

## 5. 新たな文化の公共圏の形成・拡張を支える学習支援機能の検討

飛渡地区の事例に即して、新たな文化の公共圏の形成・拡張における公民館の役割は以下に三点に整理できる。

まず、公民館による住民の組織化の方法の特徴から検討する。本事例では、地域づくり団体を組織する際、公民館の問題意識を強く提起することで地域住民の組織化が進展した。公民館が力点を置いていたのは、日常的に出会わない、ともすると分断されかねない人びとの信頼関係の構築に力を注ぐ支援であった。

その際、青年など地域社会の周辺層が持つアイディアを公民館が尊重し、実践まで高める支援をした上で、年長男性など他の属性の住民と意見交換する機会をつくるという展開の仕方が、重要であったと考える。すなわち、公民館が周辺層の主体形成と彼らの活動を公的に保証しているのが地域社会に示されていたことで、発言力の異なった者どうしても比較的对等に対話することにつながり、地域社会に軋轢や分断が生じにくかったといえよう。

本事例における住民の組織化とは、周辺層の主体形成の実践を基軸とした、中心層を含む異質な属性の住民との協同的關係の構築であり、一部の集団の視点が地域的視点へと高められていく過程だったと考えられる。すなわち、地区や世代、性別を超えたつながりを作り出す実践が広がることで、地域社会の慣習や規範に基づいていた従来の住民の関係性が再構築されていったという点で、つながりを生み出す実践が展開する新たな文化の公共圏と旧来の公共圏が統合し再構成されたといえる。こうして、協同的自治の実現への一步が拓かれたといえよう。この過程の蓄積によって、漸進的に飛渡地区の住民間に対話的協同的關係が着実に広がっていったと考えられる。

第二に、公民館が地域住民の協同的關係を構築するためにどのような活動を編成したか、という点から検討する。新たな文化の公共圏の拡張を推し進める内容とはどのようなものだったのか。

飛渡地区の地域づくりを前面に掲げた一連の取り組みの出発点は「飛渡再発見講座」という地域の自然や文化のいいところ探し（地元学的実践）であった。この学習の成果を基盤に、青年会議と飛渡を考える会による「田毎の月」観月会や、濃実会による「ふるさと環境学習」などを通して、地区館は地域づくりにむけた住民の組織化を支援しており、地域の自然・文化を守り育てる視点や子どもの教育という視点から、校区をこえた住民で地域の価値を共有することを目指す学習実践を創出してきたといえる。地域に根ざした文化・教育という文化的次元の内容は、活動をめぐって住民同士が参画・合意形成しやすく誰もが参画できる点、活動そのもの楽しさが感じられる点が重要であった。濃実会の政治学習がすぐ中止されたように、政治経済という地域社会構造の利害に直接的に関わる学習が地域づくりのビジョンの合意形成なく行われると、対立が起きやすく関係そのものが崩壊しかねなかった。一方、地域の自然・文化や子どもの教育をテーマとすることは共感を生みやすく様々な属性を超えてつながりを形成するツールになりうると考えられる。特に、青年や女性など、地域社会の周辺層に位置する人々が地域づくりに参画し始める契機となっていた。

このように、地区公民館が提示する課題は、利害対立する内容ではなく地域社会で広く承認されやすい課題であったということは、つながりや信頼関係を構築することを一貫して目指してきたからだと理解できる。地域づくりにむけた住民の組織化の出発点として、地元学のような実践は多様な地域住民を組織化しやすく、前章のような価値をめぐる対立が起こりにくい地域づくり実践だと評価できる。ただし、表面的な学習にとどまれば、岩崎のいう「スピニアウト」につながり、生活に根ざした地域の価値を意識化するには至らないという限界をふまえて、地域づくりの学習実践を構造化することが求められよう。

また、直接的に地域づくりを意図した組織化ではない、スポーツ・文化活動を通した住民の組織化の意義も見逃してはならない。食農会では、協力隊が合わせおけさ保存会で親交のあった多くの高齢農家から参画を得られたように、スポーツ・文化活動で培われた信頼関係が、地区の経済や政治に関わる地域づくり実践における協同的關係の形成にも寄与していた。ともに楽しむ仲間として過ごす経験が、旧來の關係性や権力構造に固執することなく属性を超えた対等な付き合いを促進しているのではないだろうか。住民の組織化が文化的な次元の取り組みから出発しながらも、その枠を超えて政治や経済に関する利害対立が生じかねない次元に踏み込むことを可能としたのは、地区公民館が地区全体の課題を長期的な視点から意識しており、地域社会の現状を踏まえたテーマ設定をしていく機能を担っていたといえる。

第三に、協同的關係の構築が、公民館職員が代わっても断絶することなく展開したのはなぜか。前提条件として、地区公民館は地域密着の運営を求められていたため、飛渡地区ではどの主事も、住民との日常的な交流・意見交換を徹底していたことが大きい。また、地区館のそのような姿勢が地域住民の信頼を獲得していたため、異質な属性の住民らに共に活動するよう促すという敬遠されかねない提案も受け入れられてきたといえよう。こうした地区館主事と地域住民の關係性を支えたのは、飛渡地区公民館主事の特徴として、歴代職員の多くが地元住民であることが挙げられる。特に、1985 年以降、飛渡地区公民館主事の職が嘱託職員となってからは、地域に詳しい人や公民館活動の経験者が地区公民館長らによって意識的に選出されてきた。彼・彼女らは日常生活の中で、地区館主事の仕事ぶりを見てきた／見られてきた。よって、インフォーマルに地区館主事の働き方に関する実践知が継承されてきたと考えられる。

したがって、飛渡地区公民館では地区館主事が代わっても支援の方向性が大きくずれることなく、地域社会と実践のモニタリングに基づく適切な介入によって地域住民の主体形成に寄与し、地域づくり実践を連続的かつ発展的なものにすることが可能であったと考えられる。

## 6. 小括

以上、飛渡地区公民館の約 50 年にわたる実践史に即して、地域づくり集団の組織化過程を支えた公民館の学習支援機能とはどのようなものか検討してきた。まず、地区館が支援し

てきた地域づくりの協同形成過程とは、周辺層の主体形成と彼らの視点による地域づくり実践を核として新たな文化の公共圏が産み出され、中心層を含む異なる属性の住民が会い・楽しみ・意見交換しながらともに活動することで、公共圏が拡張していく過程であった。その過程で公民館は、第一に、周辺層の主体形成を支援し、第二に、分断されがちな住民の組織化に資する新たな文化の公共圏の形成にむけて、その公共圏の空間軸・時間軸の拡張を促す課題（テーマ）設定をするという役割を果たしていた。第三に、実践内容の編成においては、生活に根ざした価値を基盤とする教育・文化活動をテーマとしたことが、分断を超えた協同的關係づくりの重要な要因となっていたと考えられる。このような点から、公民館は地域住民の間に信頼関係を形成することを目的に人びとの学習支援に取り組んでいたといえよう。

## 終章

本章では、各章の要約から明らかにされたことを提示する。最後に、結論として本研究の意義と限界を述べる。

### 1. 本論で明らかにされたこと

序章では、過疎地域の内発的発展にむけて、地域づくりの主体形成をめぐる研究動向の検討を行った。先行研究では、地域社会の停滞の悪循環を断ち切る契機として、市場的価値観や都市の視点に振り回されない独自の価値観の再構築をおこなうことが焦点とされてきた。そのための方策として挙げられてきたのは、啓蒙的な手法や、地域の再生産の基軸となる文化を相対化する視点を有している外部人材の活用であった。同様に、地域社会の意思決定過程における周辺層の住民（主に女性、青年、移住者など）もまた、地域社会構造の中心的担い手が市場的価値観と親和的であるのに対して異なる価値観（生活に根ざした価値意識など）を持っているという点から、地域づくり実践への参画が求められるようになってきた。しかし、これらは新たな価値観を地域社会に持ち込んでもらうという方法にとどまっていた。

続いて、過疎地域の諸研究の到達点として岩崎正弥の場の教育論を検討した。岩崎は、住民の地域認識の転換を地域社会構造と関連付けて説明しており、地域認識の視座（価値意識）がいかに関形成されるのかという点まで踏み込んだ点が重要であった。特に、地域の価値の認識を二段階に分けて把握しており、地域資源の商品化を目指す「地域の認識論」は「地域の存在論」を土台としない場合、市場競争ばかり重視する地域づくりにとどまる場合があることを指摘しており、内発的発展を支える価値意識の構造を検討する上で示唆的だと考えた。ただし、岩崎の論は成功事例の現象的な説明にとどまり、なぜ内発的発展に資する価値が意識化されるに至るのか説明されていない。また、地域認識を転換した後の展開である、他の地域住民への新たな価値観の波及から地域社会構造の変容というプロセスについて、「社会的弱者」の活動がそれを推し進めるとするものの、「社会的弱者」とそれ以外の住民がなぜ協同できるのか、さらには「社会的弱者」がいかにして主体形成されるのかという点が不明確である点から、岩崎の論理には再検討の余地があると考えた。

この限界を乗り越えるために、価値意識や認識枠組みなどの日常意識の前提が構造的に再生産されること（「文化的再生産の構造」）に着目するアプローチを提起した。新たな価値による文化活動が行われる場を新たな価値の公共圏として把握し、活動の展開によって生じる地域づくりの展望をめぐる住民間の対立を乗り越えることで新たな文化の公共圏が拡張され、それによって地域社会構造の変容が引き起こされるとの仮説を立てた。この検討のため、外部と協働しやすく新たな価値を獲得する傾向の高い周辺層の住民に着目して、周辺層がつくりだす新たな文化の公共圏を、地域づくり実践を通して拡張することで生じる周辺層と中心層の対立とそれを乗り越えるプロセスをみることで、文化的再生産の構造の再構築過程とそれに伴う地域社会構造の変容を明らかにできると考えた。

以上の検討から、本論文の基本的な問いは、文化的再生産の構造と地域社会構造の両者が相互に規定し合い変容していく過程に即して、新たな価値意識を共有していく地域づくりの協同形成の論理を明らかにすることとした。そのために、第一の課題として、新たな文化の公共圏を形成する端緒としての周辺層の主体形成プロセス、第二の課題として、周辺層を起点とする新たな文化の公共圏の創出・拡張から地域社会構造の変容に至る論理、第三の課題として、以上のプロセスを促進する学習支援機能の解明を設定した。

以上の問いに対し、第一～三章では事例検討を行った。ここからは、新潟県十日町市の中山間地域である飛渡地区を対象として分析を実施した。

第一章では、高度経済成長期前後にかけて、飛渡地区をはじめとする市内山間部で行われた婦人学級の事例を取り上げ、周辺層（既婚女性）の主体形成を目指した当該実践の、新たな文化の公共圏の形成における意義と可能性を考察した。分析からは、同質の困難を抱える人々の組織化は、仲間との共感的関係の構築につながり、そこで行われた話し合い学習と生活記録実践は、地域社会の矛盾が生み出される構造を対象化する契機となっていた。また、生活記録を書くことは、自分の生活の中の実感に即した価値意識が対象化され、それをもとに生活を再構築したいという主体性が芽生える契機となっていた。このような矛盾を対象化する学習の蓄積によって、新たな地域社会構造の矛盾に突き当たった際も、宿命論に陥らずに、主体的に新たな価値の探索を行うことができた。例えば、地域外からみた地域の価値を浮かび上がらせようとしたり、生活に根ざした価値を再考しようとする主体的な価値形成がみられた。ただし、生活課題を実際に解決する主体としての力量を形成する学習がともなわなければ、学習は継続的に発展することができないと確認できた。

第二章では、飛渡地区内にある枯木又地区（枯木又分校区）における地域づくり団体「枯木又エコ・ミュージアムの会」が結成されるまでの経緯を中心に上げ、周辺層が生活課題を実際に解決する主体としての力量を形成する学習を継続することで、文化の公共圏が拡張し、地域社会の再編に至る論理を検討した。まず、枯木又エコ・ミュージアムの会設立の前史として、婦人学級や青年会と都市住民との交流があり、そこでは第一章で述べたように、地域社会で周辺的な存在である彼ら／彼女らが組織化され、生活記録・俳句、話し合いや交流を通して生活の中の困難や、地域に根ざした価値を対象化していくプロセスがあった。女性たちの俳句が「生活の記録であり、生活の中からにじみ出た生の叫び」との評価を得ていたように、ここでの学習は、実際の生活課題に迫るものであったことが特徴的である。

その上で、婦人学級では地域の歴史を調べる学習をもとに未来に伝えたい文化活動を創出し、青年会は都市住民との交流をもとにした地域づくり事業を実践し始めたように、それぞれが「過去—現在—未来」という時間軸と「都市—農村」という空間軸の視点を獲得する学習を経ることで、自分たちが地域の価値とみなしたものと地域住民の生活の営みの蓄積によって形成されてきたという「空間の履歴」への理解が生まれた。それによって、地域社会の生活を作り出し未来に手渡す者としての当事者意識が生まれ、時間的・空間的により

広い視点から価値があるとみなした地域資源を活かす地域づくり実践を生みだしていた。それによって、誰もがその人らしい地域との関わり方があり、それを学び合うことで地域住民が楽しく暮らしていけるという認識も形成されていた。新たな価値にもとづく文化の公共圏は、これらの実践によって生み出されたといえる。

続いて、協同形成の過程については、本事例では地区内の青年と年長男性の間で地域づくりの方向性をめぐる対立が度々確認された。年長男性は、外部による開発に依存しようとして、青年たちの事業が外部に利用されるだけではないかと不信感を抱いたり、住民主体の地域づくりへの無力感を抱いていた。しかし、それに対して青年たちは、まず、大切にしたい自然や生活文化を守りつつ稼ぐ方法を検討しようとした。両者の対立とは、地域づくりの必要性を理解して地域づくりの協同を模索するがゆえに、課題と方法をめぐって生じたものであった。特に、都市や市場との関係性をどのようなものにしていくか、という点が焦点となっていた。

青年たちは、地域が歴史性をもって形成されていることを意識化していたことで、年長男性に敬意を持って対話的に協同の可能性を模索するというかたちで対立を乗り越えようとした。第一に、地域の自然や文化を破壊せずに地域資源を創出しようという、市場的価値と生活に根ざした価値の構造化とその具体化に取り組んだ。第二に、生活文化を活かした交流による誇りの形成の学習を年長男性が追体験できるよう対話的に働きかけた。これらの取り組みを通して、地域の自然や文化を守り育てるかたちで新たな都市と市場との関係性を実現していくという展望が両者の間で共有されるに至った。このように、青年が年長男性の地域づくりへの主体性の回復に寄与しており、それが協同形成につながって、新たな価値に基づく文化の公共圏が拡張していることが確認された。

第三章では、学習支援機能として、飛渡地区公民館が支援した地域づくり集団の組織化過程を事例に検討を行った。飛渡地区公民館が支援した地域づくり集団の組織化過程とは、周辺層の主体形成と彼らの視点による地域づくり実践を核に、中心層を含む異なる属性の住民が出会い・楽しみ・意見交換しながらともに活動することで、地域づくり実践のあり方や見通しが共有されていく過程に即して、旧来の権力構造や規範に基づく地域住民の関係性から地域づくり実践に対等に参画する主体の協同的關係へと再構築されていくというものだった。その過程で公民館は、主に周辺層の主体形成によるかれらの視点の公共化や分断しがちな住民の組織化のきっかけづくりとなる文化的次元の実践の組織化を行うことで、新たな文化の公共圏の形成と、時間軸・空間軸の拡張を促す課題（テーマ）設定をするという役割を果たしていた。このような方法を通して、公民館は地域住民の間に信頼関係を形成することを目的に人びとの学習支援に取り組んでいたと考えられる。

## 2. 本論文の課題に対する結論

### (1) 本研究の成果

本論文の基本課題は、文化的再生産の構造と地域社会構造の変容過程に即して、過疎地域

における周辺層の主体形成を起点とした地域づくりの協同形成の論理を究明することであった。以下では、明らかになった点をまとめていく。

第一に、地域社会の新たな価値の生成過程を周辺層の主体形成を通して明らかにした。地域社会の矛盾が凝集して現れやすい周辺層が、生活の中での困難や不満を手がかりに矛盾を対象化し、継承すべきことや克服すべきことの再検討を行うことで、より根源的な生活の捉え直しがなされて新たな価値の意識化が起こっていた。周辺層は、中心層に追従するか否かという選択を日常的に迫られる存在であり、尚且つ問題解決の資源が制約されているため、問題解決にむけた選択に際しては、当面する問題をより深く捉え直すことが必要となる。そのため、生活を捉え直す学習活動を通して、生活がどのようにつくられているかということや、環境のありようにも目を向けることとなる。よって、意識化された価値の内容は、地域の自然や文化を捉え直す視点を含みこんだ生活に根ざした価値であった。以上から、周辺層が内発的発展に資する認識枠組みや価値意識を獲得しやすい傾向を持つという点で、地域づくりに新たな価値を提示する役割を担いうと考えられる。

第二に、地域社会構造と相互変容する文化的再生産の構造の再構築過程を明らかにしたことである。まず、周辺層は地域社会における生活のあり方を時間軸・空間軸にそって拡張する学習によって再検討することで、地域の価値を意識化した。それによって、見出した価値に基づく新たな地域の展望を現実化するための文化的公共圏を作り出した。この新たな文化の公共圏が拡張することで、生活のあり方や地域づくりの展望について問題提起されるに至ると、旧来の社会の文化・慣習との衝突というかたちで、これまで再生産されてきた認識枠組みとの対立が生じることになった。それは、地域づくり実践では市場的・都市的価値観と生活に根ざした価値観の対立となり、両者とも地域の価値を共有しつつも、都市や市場との関係をどのようなものにするかという課題意識の差異によって生じていた。その対立を乗り越える可能性は、地域の価値が先行世代の生活や労働の蓄積によって形成されてきたことを理解する学習に媒介されることで、対話に基づく相互理解としてもたらされた。その際、周辺層は生活に根ざした価値に基づく文化活動や学習実践を豊かに展開しつつ、新たな価値の実現に向けて地域社会の経済的・社会的再生産様式を作り変える実践に取り組むことで、両者の間で都市・市場との関係のあり方が納得できるものとなり、対立に折り合いが付けられていた。

さらに、都市住民も「新たな価値」の実現に協働して取り組むパートナーとなったことで、地域（枯木又）が様々な人びとの手で協働して守り育てる場として位置づき、新たな価値に基づく都市や市場との関係性の再構築が現実化していった。以上のように、新たな価値意識やそれに基づく文化を共有する協同が形成し広がっていくことで、地域社会の文化的再生産の構造の再構築が大きく進展し、地域社会構造の変容が引き起こされていくといえよう。

第三に、以上の過程において公民館が果たしうる学習支援機能とは、学習活動へのアクセスや組織化の点でハンディキャップを持つ周辺層の学習環境を作り出すことと、周辺層とほかの地域住民の間につながりと信頼関係を構築し、地域づくりの集団的主体形成につな

がるように支援することであった。そのために公民館は、地域課題を長期的な視点から意識して、地域社会の現状を踏まえたテーマ設定の学習実践を創出することで、地域の文化的公共圏の活性化や再編に取り組んでいた。このような学習支援機能は、地域社会において、文化的再生産の構造の再構築につながる新たな文化の公共圏を創出・拡張するという視点から、周辺層の地域づくりへの参画の回路を拓くことに寄与していた。したがって、公民館は地域課題に取り組む集団的主体を広域的に形成する上で、住民の信頼関係の構築を支える固有の役割を担っているといえる。

以上を踏まえると、枯木又の事例と飛渡地区公民館による事例における文化的再生産の構造と地域社会構造の相互変容のあり方を比較すると、枯木又の事例は生活に即して文化的公共圏を再構成しており、地区公民館の事例は対照的に生活の中の葛藤から離れたところで再構成しようとしていた。また、枯木又の事例では対立が生じることになり、対立を乗り越えるためには地域の価値を先行世代の生活や労働の成果として捉える学習に基づく対話的関係の構築が行われていたが、地区公民館の事例では、そもそも対立を回避して住民の組織化を図ろうとしていた。この両タイプの実践が相互に前提し合って展開することで、日常意識の前提（岩崎のいう「認識としての場」）が再構成され、文化的再生産の構造変化を引き起こすことにつながる文化的公共圏の再構成が可能になると考えられる。

## （2）本研究の意義

### ① 過疎研究への示唆

これまでの過疎問題研究における担い手形成の議論では、地域住民の価値観の再構築から地域社会構造の変容に至るプロセスが不明確であり、特に、どのように新しい価値意識が生まれてくるのか、新しい価値観は地域社会の中でどのように共有されていくのかという論点が解明されていなかった。岩崎の場の教育論では、認識枠組みの再構築と地域社会構造の変容を関連付けてとらえようとしていたものの現象的な理解にとどまっており、新たな分析枠組みとして十分なものではなかった。また、地域社会の周辺層への着目についても、先行研究では、周辺層を地域社会の中での支配的な価値観を相対化する新たな価値を持ち込んでくれる者という、地域づくりを推進するための手段として位置づけるものが中心であり、周辺層が主体的に参画する意義を踏まえたものではなかった。

このような先行研究の限界に対して、本研究では、客体化されがちな周辺層が主体化するための条件が、時間軸・空間軸の拡張につながる学習であることを示した。また、それは生活や地域の矛盾を意識化するだけでは達成されず、それが必然的に引き起こす地域内の対立を経て実現することを確認した。従来の過疎問題研究では、地域内の対立はリスクとして認識される傾向があったが、この研究では、対立の局面こそが新たな主体・集団的主体の形成の可能性を拓くことを示した。

このような学習を組織する契機として公民館が存在していたことは、公民館や社会教育が地域づくりにおいて果たすことが出来る役割と果たすべき役割を示したといえる。

次に、実践上の意義としては、これまでの地域づくりにむけた取り組みでは、旧来の価値意識を転換するための実践として、地元学や都市農村交流の可能性が中心的に語られてきたが、外の視点から見える地域の価値を学ぶだけの学習に陥りやすく、地域づくりにつながらない場合があることが問題とされてきた。本研究からは、地元学のような学習実践がその意義を発揮するのは、地域の自然や文化のいいところを再発見するという内容的に、地域づくりにむけた住民の組織化において日常の利害を超えてつながりを作りやすい点であると考えられる。ただし、表面的な学習にとどまると、生活に根ざした地域の価値を掘り下げていくことは難しかった。それに対して、枯木又の事例からは、生活の中の矛盾を見つめ、それを乗り越えようとすることで生活を高める主体性や新たな価値意識が生まれることや、古い価値意識が再生産される文化・慣習を変えようとする新たな文化活動が豊かに広がっていくことで、地域社会の中で新しい価値意識が共有されて多様な地域づくり実践の創出につながっていく可能性が拓かれることを示したといえる。また、地域社会の中心層が単に周辺層に地域づくりを担うよう期待するのではなく、地域社会の様々な立場の人々の声を聴き合い、対話して共に地域づくりに取り組むことの重要性も示すことができたと考える。

本研究で見たような婦人学級や生活記録実践と同様の学習実践を組織することは、現代においては難しいかもしれない。しかし、「飛渡の未来を創る会」設立にむけたワークショップで、あえて女性だけで話す「女子会」が行われたように、その地域社会において公共的意思決定の周辺に位置するような地域住民が集い、語り合う場を創出し、そこで生活の中の不満や不安、地域に根ざした価値を掘り下げて共有することは可能である。こうした生活を見つめる実践に丁寧に取り組みつつ、その上で地元学・地域学のような日常と異なる視点から地域をみる実践と往来することで、地域住民の学び合いが促進され、地域づくりの協同形成が展開していくのではないだろうか。

都市農村交流については、農村活性化にむけた移住・定住対策の入り口として政策的にも一層重要視されている<sup>239</sup>。グリーン・ツーリズムや体験事業、直売所やレストランなどは交流人口を増やしていく取り組みとしても、経営の多角化という側面からも推進されている。しかし、地域づくりの協同形成を考える上では、都市住民を消費者にとどめないような、共に地域を楽しんだり、お互いの困りごとを共有したりする関係性を構築する都市農村交流のあり方を模索することが鍵になってくるだろう。

## ② 社会教育研究への示唆

本研究は、地域社会教育研究にいかなる貢献ができるだろうか。従来の成人学習の議論が個人主義的な観点からなされてきたのに対し、地域学習論では、地域を学習の方法や対象として位置づけるのではなく、学習主体の存在論的基盤として理解すべきとの視点を掲

---

<sup>239</sup> 農林水産省・人口減少社会に対応した農村整備研究会「人口減少社会における農村整備の手引き：魅力ある農村を未来に継承するために」2015年10月。

げている<sup>240</sup>。宮崎は、自己形成の基盤となるコミュニティを協働によって自治的に創造するという発達モデルを「コミュニティ・エンパワメント」モデルとして提起しており<sup>241</sup>、これに関連して本研究では、過疎地域の地域づくり実践に即して、地域づくりの過程と集团的主体形成の相互関連を動態的に論じたことから、当該モデルを実証的に検討するための枠組みを構築する上で示唆を持つものとする。

また、個人の発達と地域社会の発展を促す学習を支援するものとして地域社会教育を捉えるならば、その重要な拠点のひとつとして公民館はどのような機能を果たすことが期待されるだろうか。佐藤一子は、公民館を「学びの公共空間」として政治的な公共空間とは異なる固有の空間と捉えて、地域に根ざしたノンフォーマル教育の中核施設であり、内発的発展への人々の英知を集める可能性を持つもの<sup>242</sup>と指摘する。その可能性は、いかにして実現できるだろうか。本研究では、公民館で行われたのは意識変容の学習だけではなく、文化的な活動を手掛かりに地域社会関係を再構築したり、新たな地域社会のビジョンを協働で生み出し、それを現実化する実践の組織化を支援したりするなど、地域社会の中に新たな文化を創り出す活動を支援していた。公民館が、地域社会構造の直接的な組み換えをするわけではないが、新たな価値意識に基づく具体的な活動を地域の中で生み出して展開していけるよう支援することで、地域に新たな文化を育んでいくことが、地域社会教育における公民館の重要な機能だと考えられる。もちろん、それは社会が解決を求める課題に取り組む担い手をつくる（動員する）ためではなく、誰もが自治の主体として地域社会に参画できることを保障するためのものである。

### 3. 本研究の限界と今後の展望

本論文では、「文化的再生産の構造」という概念で日常意識の前提が再生産される構造を捉えようとしたが、価値意識と認識枠組みの関連など厳密に論じられていない。また、今回は一地区における文化的再生産の構造として述べてきたものの、実際には日常意識の前提に影響を与える文化的次元は、地域の慣習・規範にとどまらないであろう。より概念の精緻化が求められる。

本論文でとりあげた事例は、一地区内の地域づくり集団の組織化である。主に、地区内の地域住民の公共的意思形成における位置や価値観の差異による対立に焦点化していったに過ぎない。権力構造でも、今回は性別や年齢による差異を重視したものの、経済的・政治的な力の差異や、同じ属性の中での差異までは踏み込めなかった。今後は、行政や民間企業などの多種多様なアクターの存在も射程に入れ、地域社会における権力関係や価値対立の複雑さを踏まえた地域づくりの協同形成論の構築が課題だと考える。

---

<sup>240</sup> 宮崎隆志「地域学習論の展開のために：『地域学習の創造』を手掛かりに」北海道大学大学院教育学研究院社会教育研究室『社会教育研究』第34号、2016年。

<sup>241</sup> 宮崎隆志「協働に基づくケア・コミュニティの意義：排除型自己形成を超えるために」『臨床教育学研究』第6巻、2018年。

<sup>242</sup> 佐藤一子『「学びの公共空間」としての公民館』岩波書店、2018年、p.148。

また、本論文で周辺層として検討したのは女性や青年であり、一般的に社会的弱者と理解されるようなマイノリティや孤立化した存在の地域住民まで射程に含められていない。今後は、自治への参画において、困難を抱える層を取残さないあり方や、教育・文化活動にとどまらない地域づくりの広がりを支える学習の詳細な検討を進めたい。

## 初出一覧

論文の一貫性を担保する観点から、大幅な加筆修正を行っている。

## 序章

書き下ろし

## 補論

- ・修士論文「過疎地の地域づくりにおける生活文化活動の意義」2010 年
- ・「地域づくり主体の形成における地元学の到達点と課題」北海道教育学会自由研究発表、2019 年 3 月

## 第一章

- ・「新潟県十日町市における婦人学級の展開—中山間地域の実践を中心に—」北海道大学大学院教育学院社会教育研究室『社会教育研究』第三十三号、2015 年

## 第二章

- ・「過疎地域における自律的地域づくりにむけた地域住民の協同形成—新潟県十日町市山間部集落・枯木又の取り組みを事例に—」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』135 号、2019 年
- ・「中山間地域における都市農村交流がはぐくむ小さな自治—「枯木又エコ・ミュージアム」の会」を事例に」『社会教育・生涯学習研究所年報』第 13・14 号、2019 年

## 第三章

- ・「中山間地域における自治にむけた協同的関係の構築に資する公民館の役割—新潟県十日町市飛渡地区公民館を事例に—」『日本公民館学会年報』16 号、2019 年

## 終章

書き下ろし

## 引用・参考文献

- 安達生恒『過疎地再生の道』日本経済評論社、1981年
- 秋津元輝ほか編『農村ジェンダー：女性と地域への新しいまなざし』昭和堂、2007年
- アグリネクスト編集部『「農の世界」を耕す：発想転じて大発見。』ローカル通信舎、1998年
- 岩崎正弥・高野考子『場の教育』農山漁村文化協会、2010年
- 池谷集落会『村の灯りを未来へ～池谷集落10年の軌跡～』2015年
- 上村政基「十日町市中条婦人学級のあゆみ」『月刊社会教育』国土社、1961年1月号
- 内山節『共同体の基礎理論：自然と人間の基層から』農山漁村文化協会、2010年
- 「エコミュージアム」文部科学省HP、  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/014/shiryo/07082703/002.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/014/shiryo/07082703/002.htm)、  
(2021年1月9日閲覧)
- 江田忠「東北農村婦人の生活と学習にみる変容と停滞」『婦人の学習』東洋館出版社、1967年
- 江田忠「生活記録運動」『社会教育の方法』東洋館出版社、1973年
- 岡田知弘『地域づくりの経済学入門：地域内再投資力論』自治体研究社、2005年
- 小栗有子「「奄美遺産」の地元学的展開の提案～その理由と目的～」『鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報』10巻、2013年
- 小田切徳美編『農山村再生に挑む』岩波書店、2013年
- 小田切徳美『農山村は消滅しない』岩波書店、2014年
- 小田切徳美・筒井一伸編著『田園回帰の過去・現在・未来：移住者と創る新しい農山村』農山漁村文化協会、2016年
- 小田切徳美・橋口卓也編『内発的農村発展論』農林統計出版、2018年
- 兼松芽永「「循環する場所」としての枯木又一エコ・ミュージアムと／から大地の芸術祭へ」  
2012年度みんぱく若手研究者奨励セミナー報告資料
- 北川フラム『大地の芸術祭』角川学芸出版、2010年
- 北川フラム『美術は地域をひらく：大地の芸術祭10の思想』現代企画室、2014年
- 北川フラム『ひらく美術：地域と人間のつながりを取り戻す』筑摩書房、2015年
- 北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動：東北農村の青年・女性たち』岩波書店、2014年
- 『月刊社会教育』（特集：地域にこだわり、地域に生きる）国土社、1992年5月号
- 『月刊公民館』（特集：地域、再発見）2006年12月号
- 河本大地「「都市農村交流」を中心としてきた日本のグリーンツーリズムの課題とあり方」  
『神戸夙川学院大学観光文化学部紀要』（5）、2014年
- 小林文人・佐藤一子編『世界の社会教育施設と公民館』エイデル研究所、2001年
- 公益財団法人あしたの日本を創る協会「まち むら」137号、2017年2月。  
<http://www.ashita.or.jp/publish/mm/mm137/mm137-2-5.htm> (2019年6月19日閲覧)

松田鉄夫「つまりからひとこと：「豪雪と過疎と」の虚像と実像」『月刊社会教育』1977年、12月

佐藤一子編著『地域学習の創造：地域再生への学びを拓く』東京大学出版会、2015年

佐藤一子『地域文化が若者を育てる：民俗・芸能・食文化の地域づくり』農山漁村文化協会、2016年

佐藤一子『「学びの公共空間」としての公民館』岩波書店、2018年、p.148。

澤村明編著『アートは地域を変えたか：越後妻有大地の芸術祭の13年：2000-2012』慶応義塾大学出版会株式会社、2014年

敷田麻実「よそ者と地域づくりにおけるその役割に関する研究」北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院『国際広報メディア・観光学ジャーナル』9巻、2009年

島田修一・辻浩・細山俊男・星野一人『人間発達の地域づくり：人権を守り自治を築く社会教育』国土社、2012年

社会教育推進全国協議会『社会教育研究No.5：自分史・生活史学習の検討』1986年

鈴木敏正『自己教育の論理：主体形成の時代に』筑摩書房

鈴木敏正『「地域をつくる学び」への道』北樹出版、2000年

鈴木敏正編著『社会的排除と「協同的教育」』御茶の水書房、2002年

鈴木敏正『新版：生涯学習の教育学』北樹出版、2008年

鈴木敏正『持続可能で包摂的な社会のために』北樹出版、2012年

総務省ホームページ「地域おこし協力隊」、  
[https://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/c-gyousei/02gyousei08\\_03000066.html](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html)（閲覧日2020年6月26日）

高橋満「序：国家、地域づくりと社会教育」日本社会教育学会年報編集委員会『日本の社会教育第63集：地域づくりと社会教育的価値の創造』東洋館出版社、2019年

多田朋孔・NPO法人地域おこし『奇跡の集落』農文協、2018年

田村達夫「妻有のかあちゃんの生活と文集」『月刊社会教育』国土社、1965年11月号

田村達夫『「豪雪と過疎と」その後』全日本社会教育連合会編「社会教育」、1977年11月号

丹間康仁『学習と協働：学校統廃合とめぐる住民・行政関係の過程』東洋館出版社、2015年

辻智子「農村で女が「生活を書く」ということ—1945-1960年代の生活記録運動から—」『国立婦人教育会館研究紀要』2号、1998年

鶴見和子『内発的発展論』東京大学出版会、1989年

十日町市教育委員会、新潟大学社会教育研究室『出稼ぎ農民とその家族の生活—へき地山村の社会調査』1966年2月

十日町市辺地調査プロジェクトチーム「辺地調査報告書」1974年

『十日町市史 通史編5 近現代二』1997年

徳野貞雄「農山村振興と都市農村子関活動の類型化」『文学部論叢』96、2008年

徳野貞雄・柏尾珠紀『T型集落点検とライフヒストリーでみえる家族・集落・女性の底力：

限界集落論を超えて』農山漁村文化協会、2014 年

内閣府 平成 26 年度「子どもと家族・若者応援団表彰」について  
<https://www8.cao.go.jp/youth/ikusei/katudou/h26/html/p-65.html> (2019 年 7 月 4 日閲覧)

新潟県教育委員会、新潟大学社会教育研究会、十日町市教育委員会『デバタ従事婦人の生活実態の調査と研究』1965 年 2 月

西山未真「地域再生のための農村女性起業の役割と課題」『村落社会研究』第 48 集、2012 年

日本社会教育学会編『成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版社、2004 年

日本社会教育学会編『地域づくりと社会教育的価値の創造』東洋館出版社、2019 年

日本村落研究学会編『村落社会研究第 41 集：消費される農村：ポスト生産主義化の「新たな農村問題」』農山漁村文化協会、2005 年

日本村落研究学会編『村落社会研究第 43 集：グリーン・ツーリズムの新展開：農村再生戦略としての都市・農村交流の課題』農山漁村文化協会、2007 年

日本村落研究学会編『村落社会研究第 48 集：農村社会を組みかえる女性たち：ジェンダー関係の変革に向けて』農山漁村文化協会、2012 年

沼尾波子編『交響する都市と農山村：対流型社会が生まれる』農山漁村文化協会、2016 年

農林水産省・人口減少社会に対応した農村整備研究会「人口減少社会における農村整備の手引き：魅力ある農村を未来に継承するために」2015 年 10 月。

乗本吉郎『過疎問題の実態と論理』富民協会、1996 年

蜂屋大八「中山間地域共同体の継承と変革に関わる社会教育的研究」博士論文、2018 年

原（福与）珠里『農村女性のパーソナルネットワーク』農林統計協会、2009 年

パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』亜紀書房、1979 年

藤井和佐『農村女性の社会学：地域づくりの男女共同参画』昭和堂、2011 年

保母武彦『内発的発展論と日本の農山村』岩波書店、1996 年

保母武彦『日本の農山村をどう再生するか』岩波書店、2013 年

松永桂子・尾野寛明『ローカルに生きる ソーシャルに働く：新しい仕事を創る若者たち』農山漁村文化協会、2016 年

宮本憲一『現代の都市と農村』日本放送出版協会、1982 年

宮崎隆志「地域づくりと公民館：飯田市竜丘公民館を事例に」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』84 巻、2001 年

宮崎隆志「協同蓄積論の射程：公共性との関わりで」『社会教育研究』20 巻、北海道大学教育学部社会教育研究室、2003 年

宮崎隆志「協同における出会いと学び」『社会教育研究』22 巻、北海道大学教育学部社会教育研究室、2004 年

宮崎隆志「中間地帯の再建による社会空間の変容：「若者問題」が要請する新たな社会教育像」日本社会教育学会 60 周年記念出版部会編『希望への社会教育』東洋館出版社、2013

年

宮崎隆志「地域学習論の展開のために：『地域学習の創造』を手掛かりに」北海道大学大学院教育学研究院社会教育研究室『社会教育研究』第34号、2016年。

宮崎隆志「地域学習論の構図」『社会教育研究』第35号、北海道大学教育学部社会教育研究室、2017年

宮崎隆志「協働に基づくケア・コミュニティの意義：排除型自己形成を超えるために」『臨床教育学研究』第6巻、2018年

宮崎隆志「暮らしの思想の生成論理：地域社会教育の学習論」日本社会教育学会年報編集委員会編『地域づくりと社会教育的価値の創造』東洋館出版社、p.198。守友裕一『内発的発展の道』農山漁村文化協会、1991年

山下祐介『限界集落の真実：過疎の村は消えるか？』筑摩書房、2012年

山下祐介「日本の過疎問題の生成と展開―選択と集中から多様なものの共生へ―」『日本都市社会学会年報』33号、2015年

結城登美雄『地元学からの出発』農山漁村文化協会、2009年

横山宏編『成人の学習としての自分史』国土社、1987年

吉田弥生「過疎地の地域づくりにおける生活文化活動の意義」（修士論文）2008年

吉田弥生「過疎地の地域づくりにおける生活文化活動の意義」北海道大学大学院教育学研究院社会教育研究室『社会教育研究』第28号、2010年

吉本哲郎『地元学をはじめよう』岩波書店、2008年

ロジャー・ハート『子どもの参画－コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社、2000年

## 参考文献:生活記録文集

※原則として、同一地域の同一文集ごとに、発行年月の若い順に並べた。

※発行年ではなく発行年度が書かれていると推察される場合も、発行年としている。

※文集に、発行年のないものは「不明」とした。

## ◇飛渡地区

| ◇飛渡地区    |                      |       |                        |
|----------|----------------------|-------|------------------------|
| 1973年～現在 | 飛渡公民館「わらぼし」1～（年度末発行） |       |                        |
| 飛一地区     |                      | 飛二地区  |                        |
| 発行年      | 発行団体「文集名」            | 発行年   | 発行団体「文集名」              |
| 1962年    | 新水婦人会「廻し書き」          | 1963年 | 東部婦人会「廻し書き」            |
| 1966年    | 飛渡婦人会「とびたり」1         | 1966年 | 東部婦人会「まわしがき」2          |
| 1967年    | 飛渡婦人会「とびたり」2         |       |                        |
| 不明       | 飛渡婦人会「とびたり」3         | 1964年 | 枯木又婦人学級「またたび」1         |
| 1968年    | 飛渡婦人会「とびたり」4         | 1965年 | 枯木又婦人学級「またたび」2         |
| 1968年    | 飛渡婦人会「とびたり」5         | 1966年 | 枯木又婦人学級「またたび」3         |
| 1969年    | 飛渡婦人会「とびたり」6         | 1975年 | 枯木又婦人学級「またたび」5         |
| 1969年    | 飛渡婦人会「とびたり」7         | 1976年 | 枯木又婦人学級「またたび」6         |
| 1970年    | 飛渡婦人会「とびたり」8         | 1977年 | 枯木又婦人学級「またたび」7         |
| 1971年    | 飛渡婦人会「とびたり」9         | 1978年 | 枯木又婦人学級「またたび」8         |
| 1972年    | 飛渡婦人会「とびたり」10        | 1979年 | 枯木又婦人学級「またたび」9         |
|          |                      | 1980年 | 枯木又婦人学級「またたび」10        |
| 1967年    | 飛渡家庭教育学級「若芽」1号       | 1981年 | 枯木又婦人学級「またたび」11        |
| 1968年    | 飛渡家庭教育学級「若芽」2号       | 1982年 | 枯木又婦人学級「またたび」12        |
| 1969年    | 飛渡家庭教育学級「若芽」3号       | 1985年 | 枯木又婦人学級「またたび」13        |
| 1970年    | 飛渡家庭教育学級「若芽」4号       |       | ※「またたび」4号は所在不明         |
| 1971年    | 飛渡家庭教育学級「若芽」5号       |       |                        |
| 1972年    | 飛渡家庭教育学級「若芽」6号       | 1976年 | 枯木又婦人学級「枯木又を調べる」1      |
| 1973年    | 飛渡家庭教育学級「若芽」7号       | 1977年 | 枯木又婦人学級「枯木又を調べる」2      |
| 1974年    | 飛渡家庭教育学級「若芽」8号       | 1978年 | 枯木又婦人学級「枯木又を調べる」3      |
| 1975年    | 飛渡家庭教育学級「若芽」9号       |       |                        |
| 1976年    | 飛渡家庭教育学級「若芽」10号      | 1977年 | 枯木又母の句会「山の灯」           |
| 1977年    | 飛渡家庭教育学級「若芽」11号      | 1979年 | 枯木又母の句会「山の灯：第二集」       |
|          |                      | 不明    | 枯木又母の句会「山の灯：第三集」       |
| 1963年    | 池入婦人学級「まわしがき」1       | 不明    | 枯木又母の句会「山の灯：第四集」       |
| 1968年    | 池入婦人学級「まわしがき」2       | 1986年 | 枯木又母の句会「山の灯：第五集」       |
| 1969年    | 池入婦人学級「私の一日」         |       |                        |
| 1969年    | 池入婦人学級「いけいり」4        | 1994年 | 枯木又婦人学級『枯木又のうた』（版画絵本）  |
| 1970年    | 池入婦人学級「いけいり」5        | 1997年 | 枯木又婦人学級『龍王様のはなし』（版画絵本） |

|       |                   |
|-------|-------------------|
| ◇中魚沼郡 |                   |
| 発行年   | 発行団体「文集名」         |
| 1962年 | 「妻有のかあちゃん」第一集     |
|       |                   |
| ◇下条地区 |                   |
| 発行年   | 発行団体「文集名」         |
| 1960年 | 下条地区公民館「ざっそう」創刊号  |
| 1960年 | 下条地区公民館「ざっそう」2号   |
| 1962年 | 下条婦人学級「ざっそう」創刊号   |
| 1963年 | 下条婦人学級「ざっそう」2     |
| 1964年 | 下条婦人学級「らくがき帳」     |
| 1967年 | 下条地区公民館「お母さんの目」   |
|       |                   |
| 1966年 | 二子婦人会「二子のかあちゃん」1  |
| 1967年 | 二子婦人会「二子のかあちゃん」2  |
| 1968年 | 二子婦人会「二子のかあちゃん」3  |
| 1969年 | 二子婦人会「二子のかあちゃん」4  |
| 1970年 | 二子婦人会「二子のかあちゃん」5  |
|       |                   |
| 1966年 | 慶地婦人会「けいじのかあちゃん」1 |
| 1967年 | 慶地婦人会「けいじのかあちゃん」2 |
| 1968年 | 願入婦人会「わらび」1       |
| 1969年 | 願入婦人会「わらび」2       |
| 1970年 | 願入婦人会「わらび」3       |
| 1971年 | 願入婦人会「わらび」4       |
|       |                   |
| ◇吉田地区 |                   |
| 発行年   | 発行団体「文集名」         |
| 1961年 | 山谷つくし会「らくがきノート」   |
| 1961年 | つくし会「私的一天」        |
|       |                   |
| 1961年 | 北鑑坂若草会「わかくさ」3     |
| 1962年 | 北鑑坂若草会「わかくさ」4     |
|       |                   |
| 1963年 | 吉田地区婦人学級「信江」1     |
| 1964年 | 吉田地区婦人学級「信江」2     |
| 1965年 | 吉田地区婦人学級「信江」3     |
| 1966年 | 吉田地区婦人学級「信江」4     |
| 1967年 | 吉田地区婦人学級「信江」5     |
| 1968年 | 吉田地区婦人学級「信江」6     |
| 1969年 | 吉田地区婦人学級「信江」7     |
| 1970年 | 吉田地区婦人学級「信江」8     |
|       |                   |
| 1963年 | 鉢婦人学級「らくがき」1      |
| 1964年 | 鉢婦人学級「らくがき」2      |
| 1965年 | 鉢婦人学級「らくがき」3      |
| 1966年 | 鉢婦人学級「らくがき」4      |
| 1967年 | 鉢婦人学級「らくがき」5      |
| 1968年 | 鉢婦人学級「らくがき」6      |
| 1969年 | 鉢婦人学級「らくがき」7      |
| 1970年 | 鉢婦人学級「らくがき」8      |

## 参考文献:地域資料

| 発行年         | 発行元・資料名                                    | 備考                                |
|-------------|--------------------------------------------|-----------------------------------|
| 1955年       | 「1955年度十日町市教育行政指導方針」                       |                                   |
| 1963年～1994年 | 十日町市教育委員会 社会教育事業計画書                        |                                   |
| 1965年       | 1965年度「十日町市青年学級・婦人学級・家庭教育学級計画書」            |                                   |
| 1965年       | 十日町市公民館「昭和40年度婦人学級計画書」                     |                                   |
| 1972年       | 橋本亀三郎「郷土史 飛渡」                              |                                   |
| 1974年       | 十日町市辺地調査プロジェクトチーム「辺地調査報告書」                 |                                   |
| 1974年       | 飛渡第一小学校百周年記念誌「飛一校の百年」                      |                                   |
| 1978年       | 十日町市公民館「わらばし通信」No. 3                       |                                   |
| 1979年       | 十日町市公民館「公民館情報」No. 6、1979年8月1日              |                                   |
| 1981年       | 十日町市公民館「公民館情報」No. 17。1981年5月1日。            |                                   |
| 1985年       | 十日町市立飛渡第二小学校「飛渡再発見 飛渡通信ふるさと」19号            |                                   |
| 1987年       | 十日町市教育委員会「公民館設置40周年記念シンポジウム」               |                                   |
| 1987年       | 「十日町の社会教育実践レポート集No. 7」                     |                                   |
| 1988年       | 「十日町の社会教育実践レポート集No. 8」                     |                                   |
| 1988年       | 下条地区公民館40周年記念誌「人と人の心を結んで」                  |                                   |
| 1989年       | 飛渡地区公民館35周年記念誌「三十五周年を迎えて」                  |                                   |
| 1989年       | 中条地区公民館設置40周年記念誌「愛されて40年」                  |                                   |
| 1989年       | 週報とおかまち社編「妻有郷 ムラと人びと」                      |                                   |
| 1991年～現在    | 飛渡第一小学校・飛渡地区公民館「平成2年度学習のまとめ 飛渡川を知ろう」       | (毎年年度末、このようなふるさと環境学習の学習記録を発行している) |
| 1992年       | 枯木又青年会「平成4年度まちづくり特別補助事業 地域づくり計画報告書」        |                                   |
| 1997年       | 十日町市公民館設置50周年記念事業実行委員会「公民館五十年のあゆみ」         |                                   |
| 1998年       | 飛渡第一小学校・飛渡地区公民館「心のふるさと 飛渡」                 |                                   |
| 1999年       | 当重益郎想い出集編集委員会「不利な条件を有利な条件へ 当重益郎の想い出」1999年。 |                                   |
| 1999年       | 飛渡地区公民館45周年記念誌「飛渡公民館45年のあゆみ」               |                                   |
| 1999年       | 中条地区公民館設置50周年記念誌「ふれ愛なかじょう」                 |                                   |
| 1999年       | 吉田地区公民館50周年記念誌「吉田の郷」                       |                                   |
| 2005年       | 飛渡第二小学校 閉校記念誌「ふるさと」                        |                                   |
| 2006年       | 中条小学校枯木又分校 閉校記念誌「枯木又」                      |                                   |
| 2009年       | 十日町市公民館設置60周年記念事業実行委員会「公民館60周年記念誌 集い学び結ぶ」  |                                   |
| 2009年       | お母さんのひろば編集部「べんきょうするお母さんのひろば 複製版」           |                                   |
| 2012年       | 山本丑松「新潟県十日町市入山物語」                          |                                   |
| 2015年       | 池谷集落会「村の灯りを未来へ～池谷集落10年の軌跡～」                |                                   |
| 2015年       | 飛渡未来を創る会「飛渡未来を創る会通信」第1-3号。(飛渡地区公民館収蔵)      |                                   |
| 2016年       | 飛渡の未来を創る会「飛渡地区の将来ビジョン」(飛渡地区公民館収蔵)          |                                   |
| 2018年       | 滝沢秀一「越後妻有の民俗ー私のメモ帳ー」                       |                                   |
| 2019年       | 三ツ山昔語りの会「三ツ山、私の記憶：今はなくなってしまった生活の記憶」        |                                   |

## 参考資料:十日町市社会教育職員または婦人教育研究グループメンバーの執筆記事

| 発行年   | 執筆者・タイトル・冊子名                                                         |
|-------|----------------------------------------------------------------------|
| 1961年 | 上村 政基「十日町市中条婦人学級のあゆみ」月刊社会教育5(1)                                      |
| 1965年 | 田村 達夫「妻有のかあちゃんの生活と文集」月刊社会教育 9(11)                                    |
| 1967年 | 田村 達夫「Ⅱ デバタ体操Ⅱをつくる―出機従事婦人の健康問題と取り組む」社会教育 22(10)                      |
| 1968年 | 松田 鉄夫、関口弘治「学習と学級生とをむすぶ文集―「週刊X」についての報告」月刊社会教育 12(3)                   |
| 1969年 | 中俣 保夫「生活記録文集「二子のかあちゃん」の発行を手つだって」月刊社会教育 13(8)                         |
| 1972年 | 中俣 保夫「雪,出かせぎ,出ばたと生活記録」月刊社会教育 16(11)                                  |
| 1974年 | 田村 達夫、関口 弘治「過疎に生きるひとびと―新潟県十日町市の場合(村からのレポート)」月刊社会教育 18(11)            |
| 1976年 | 滝沢 秀一、小酒井 静子「新潟県津南町の“お母さんのひろば”(ペンきょうするお母さんのひろば)」月刊社会教育 20(2)         |
| 1977年 | 田村 達夫「「豪雪と過疎」とその後(学習報告)(婦人教育<特集>)」社会教育 32(11)                        |
| 1977年 | 波形 卯二「私の職場日記―新潟県十日町市飛渡地区公民館」月刊社会教育 21(4)                             |
| 1977年 | 松田 鉄夫「つまりからひとこと―「豪雪と過疎」の虚像と実像」月刊社会教育 21(13)                          |
| 1977年 | 横山 宏「学習方法としての生活記録」月刊社会教育 21(4)                                       |
| 1980年 | 田村 達夫「今,住民に求められている施設は何か―公民館施設整備の問題として」社会教育 35(9)                     |
| 1982年 | 田村 達夫「第一に地区公民館建設十日町市の社教施設づくり」月刊社会教育 26(9)                            |
| 1982年 | 田村 達夫「暫くは冬の季節か」月刊社会教育 26(3)                                          |
| 1985年 | 田村 達夫「青年学級は生きている―新潟・十日町,37年のとりくみ」月刊社会教育 29(1)                        |
| 2012年 | 小林 宏行「社会教育フロンティア(12)田村達夫(1930~2009) 所信を忘れず、地域に根ざした活動の実践」月刊社会教育 56(3) |

## 参考資料:新聞記事

・「枯木又レポート」(十日町タイムス) No.1~No.72 (1992年5月18日~1998年4月18日)

具体的な引用記事は以下の通り

| 日付          | タイトル                            | 新聞社     |
|-------------|---------------------------------|---------|
| 1992年5月18日  | 枯木又レポート1                        | 十日町タイムス |
| 1992年7月18日  | 枯木又レポート3                        | 十日町タイムス |
| 1992年8月18日  | 枯木又レポート4                        | 十日町タイムス |
| 1992年12月18日 | 枯木又レポート8                        | 十日町タイムス |
| 1992年1月18日  | 枯木又レポート9                        | 十日町タイムス |
| 1993年2月18日  | 枯木又レポート10                       | 十日町タイムス |
| 1993年4月18日  | 枯木又レポート12                       | 十日町タイムス |
| 1994年3月18日  | 枯木又レポート35                       | 十日町タイムス |
| 1994年5月18日  | 枯木又レポート37                       | 十日町タイムス |
| 1995年8月18日  | 枯木又レポート40                       | 十日町タイムス |
| 1996年1月9日   | 「自然と共に、枯木又エコミュージアムの夢」           | 十日町タイムス |
| 1997年1月18日  | 枯木又レポート57                       | 十日町タイムス |
| 1997年7月18日  | 枯木又レポート63                       | 十日町タイムス |
| 2006年10月23日 | 「心から笑顔に：十日町旧飛渡第二小の子どもたち：中越地震2年」 | 新潟日報    |

## 参考資料:通信

| 発行年           | 通信名                              |
|---------------|----------------------------------|
| 1966～2005年    | 中魚沼郡・十日町市社会教育振興会「つまりの社会教育」 1～55号 |
| 1967～1968年    | 飛渡地区公民館「わらぼし通信」 1～40号            |
| 1978～1981年    | 十日町市公民館「わらぼし通信」 1～34号            |
| 1978～1989年    | 十日町市公民館「公民館情報」 1～30号             |
| 1993～2020年現在  | 枯木又エコミュージアムの会「枯木又クォーターリー」1号～     |
| 以下、具体的に引用した資料 |                                  |
| 1988年         | 中魚沼郡・十日町市社会教育振興会「つまりの社会教育」No. 37 |
|               |                                  |
| 1993年         | 「枯木又クォーターリー」Vol. 2               |
| 1994年         | 「枯木又クォーターリー」Vol. 6               |
| 1994年         | 「枯木又クォーターリー」Vol. 7               |
| 1995年         | 「枯木又クォーターリー」Vol. 9               |
| 1997年         | 「枯木又クォーターリー」Vol. 19              |
| 1997年         | 「枯木又クォーターリー」Vol. 16              |
| 1999年         | 「枯木又クォーターリー」Vol. 26              |
| 2016年         | 「枯木又クォーターリー」Vol. 95              |
|               |                                  |
| 1957年         | 「十日町市政だより」第6号、1957年3月15日。        |
| 1966年         | 「市報とおかまち」1966年6月15日。             |
| 1978年         | 「市報とおかまち」1978年8月10日。             |
| 1984年         | 「市報とおかまち」1984年6月10日。             |
| 1984年         | 「市報とおかまち」1984年12月10日。            |
| 1986年         | 「市報とおかまち」1986年4月10日。             |
| 1994年         | 「市報とおかまち」1994年7月10日。             |
| 2013年         | 「市報とおかまち」2013年11月10日。            |
| 2016年         | 「市報とおかまち」2016年1月10日。             |

## 資料

### 1. 飛渡地区年表

| 飛渡地区年表(地域団体・地区公民館・分館に関して) |       |                                                           |
|---------------------------|-------|-----------------------------------------------------------|
|                           |       | 飛渡地区の動き                                                   |
| 1949                      | 昭和24年 | 中条村公民館の設立。                                                |
| 1950                      | 昭和25年 | 東部分館で青年夜学会が開設される                                          |
| 1951                      | 昭和26年 | 池入・飛渡・稲原の各分館と青年講座が開設される<br>東部分館で母親学級開設される                 |
| 1952                      | 昭和27年 |                                                           |
| 1953                      | 昭和28年 |                                                           |
| 1954                      | 昭和29年 | 中条村が十日町市と合併<br>⇒飛渡地区公民館の設立<br>各分館で青年学級開設                  |
| 1955                      | 昭和30年 |                                                           |
| 1956                      | 昭和31年 |                                                           |
| 1957                      | 昭和32年 |                                                           |
| 1958                      | 昭和33年 | 郷民演芸会開催                                                   |
| 1959                      | 昭和34年 |                                                           |
| 1960                      | 昭和35年 |                                                           |
| 1961                      | 昭和36年 | 飛渡振興会発足                                                   |
| 1962                      | 昭和37年 | 池田主事から波形卯二主事へ<br>文部省委嘱婦人学級開設<br>枯木又にて、新潟子どもの会によるへき地慰問が始まる |
| 1963                      | 昭和38年 |                                                           |
| 1964                      | 昭和39年 |                                                           |
| 1965                      | 昭和40年 | 地域実態調査(新大)<br>家庭教育学級開設<br>通信婦人学級「わらぼし通信」が始められる?           |
| 1966                      | 昭和41年 | デバタ体操発表                                                   |
| 1967                      | 昭和42年 | デバタ騒音調査実施                                                 |
| 1968                      | 昭和43年 | わらぼし通信のつどい                                                |
| 1969                      | 昭和44年 |                                                           |
| 1970                      | 昭和45年 |                                                           |
| 1971                      | 昭和46年 |                                                           |
| 1972                      | 昭和47年 |                                                           |
| 1973                      | 昭和48年 | 青年団の解散<br>出稼ぎ文集「とびたり通信ふるさと」第一号発行                          |
| 1974                      | 昭和49年 |                                                           |
| 1975                      | 昭和50年 |                                                           |
| 1976                      | 昭和51年 |                                                           |
| 1977                      | 昭和52年 | 稲作講座開設                                                    |
| 1978                      | 昭和53年 | 郷土民謡講座(新水神楽)<br>第一回地区芸能祭開催<br>卓球⇒青年会の復活                   |
| 1979                      | 昭和54年 | 波形主事→水落久夫主事へ<br>第一回青年宿泊研修会(春・秋)                           |
| 1980                      | 昭和55年 | 飛渡、中条、川治青年の集い<br>青年研修会<br>壮年研修会(50代くらいまでの人を対象に)           |

|      |       |                                                                                                    |
|------|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1981 | 昭和56年 | 青年研修会<br>壮年研修会<br>地域づくり懇談会開催                                                                       |
| 1982 | 昭和57年 | 青年研修会<br>壮年研修会<br>第一回笠置山ハイキング実施<br>住民意識調査                                                          |
| 1983 | 昭和58年 | 地区内青年意識調査実施                                                                                        |
| 1984 | 昭和59年 | 「飛渡再発見」学習開始 @飛二小学校<br>飛渡再発見講座開設<br>第一回飛渡ジョギング大会実施                                                  |
| 1985 | 昭和60年 | 水落久夫主事→佐藤秀一郎主事へ<br>地域おこし青年会議設置<br>飛渡を考える会発足<br>地区振興会、青年会議、考える会の合同会、青年座談会を実施<br>市役所～県庁リレーマラソン実施(体協) |
| 1986 | 昭和61年 | 稲を育てる教室開設<br>第一回「田毎の月」を見る会<br>飛渡運動広場竣工                                                             |
| 1987 | 昭和62年 | 地域ぐるみで健康を考える会開催<br>運動広場草取りボランティア実施<br>運動広場竣工記念24時間リレーマラソン実施                                        |
| 1988 | 昭和63年 |                                                                                                    |
| 1989 | 平成元年  | 学校・社会教育・地域の連携事業「飛渡川を知ろう」開始@飛一小学校<br>シンポジウム「山間地農業のあり方を探る」<br>地域芸能を伝承する教室開設                          |
| 1990 | 平成2年  |                                                                                                    |
| 1991 | 平成3年  | 田毎の月周辺整備・桜の木植樹                                                                                     |
| 1992 | 平成4年  | 田毎の月東屋竣工                                                                                           |
| 1993 | 平成5年  | 田毎の月撮影成功・テレホンカード作成                                                                                 |
| 1994 | 平成6年  | 地域おこし青年会議と飛渡を考える会を統合→飛渡を考える会になる<br>飛一小全国小中学校環境教育賞受賞<br>枯木又エコミュージアムの会設立                             |
| 1995 | 平成7年  | 学校・家庭・地域連携にむけた推進会議を設置。                                                                             |
| 1996 | 平成8年  | 考える会を桜月会と名称変更(桜の管理と田毎の月)<br>飛渡濃実会設立                                                                |
| 1997 | 平成9年  | 濃実会が「飛渡川を知ろう」事業の主幹となる<br>田毎の月案内板取り付け                                                               |
| 1998 | 平成10年 | 飛渡運動広場に桜の植樹                                                                                        |
| 1999 | 平成11年 | 飛一小が第48回読売教育賞最優秀賞受賞                                                                                |
| 2000 | 平成12年 | 佐藤主事→大津政晴主事へ                                                                                       |
| 2001 | 平成13年 |                                                                                                    |
| 2002 | 平成14年 | 池谷分館廃止、飛渡分館に統合                                                                                     |
| 2003 | 平成15年 |                                                                                                    |
| 2004 | 平成16年 | 三ツ山分館廃止、飛渡分館に統合<br>中越地震                                                                            |
| 2005 | 平成17年 | 濃実会が青少年育成十日町市民会議主幹の、青少年健全育成成功労賞受賞<br>飛渡第二小学校閉校<br>十日町市地域おこし実行委員会設立                                 |

|      |       |                                                                |
|------|-------|----------------------------------------------------------------|
| 2006 | 平成18年 |                                                                |
| 2007 | 平成19年 | 飛渡第二小学校枯木又分校閉校<br>小貫集落閉村式                                      |
| 2008 | 平成20年 |                                                                |
| 2009 | 平成21年 | 十日町市が地域おこし協力隊制度を導入                                             |
| 2010 | 平成22年 | 濃実会が新潟県自治活動賞を受賞<br>飛一小学校がユネスコスクール認定                            |
| 2011 | 平成23年 |                                                                |
| 2012 | 平成24年 | 田毎の月観月道の復旧・観月会の再開<br>「飛渡の食と農を考える会」立ち上げ<br>十日町市地域おこし実行委員会NPO法人化 |
| 2013 | 平成25年 | 敬老会が飛渡地区全集落で合同実施                                               |
| 2014 | 平成26年 | 濃実会が内閣府より「チャイルド・ユース・サポート」章受章<br>「田毎の月を守る会」結成                   |
| 2015 | 平成27年 | 「飛渡の未来を創る会」立ち上げ<br>やまんなかマルシェinいけたに 開始                          |
| 2016 | 平成28年 |                                                                |
| 2017 | 平成29年 | やまんなかマルシェinとびたり                                                |
| 2018 | 平成30年 | 飛渡団体発表会                                                        |
|      |       |                                                                |
|      |       | (飛渡地区公民館35周年・45周年誌、十日町市公民館情報、飛渡HPから作成)                         |

## 2. 枯木又婦人学級文集「またたび」タイトル一覧

| 号・刊行日             | タイトル・名前                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1<br>1964年度       | 無題(匿名)／俳句／詩／無題／無題／無題／春の朝／無題／無題／無題／思い出／でっかいゆめ／こども会／さくらと共に去りぬ(詩)／冬は一番良い季節(詩)／夕げの支度／俳句／冬の日                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 2<br>1965年?       | 無題／無題／無題／無題／取入れ／私の思ったこと／うれしかったこと／思い出の旅行／冬／無題／大阪の従弟／無題／無題／無題／時代の相違／一年をふり返って／無題／年の暮                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| 3<br>1966年        | <子供の頃>×××(匿名)／子供の頃(匿名)／幼いころからの思い出をたどってみよう／子供の頃／子供の頃の思い出／娘嫁／×××(匿名)／<出稼ぎに夫を取られて>夫の出稼ぎ(匿名)／出稼ぎに夫を出して(匿名)／想い出すこと(皇宮勤労労働奉仕団日記(匿名)／×××(匿名)／私の思うこと(匿名)／<戦争中のこと>ぜんまいの供出(匿名)／敗戦(匿名)／戦争と青春(匿名)／×××(匿名)／                                                                                                                                                               |
| 4                 | 不明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 1967年             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 1968年             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 1969年             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 1970年             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 1971年             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 1972年             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 1973年             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 1974年             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 5<br>(1975.3.25)  | はじめに／<戦争中の体験> 戦争末期の頃(南の空は碧けれど) (当重菁子)／大東亜戦争の初期(阿部タケ)／無題(春川亀蔵)／終戦のころ(三十七才)／戦争のころの思い出(東枯木又 四十才)／父の戦死に思う(匿名)／二十年八月十五日(東枯木又 山田千代)／長岡空襲(当重菁子)／<思い出・雑感>子供の頃の少正月(東枯木又 三十四才)／実現した我が家の夢(東枯木又 阿部キクイ)／思い出(五十四才)／早朝の雪上車(匿名)／私の思い出(山田フジ)／夏の思い出(四十六才)／時代の差(匿名)／<婦人学級の学習から>一年のくらし(西枯木又学級生)／無題(匿名)／無題(西枯木又学級生)／無題／無題／無題                                                      |
| 6<br>1976年?       | またたび六号によせて(飛渡地区公民館長 池田伊勢松)／吹雪について(山田千代)／雪掘り(三十七才)／私の小さい頃と今(西枯木又 春川亀蔵)／私の思うこと(枯木又 阿部久子)／「私はワラボシである」(西枯木又 春川亀蔵)／根性ということ(当重菁子)／嫁いだ頃の思い出(五十五才)／雑感(枯木又五十五才主婦)／電気(山田きち)／死亡した娘の過去(阿部タケ)／枯木又は良いところ(東枯木又 主婦)／子どもの成長(枯木又 主婦)／雑感(西枯木又 二十八才)／娘時代の思い出(枯木又 A)／夢をもってくらしたい(東枯木又 五十三才主婦)／私の思っていること(東枯木又 一主婦)／俳句を習って(東枯木又 山田タケ)／母ちゃんの俳句 その生い立ちと作品(解説:阿部汀歩、作品:菁子、竹女、千代、多計、幸、寿江) |
| 7<br>(1977.3.25)  | 「またたび」七号によせて(池田伊勢松)／初めて仲人をして(東枯木又 山田千代)／二十年の歳月(東枯木又 三十五才)／夢(阿部久子)／今日になって思うこと(山田きち)／出稼ぎ(東枯木又 五十九才)／昔話「福は内、鬼は外」(枯木又 五十五才主婦)／過疎地(春川亀蔵)／出稼ぎ(東枯木又 五十六才)／哀情(当重菁子)／俳句(五十二才)／生活を詠う—母ちゃん俳句の四季—(阿部汀歩)／あとがき                                                                                                                                                             |
| 8<br>(1978.3.15)  | はじめに／ふるさとを求めて(当重菁子)／私の母(匿名)／思い出(阿部キクイ)／初孫(山田千代)／停電(学級生五十五才)／春を待つ(阿部キキ)／施設を慰問して(五十七才)／俳句(山田多計)／欲は恋人(匿名)／冬の夜に思う(A子)／出稼ぎの留守を守って(主婦)／戦争時代私の過去の思い出(阿部タケ)／母の死(三十九才)／雑感(三十四才)                                                                                                                                                                                       |
| 9<br>(1979.3.15)  | はじめに(地区公民館長 池田伊勢松)／冬の楽しみ(阿部久子)／私の思い出(一主婦)／成人の日に思う(当重菁子)／機を織ってみて(春川もと)／×××(春川トモ)／十姉妹の日記から(TA子)／この地に来て一年を迎えて(春川亀蔵)／枯木又の冬(学級生)／初孫(山田千代)／笠置山に登ってみて／母ちゃん俳句の四季 五十三年度の作品から(阿部汀歩)／僕の母(二年 山田良和)／私の母(二年 春川久)／私の母親(中二 阿部陽子)                                                                                                                                             |
| 10<br>(1980.3.3)  | はじめに(地区公民館長 池田伊勢松)／関白亭主と駄目女房(当重菁子)／おばさんになって(東枯木又 阿部久子)／我が部落(枯木又 学級生)／悲しい豆(山田千代)／私のつづやき(K子)／一九八〇年を迎えて(春川亀蔵)／嫁(×××)／母は思う(枯木又 一学級生)／くらしの一コマ(東枯木又 当重菁子)／ボランティア活動(春川もと)／俳句(山田千代)／龍王様の話(枯木又婦人学級)／あとがき                                                                                                                                                              |
| 11<br>(1981.3.25) | はじめに(池田伊勢松)／創作による味の妙(当重菁子)／心のページ(春川もと)／ある日の失敗(阿部久子)／大雪の話(山田きち)／×××(山田和子)／雪に想う(深井雪子)／降り積る雪(東枯木又主婦)／冬の夜(阿部寿江)／皇宮勤労奉仕団日記より(菜穂 六十六才)／俳句(山田由記)／義姉(山田千代)／×××(×××××)／女の坂(阿部寿江)／ものはとりよう(春川シモ)／愚母愚妻(当重菁子)／欲は損(阿部寿江)／ハタ織りながら(春川もと)／私の手芸(春川亀蔵)／×××(山田良和)                                                                                                                |
| 12<br>(1982.3.25) | はじめに(公民館長)／私と機織(阿部トエ)／初めての事(一主婦)／雪(主婦)／掘り起こされた友情(当重菁子)／私の思い出(山田ヨキ)／×××(阿部久子)／×××(山田キチ)／追憶(阿部寿江)／姑の死(山田千代)／私の十日町(当重菁子)／ふるさとを思う(春川亀蔵)／酒(阿部寿江)                                                                                                                                                                                                                  |
|                   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|                   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 1985年             | 飛渡地区地域文集「わらぼし」(発行元:飛渡地区公民館)への投稿に移行                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |